
花よりいづる異国の姫

まそぱっけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花よりいづる異国の姫

【Nコード】

N9179M

【作者名】

まそぱっけ

【あらすじ】

排水溝から流されるといふ乙女にあるまじき異世界トリップを遂げた超絶貧乏人、トウコ。流された先はなぜか異世界の花の中。黒髪黒眼は珍しいという異世界トリップのお約束はきかず、いきなり平凡・できそこない認定を受ける。半身という謎の役目に翻弄されつつも、トウコのもとの世界に戻るための冒険（と小銭稼ぎ）の旅が始まる。

1・花より生まれたフリーター。

異世界へトリップ。

生まれて21年、このところやたらと厳しくなってきたわが人生に、神様はとんでもなく規格外な逃げ道を用意してくれたらしい。

いつものように風呂場でシャワーを浴びながら、21年の貧乏生活で身に付けたスキル、脳内家計簿計算をしていた。来月には弟たちの修学旅行、母親の誕生日とイベントが立て続けにある。

やはり今月は締めて備えたほうがよさそうだ。

湯船にお湯は貯めずにシャワーのみで我慢しよう、と

あれこれ節約方法を考えながら、何となく排水溝に流れて消えていく水の奔流を眺めていたら。

排水溝に吸い込まれていた。

視界がぐるんとさかさまになり、頭から排水溝の穴に吸い込まれて行く。そんな自分を鏡の端にみとめた。

そんな馬鹿な、と声を上げようとするのも一瞬のこと。

ぐるぐると回転しながら私はすっぱり、穴に消えた。

意識が最初に告げたのは下水の匂い。

次に全身をねじ切られるかのような激痛。うめき声はたぶん言葉になっっていない。

悲鳴を上げるためか、酸素を求めてか開かれた口に無情にも多量の水が流れ込む。

息ができない。体がバラバラになりそうで、もがきながらも必死で自身を抱きしめた。

おかあさん。ゆきお。れんたろう。

神様の名前を知らないから、この世で私が最も大事にしている、いつも私に光を与えてくれる、その人たちの名前を呼ぶ。何度も何度も、家族の名前を、呼ぶ。

だけど助けはこなかった。

いつしか下水の匂いは消え、代わりに桃の香りのような、何とも言えない甘くて魅惑的な芳香が鼻腔を満たしていく。

どこかその匂いが懐かしくて、安らぎを覚えた私はそのまま意識を遠く手放したのだった。

気が付いて最初に意識したのは、横たわる自分の全身に伝わる、冷たい石床の感触。

ひんやりとした冷たさに全身が粟立ち、不快感に意識を揺さぶられて目が覚めた。

「あー、あたし、超バカな夢見ちゃったよ。」

排水溝に流されるってどこの一寸法師だよ。

苦笑しながらゆっくりまぶたをあける。

「うおおおおおーい！」

眼前に老婆の顔が迫っていた。思わず全力で叫んでしまう。

「しわくちゃ！」

「誰がしわくちゃじゃ」

眼前に迫る老婆が眉を寄せて素早く突っ込んでくる。言葉に対する反射神経は若者並みだ。

青い瞳に、銀色の波打つ髪。よく見ると鼻は高いし、昔はさぞ美しかっただろう。

しかしこの老婆、まるつきり外国人の顔だけと思いきり日本語を話す様子。

訳の分からない状況を少しでも把握しようとして確認がてら周囲を見回した瞬間、ボン！

脳が音を立てて爆発した気がした。

横たわる私を六方向から囲む、薄桃色の巨大な花卉。

花卉の隙間から見える景色は鬱蒼とした森林で、外から眺めた状況を想像するに、森の中にぼつねんと咲く巨大な花の中に私はいる様子であった。

私が石床だと思い寝ていた場所は花の中心部で、あるうことか私の両足は中心部にすっぽり飲み込まれている。痛くないけどどういうことかね、これは！うおー、ぬけないー！！ドッキリか、これはドッキリなのか、もしくは金持ち劇団のお遊び自主映画撮影？

じたばたと暴れる私を尻目に老婆はやれやれとばかりに首を振ると、ひとり花卉をのれんのようにかき分けるとするりと出ていってしまった。

「つて、まてーい！」

両手をかかげて追おうとするが、当然足が花に埋まっているので立ち上がることもすらできない。

そして自分が全裸なことに気付き両腕を胸にあてる私に、老婆はため息をひとつつくと戻ってきて、自分が身にまとっていた白いロブを脱いだ。

「やれやれ……わしはどうやら失敗したらしい。はようこの場から去って素知らぬふりをしたいところじゃが、ぬしにはなんの罪もない」

言いながらふわりと私の肩にロブを羽織らせてくれた。

あ、なんかいいにおいがする。薔薇の花の匂いに似ている。それに、このロブの手触り……気持ちいい。シルクっていうのかな、とても光沢があって、いつまでもほっぺたすりすりしていたい。よく見ると繊細な刺繍も施された逸品だ。

高いんだろうな。お母さんにあげたら喜ぶかな。

こういう小道具までそろえて、よほど潤った劇団らしい。

しかし、なんか薬でも飲まされたのだろうか。シャワーを浴び

てから記憶が途絶えて、気付けばこんな所だ。まさかこの老婆、誘拐犯ではないでしょうね。だとしたら、相手はお年寄り。

勝てる。

などと失礼な事をつらつらと考えていたら、急に森の奥が騒がしくなった。

キュエーツという甲高い鳴き声のあとに、バサバサという羽音。心なしか生臭い空気が花弁をすり抜けこちらまで風に乗ってやってきたような気がする。

そして。

キュエー。ズシン。キュエー。ズシン。キュエー。

…… 100歩譲ってキュエーは動物の鳴き声でしょう。

だが、ズシンは何だ？映画でしか聞いたことのないような地響きなんです。

「足音……？」

知らず言葉が漏れる。隣で老婆が苦笑するのが見えた。

「シンザ様も焦っておられるわい。しかし、不興は必至」

つぶやくと、老婆はふいに手を伸ばして私が見ただけのローブを、しわを整えたりピンと張ったりして見栄えをよくしつつもうまい具合に肌が全部隠れるように着せてくれた。

「娘よ。二つ注意がある」

老婆は私の顔の前で指を二本立ててみせる。

「ひとつ。あるじさまのお言葉にさからわないこと。ふたつ。あるじさまに先に質問しないこと。許しを得るまで口をきいてはならぬ」
あのー。3つあるんじゃないでしょうか。注意事項。

突っ込みたいのを飲み込み、これはセリフを覚えられない私への劇団の配慮だろうかと思いつつ適当にうなづく。というか、なんで私がこの大がかりな撮影に紛れ込んでいるのかいまだ分からない。

私の頼りない様子に老婆は少しだけ焦りを瞳に走らせたが、その合間にも足音はどんどん近付いてきている。既に木々の合間からはピンクがかつたうろこにおおわれた、巨大なワニを無理やり立たせ

少しいぶかしげにややペースをゆるめて。

落胆をにじませた、ゆっくりとした足取りに。

怒っているかのような、乱暴な足取りに。

そして今。

あのー、あなた、後ろに般若背負ってますよ……？

「希代の開花師ムスカが、精魂こめて作り上げた花だ。文献にもある。セスの月、アランの日、柘榴の刻に実をつけた花は、この世の至宝を生み出すと」

訳の分からないことを言いながら、花の中央にうづくまる私を見下ろす男。まとう雰囲気は最悪だが、たいそう美しい。

黒い髪に紅い細布をグルグル巻いただけの無造作ヘアーがまたワイルドで似合う。

剣呑にすがめられた形の良い両目は奇跡のような金色で、私の嫌いな爬虫類の目と似ていつつも、もっと美しい生き物を連想させた。なにじんなんだろう。アジアとどこかのハーフだろうか。

難を言えば冷たそうなどころだけが気になるが、充分美しさでカバーできるレベルだ。

「生まれいづるは、天界、澱界からも妃にと欲される美貌、崇高にして甚大な妖力を兼ね備えた絶世の美女と聞いていた」

花弁がふいにちぎられて、男が乱暴に侵入してくる。私のあごに手をかけて、くいと上向かされた。

「それがなんだ、この平凡なツラは！！ムスカあ、貴様失敗したな」

「申し訳ございません」

「妖力のかけらもねーじゃねえか！あるにしても絞りかすだ、こんなもん」

「申し訳ございません」

「だいたい、なんだこの平凡な顔は！それに色気もない！」

「申し訳ございません」

「胸は…胸もないぞ……」

人の顔をつかんだまま、ムスカという名前らしいおばあさんにす

ごいテンションで怒り散らす男。平凡平凡って同じ指摘を二回も……しつ……失礼すぎる。顔はそりや平凡ですけどね、よりによって一番気にしている胸の事を……!

おばあさん……ムスカは平謝りに謝ってるけど、私の外見のことでそんなに謝られても、どうしたらいいのかわからない。分かることはただ一つ。ムスカは、悪くない。

とりあえず男がいまだに私の顎をつかんだままなので、手を必要以上に大きく振りかぶって、思い切り手をはたいてやった。

男の目が一瞬見開き、面白そうに細められる。

「ほお……?」

「さつきから黙って聞いてたら! なんなんですか、あなたは!」

「ムスカあ!」

私が口を開くと同時に。

視界が反転していた。たぶん押し倒されたのだろうが、早すぎて何がなんだかよく分からない。

足が花に埋まったままだから、妙な体制で足が痛い。

「足も抜けきっていないような生まれたてが俺に手をあげたぞ!」

言いながら男は私の両腕をやすやすと頭の上で片手でまとめてしまった。そのまま見下ろしてくる瞳に 残忍な光が宿るのをみて、一瞬背筋が凍る。これ、お芝居だよな? どっかにカメラがあるんだよな?

ちらりとムスカを見ると、銀の髪をわななかせ、かすかにふるえていた。

「口をきいたな。俺が許可する前に」

口をこじ開けられ、無理やり指が入ってくるので嗚咽しそうになる。指で上顎をするりとなでられ、両腕に鳥肌が立った。舌もつかまれ、反射的に噛みついてやろうと口を閉じるがその前に指はするりと出ていってしまった。

「へえ、まだ抵抗するか。どうせ出来損ないだ、お前は半身になれないことだし遊んでから殺してやろうか」

「なりませぬ、シンザ様。花を血で穢せば、マガツゴトが起きます！」

ささやきにも取れる声は、必死な響きで、追いつがるようにムスカの喉から絞り出されたものだ。しかし男はどこ吹く風。

「災いなど今さら。指輪もみつからぬ、半身は礼儀もわきまえぬで、きそこないときで、大人しくしていられると思つか？おい、できそこない。俺を楽しませろ」

「シンザ様！」

ムスカの悲鳴と、男が腰から帯剣していた剣を引き抜く音が頭の上で交差した。

あー。私、わかった。

これ、夢だわ。

やっと今起きられるんだ。

起きたら今日は土曜日、早朝バイトの日だ。シャワー浴びて用意しなきゃ……。

そんなことを考えながら、私は気を失ったのだった。

異世界訪問、1日目の出来事です。

1 花より生まれたフリーター。(後書き)

はじめまして。エロなしサイドなのにムーンライトに投稿していたのを引越してまいりました。よろしくおねがいます。

2・花人は具なしカレーの夢を見る。

目前には私、竹上トウコ21歳が考えうる、世界で最も絶望的で、残酷で、無慈悲な状況が広がっている。

開け放った冷蔵庫の中にはマーガリンしか入っていないのだ。

どうしよう。今日はカレーだって由紀夫にも、廉太郎にもアナウンズしてしまった。

「じゃあいっぱい練習して腹へって帰ってきてても大丈夫だね、お姉ちゃん！」

「僕も図書館でいっぱい勉強して帰ってくるね、行ってきます」
久しぶりの、「夕食はカレー」宣言にテンションを最高潮に募らせ、部活セットのバットに制鞆をひっかけ担ぎ意気揚々と出ていく由紀夫に、その後ろを静かについていく廉太郎の細い背中を思い出し胸が締め付けられた。あんなに楽しみにしていたのに。

また、マーガリンご飯だなんて。
バイト代が今日入っているはずなのに、給料の振込日が土曜日に重なるため入金日は月曜日になってしまうこと、忘れてた。財布には今48円しかない。

家賃と電気水道代は既に払ったから当座追い出される心配はないが、今日約束していた、母さんのお見舞いに持っていくお花もケーキも買えない。

日給3万円の、危険でもいかがわしくもないバイトにありつけたから、お金には全然苦労していないって私の嘘をすんなり信じてくれた母さんに余計な心配はかけたくない。羽振りが良いふりしなきやいけないのに手ぶらなんてだめだ。

仕方ない、バイト代が入るまでお見舞いは我慢しよう。

確かルーはまだ開封してないのがあったはずだから、今夜は由紀夫

と廉太郎にも具なしカレーで乗り切ってもらおう。今月は由紀夫と廉太郎の中学、高校の修学旅行もあるし、母さんの誕生日もある。イベントが目白押しだから締めていかなければ。私はしばらくはマーガリンご飯だけでいい。

そんなことをシャワを 浴びながら考えて・・・
つてあれ！？私、いつの間にお風呂入ってたっけ？茫然とたたずむと目の端に排水溝に吸い込まれて行く水流が目に入る。水が、流れてゆく。水に打たれて濡れる全身が冷たく冷えていく。

渦の流れに意識が遠のく。同時に頭が強く痛む。痛い。だけど眠い。やはり痛い。イタイ・・・
なんだか馬鹿げた夢を見ている気がするけど、起きたくても頭が痛くて目が開けない。

そうだ、私は排水溝に飲まれて流されたのだ。
何て馬鹿げている夢。

目を開ければ目の前には見なれた絶望的な光景、マーガリンだけ置かれた冷蔵庫の中が広がっているはず。

「・・・い、・・・きろ・・・起きろよ。起きろつつつてんだろが。薄乳。おい。薄乳娘。起きろー！」

はく、にゆう・・・？聞きなれない単語にぼんやりした頭で、言葉に「薄い」と「乳」という漢字を当てはめ、カチリと符合した時点で飛び起きた。

「全国の貧乳を惑わす新たな熟語をつくるんじゃないわ・・・よ・・・」
起きつつも、周りの光景に落胆する。

マーガリンだけの冷蔵庫よりも絶望的な景色が広がっていた。
相変わらず私は花の上において、相変わらず足は花の中心に埋まっ
いて、相変わらず周りの景色は鬱蒼とした森の中だ。

少し離れたところに大嫌いなワニもどきがいて、翼をゆっくり広げ

たり畳んだりしながら、金色の目でこちらを窺うように見ている。ええい、見るんじゃない！そんな目で見たって飼いませんからね！あり得ない状況に、ドッキリか映画撮影の疑いを捨て切れずにいたが、あの生き物のリアルさはどう考えても映画のセットでは出せない。信じがたいけど、これ、現実・・・？

「異世界トリップ・・・つてやつですか・・・あはは」
ふと正面に目をやり、気を失う前とは違う光景に、思わずビクツと体を硬直させてしまった。

あの、美貌の暴力男が今は振りかざした片手を、私の鎮座する花の根元から伸びたツタのようなものに絡め取られ、両足も拘束されていた。このツタ、かなり頑丈らしくどうやら男は身動きがとれないらしい。

剣を振りかざしたままの恰好で固まるその姿は・・・かなりマヌケだ。

「ぶっ・・・あんた、何やってんすか」

問いかけると、男の隣に立ちつくし男を困惑の表情で見上げていたお婆さん・・・たしかムスカとかいう名前だった・・・が顔を青ざめさせこちらを振り返った。

そう言えば、こちらからは質問するなつて忠告されたような。

まあいいや。だってこの暴力男、なんだか知らないけど拘束されているもん。怖くなんかないよーだ。

「人のこと、いきなり押し倒して刃物振り回したあとは自分使つて緊縛ショーですかぁ？あんたマゾですかぁ？」

「お前が出した縛めだろうが！いいから早く解け、薄乳！くそつ、絞りがすみたくないな妖力しか持たないから油断した。腐っても花人か・・・」

「お言葉ですが、生まれて間もない無抵抗の花人を穢そうなどと考えたあるじ様にも否はありますぞ」

ムスカが苦々しい声ではあるが、かばうように前に出る。手にはナイフを持っているけど、刀身は無残に歯こぼれしているところから

推測するに、どうやら私が気を失っている間にツタとの戦いが繰り広げられていたようだ。

「絶世の美女を期待していたあるじ様の落胆も察しますが、本来半身とは美醜問わずにお互いを内からも外からも支え合い、力とするため神が示されたことわり。わしも開花の折、あらわれたこの娘を見た瞬間首でもつつってお詫びしようかとも考えましたが」

さりげなくひどいことを言いながら、私の座る花卉をいつくしむようにそつとなでる。

「この花の力を見て考えが変わりましたわい。妖力の込められたこの刀で持つてしても切れぬツタ。明らかに花は娘を守ろうとしておる」

ナイフをかざし、青い瞳を眇めて齒こぼれを確かめるムスカに、私は訳が分からず首をかしげるしかできない。

「えーと、話が全く分からないのですが・・・」

「おいおいお話ししよう」

「必要ない。ムスカ、俺の代わりにその娘を斬れ」

偉そうに命令する男に内心いらつとす。と、ふいに男が顔をしかめた。よく見るとツタがもう一本増えて伸び、男の足をぎゅうぎゅうと締め付けているではないか。

なんかよく分からないが、この花とはどうやら以心伝心らしい。おほほ、いい気味。

「通常マガツゴトは死者を多く出す呪い。ましてやこれなるはこのわしが100年かけて育てあげた花。あるじ様、そのくらの捕縛ですんで運がいいと思われよ。花人はこのようなみすばらしいなりですが、花自体は万年に一度の至宝の花。喜んで仕えましょう」

みすばらしい・・・今まで表立ってそんなふうの評されたことはないのだが、意外と傷つかない。やばい、平凡だの薄乳だの言われ過ぎて慣れてきたか？

顔をしかめる私を一瞥し、ムスカは嘆息するとナイフを鞘におさめた。

「よつて、わしはそなたを花人としてお迎えいたします」

両手をクロスし胸に手を当てると、老婆とは思えないよどみない所作で優雅に地面にひざをつく。

先ほどまでの苦渋を飲まされたかのような苦々しい顔とは一変し、切り替わった凜とした表情に私は思わず息を飲んだ。

「おい、ムスカ！こんなできそこないに、受迎の礼をとるつもりか！許さん、俺は認めんぞ！」

相変わらず間抜けな体制で拘束されたままの暴力男が後ろからわめくが、ムスカは首を振って退けた。

「花人は出来損ないでも、これは天界に通じる根を張った至宝の花。何度でも言いますが、おそらくあるじ様を緊縛したのもこの娘の力ではなく、花自体がこの娘を守ったものかと思われます。これは非常に珍しいこと。本来、花は自らに危害が起きない限り他者を攻撃しませぬ。花が意志を持ち、娘を花人として認めたのなら。私は花に仕える開花師、花の意志に沿いましょう」

「ならば俺は・・・その娘を半身としなければならぬのか？その薄乳を？」

絶望的なうめき声に、しかしムスカはきっぱりとうなずく。

「これもさだめ。この娘を半身とし、東の神妖を手に入れるための力とお使い下さいませ」

「何てことだ・・・今日ほど呪われた日はないな！」

がつくりとうなだれる男に一瞬憐れみの一瞥をなげかけ、ムスカは膝をついたまま私をそつと見上げた。

「数々の非礼、お許し願いたい。わしは開花師ムスカ。天界か濼界か、いずこの世界より遣わされたか分かりませぬが、花姫よ。ようこそおいで下さった」

え、いきなりそんなこと言われても。

ていうか人に膝つかれて見上げられたことなんてないし。

花姫とかわけわかんないし。

そもそも半身ってなに？いや、まず、ここはどこ？私、帰れるの？

由紀夫と廉太郎の晩御飯は？

頭の中をぐるぐるめぐる問いに答えが見つかるはずもなく。

とりあえず、私ができたことは、ムスカの願いもあり、暴力男の縛めを解いてやることだけだった。

「いましめを解いても襲いかからない」という誓いを10回復唱させた後にね。

たぶんまだ、異世界1日目の出来事。

2 花人は具なしカレーの夢を見る。(後書き)

超絶カッコ悪いヒーロー。

3・解放までの勉強会。

昼間だというのに分厚いびろろのカーテンが重く引かれた部屋に、悲しい旋律が響いている。

カーテンの隙間から漏れる光に、寄り添うように震えながら伸びる歌声は、部屋の中央に位置する机の上の鳥かごの中から聞こえていた。

混じりけのない黄金に細やかな細工を施してこしらえられた鳥かごの中には、鳥かご同様に美しい金色の髪をした……小さな人間の形をしたイキモノがいた。

大きさはせいぜい小鳥ぐらいであろうか。さきほどから歌声はこの小さなイキモノの愛らしい口元からこぼれている。

金色の髪に、人形のように端正な顔立ちをした彼女は、積み上げられたこれまた小さな絹のクッションに身を横たえ、喉を震わせて、でたらめな言語に聞こえる音の羅列を重ねていた。

何も身につけていないが、その裸身は暗がりの中でほの蒼く光り、なまめかしいというよりかはどこか神々しい。ふてぶてしいその表情は、鳥かごの中に囚われているというよりは、彼女が好きでこの場所に留まっているかのような不敵さを感じさせる。

妖精。

精霊が何らかの形でより力を蓄え、実体を伴ったその姿は大変美しく、また強力な力を持つために、そばに置くことは難しい。

捕縛するよりは何かを犠牲にして契約を結びそばにいるよう「お願い」するか、彼らを上回る力を持ってして彼らを魅了し従わせるしかない。

「……また、その歌かえ？」

けだるげな声が部屋に降り立ち、妖精の歌を打ち切った。

口をつぐんだ妖精は、歌の代わりに小馬鹿にしたような微笑みを口元に刻む。

彼女の視線の先には、部屋の隅で、ゆるゆると扇をあおぎながらカウチソファに寝そべるひとりの女がいた。女の足元には浅黒い肌をした男がいて、彼は膝をつき、女の白い足を怪しげな手つきでもみほぐしている。

女の年のころは40に差し掛かったころであろうか。波打つ黒髪に紫色の瞳。妙齢ながらも匂い立つような妖艶さをまとわりつかせた豊満な体は見るものの心を一瞬で捉える魅力にあふれている。

けだるそうに女はあくびをひとつもらすと、ふいに扇を鳥かごに向かつて投げつけた。扇は鳥かごにぶつかると固い音を立てて床に転がった。

「わらわがわかる言葉を話せ、妖精よ」

「愚かな妖精ですね。囚われてなおも逆らい続けるとは。古代語で何を訴えているのやら」

足元の男が足をもみほぐす手を止めて低い声で相槌を打つ。冷たい銀色の瞳を細め、いまいましように鳥かごをにらむ男の顔つきも極上と言って差し支えない美貌ではあったが、女は何の感銘もなく男の顔を見下ろした。

「ただでさえ痛むこの身が余計におかしくなりそうじゃ」

下賤な妖魔め、と吐き捨てるのと、白い腕をかがげ、指をついと曲げる。動作に反応し、床に落ちた扇が宙に浮かびあがり、そのまま空を切って女の手のひらに収まった。妖力を造作もなく発動させた女は再び手に戻った扇をパサリと広げた。

「首を折っても涙一つこぼさぬし、片手をちぎってもすぐに生える。妖力の檻に閉じ込め捉えていても一向に消耗する様子も見せぬし、まったく食えぬ妖精じゃ」

「《真の指輪》のありかはまだ白状せぬままですか？」

男の問いかけに、女は渋面を作って見せた。が、その瞳はどこか楽しそうに輝いている。

「ああ。まったくもって忌々しいことにな。我が愛する息子もさぞ苛立っておるだろう。しかしどうあがこうと知るのはこの妖精のみだがまあ、そこは半身殿がどうかしてくれるだろうよ」

「！！とうとう、開花したのですか」

男が目を見開き女を見つめた。愉快そうな笑い声がそれに応える。「まだ熟しきつておらず、胚珠から足もぬけきっていないが、無事現出したらしい。完全な開花まであと3日、というところかの。お迎えに上がる日が楽しみじゃ」

白いのどをのけぞらせて女はひとしきり笑うと、男の髪をつかんで己が口元に引き寄せた。男はうつとりと目を閉じ、うやうやしく女のおごに手をかけると口づけを与える。

しばらく艶めかしい水音が部屋に満ちていたが、女はふと苦しうに顔をゆがめた。

右手で心臓のあたりを押さえ、艶めかしいしぐさでじっと目を閉じる女に、しかし男の方は慌てた様子見なく、慣れた手つきで女の胸元から小さな瓶のついた鎖を引き出すと、瓶の栓を外し女の口にあてた。

こく、と女の喉がうごめく。

「この身がうらめしい・・・」

それは女の発した声か、男の声だったのか。低いささやき声に、応える言葉はない。

ただ、男の影が再び女に覆いかぶさると、また再び淫靡な音が断続的に響き始めたのであった。

「じゃから、ここは西の大陸ギィスカル！と！言っておる！何度目じゃ！おぬしの頭は底抜け壺か！？」

春つらら。異世界は今日も晴天です。

二日目にしてはまだ両足を花のど真ん中に埋没させ、私は降り注ぐ陽光の下・・・しわくちや婆さんに怒鳴られていた。

「地図を見てみい！ほれ、北の大陸がマジユラ、西がギイスカル、南はムーラ、東はフレアテ！」

ポンポンポン、と東西南北を地図を示しながら反時計回りに指し示すムスカ。語気が荒いためか唾がとんでくるし。

暴力男をツタから解放して、そののち。

プライドが許さないらしく、蒼白な顔で無言のままワニもどきに乗り込んでいずこかへと帰っていく彼を見送り、やれやれと肩をすくめる私に、ムスカの地獄の短期集中スパルタ講座が待ち構えていた。

ムスカは開花師という職人で、この排水溝と異世界をつなげた花、天花を大事に育てたり、この天花から生まれる花人という存在の親になり替わり教育をほどこす役目をもっているらしい。

鼻息荒く、私に全てを教えようと奮起する彼女は、けれど5分後には私のあまりのものの覚えの悪さに落胆と怒りで声をからすことになるのだった。冒頭に戻る。

簡単な地図によると、この世界は東西南北、4つの大陸にわかれているという。それぞれ北の大陸マジユラ、私がいるらしい西の大陸ギイスカル、南のムーラ、東のアルティマ。

大陸と大陸の合間には小さな島のようなものがあるが、これは厳密に言うところ大陸ではなく、澱界とよばれる特別な世界で、精霊や妖怪の住処となっているらしい。

地図にはしっかり記されているのだが、普通の交通手段では行けないんだってさ。ここらへんがよくわからん。とにかく西の大陸の右には炎山という澱界、左には水山。東の大陸の右には妖山、左には金山がある。最後に真中に天界というこの世界の一番偉い人の住

む世界がある。

……ここまで覚えるのに、数時間を要したよ。

こうして太陽も傾き始めたころ、やっと合格点をもらえた。未だに理解はしてないけど、まあ覚えただけでも偉い。

「今まで幾人かの花姫の世話をしてきたが、おぬしのように無知なのは初めてじゃ」

一息ついて伸びをしていると、ムスカがあきれた視線を投げつけてきた。

「だって私、日本の出身ですよ？まったくここに關する情報もってませんし。普通そんなファンタジーな設定、一日で覚えられませんか」

「ニホン……それがおぬしの生まれた次元か。通づるは澱界でも、天界でもないのじゃな」

やはり稀にみられる天花じゃ、とつぶやいてじつと花を見つめていたムスカだが、視線を私に戻すと、

「しかしおぬしがどこから来ようとも、ここは我らが世界。この世のことわりを全て覚えていただく」

とピシヤリと言いつつ放った。

人の前に膝ついて非礼をお詫びしたいとかのたまっていたのは誰でしたっけ？と意識が飛ぶようなスパルタぶりだ。

でもまあ、ムスカの話から察するに、私が座るこの花はどうやら日本に通じているらしい。いくら戻ろうと思っても、戻れるような些細な感覚すら起きないのだが、もう少しこの奇妙な世界や花について勉強すれば、何かヒントが得られるかもしれない。

そこまで考え、比較的自分が落ち着いていることに、少しびっくりする。普通、小説なんかでは異世界に来てしまった主人公は帰れないかもしれない状況に、泣いたりパニックになったりするものなんだらうけど。

……心のどこかで、逃げたいって思っていたんだらうか。

あの貧しくて、だけど守らなきゃいけないものをたくさん抱えて

しまつて、日々お金の計算に追われていっばいっばいな、辛い毎日から。

現実からほど遠い、夢の続きみたいな世界に今放り出されて、私、本当は喜んでいる？

そんなことを考えかけ、慌てて頭を振る。

ないないない。今だつて私は由紀夫や廉太郎に早く会いたい。来月は母さんの誕生日だから、それまでに帰つてケーキを作って、さやかなプレゼントも買って、たくさんお祝いするんだ。目をぎゅっと閉じる。

待つてね、母さん。由紀夫、廉太郎。

強く思い、目をあける。

……目の前にしわくちや婆が迫っていた。

「さ、続きを始めるぞ。今度は各大陸における特色を掘り下げてゆこうかの」

やれやれ。

現実、どの世界でも厳しい。

4、異世界にて、変質者。

しばらく、大陸それぞれの特色についてムスカの講義が続いた。気付けば日も落ちかかり、木々の間からこぼれ見える空は夕焼けで紅く色づいている。

おいおい、私、仮に日本へと帰れても、なーんの足しにもならない知識を詰め込むのに、もうまる一日費やしちゃったよ。この無駄な時間、もし時給900円のバイトをしていたらもう9000円は稼いでいるはずだし、日給7000円のスーパー試食販売バイトをしていたら日給プラス、スーパーでの余りものも頂戴できていたはずだ。うおー、もったいない！

脳裏に千円札や余りもののお総菜が飛び交い始め、私の思考を満たしていく代わりに、ムスカの今なお続く大切なお話（今は経済について話しているようだが、もはやどうでもいい）をとことんのように押し出してゆく。

「……そんなわけでここ、西の大陸は広大で肥沃な土地にも恵まれ……おい、花姫！聞いておるか！？」

ムスカが私の様子に異変を感じたのか、教科書のように読み上げていた本から視線を上げ、ついでに片眉もあげて詰め寄ってきた。どうやらやっとなり気付いたらしい。私が何も聞いていないってことに。よし、ここはおやつを提案して話をそらそう。

「ハイせんせい。人間、集中力にも限界がありません。もう今日はこれでお開きってことにして何か食べ……ま」

言いながら、はたと気付いた。そういえば、私ここに来て一日はたつたはずだが……生理現象が一度も起きていない。

お腹は減らないし、トイレも行きたくならない。

これってやっぱり、この奇妙な花のおかげだろうか。

尋ねると、ムスカは自分の講義が中断されたことにぶつくさ言いつ

つも、花のおかげであると断言した。

「天花は半身のなり手を選び、育てる、いわばおぬしの母のような存在。おぬしはどのような手違いがあったのか、天界でも澗界でもない場所から取り込まれたようじゃがな。本来、天花は天界もしくは澗界より、花人にふさわしい稀なる内核をもつ魂を選び、己の内にその魂を取り込み、育て上げる花。どうやあつて育てるかじゃが……おぬしの足、そこに埋まっておろう？」

と、節くれだった指で刺した先には私の足。きつちりしつかり埋まっただけで、時間がたつにつれて徐々に埋まっている部位が、本当に少しづつだけ減ってきているような気がするが、それでもまだくするぶしより少し上くらいまで埋まっただけで、相変わらず身動きが取れない。ゼリーののような質感がひんやりしていて気持ちいいことだけが救いだ。

「そのおぬしの足が埋もれている部分を胚珠、とよぶ。そこから天花はおぬしに必要な栄養素や妖力の糧となる妖分などを送り込んでおるのじゃ。排泄物として出ていく類の有機物質ではないゆえに、腹も減らぬし、排泄欲求も起きぬ、というわけじゃ」

というわけじゃといわれても、話の半分も理解できない。まあとにかく、私は植物のように根っこで栄養を吸収する体質になっただけならいい。

「なんか、私気持ち悪くないですか？そのうち光合成まで始めるんじゃないでしょうね」

「なつ！神の愛でし花を気持ち悪いなどと言つな。それと、その足はあと3日もすれば抜ける思うが、それまでにどんなことがあるうとも絶対に、決して、決して無理やり抜くでないぞ」

ムスカの忠告に、落胆で思わず力が抜けてしまう。

「三日あぁ？あと三日もここにバカみたいに花から生えてると？大体さー、私、マント一枚羽織っただけで服すら着てないんだよ。こんなところ誰かに見られたら不審者扱いされるんじゃない……」

言いながら、マントに包まれた自分の体をかき抱く。幸いこの世界

の今の気候は暖かいのか、昼の日差しは適度に森の木々に遮光され心地良かったし、日の落ちた今は昼間に比べ少し冷え込む程度で、そこまで寒くはない。それでもパンツも履かずに座り続けるのは落ち着かないものだ。

当たり前のようにトカゲもどきがいたり、巨大な花が咲いていたり、この世界の常識は分からない。だが、だが、こんな露出狂みみたいな恰好で女が座っているところを見て驚かない人はいないだろう。

「心配せんでもここは聖域と呼ばれ、一般人は近づけないようになつておる。まあ今夜あたり、炎山より

花の匂いを嗅ぎつけた魔獣どもがやってくるかもしれぬが、大丈夫じゃろ」

ムス力はちらりと自分の懐に視線をやった。おそらくそこに齒こぼれた短刀がしまわれてあるのであろう。つまり、何かあったときはまた花にあのツタを出させると？うーん、やり方が分からない。

しかし……魔獣って、何だ？妖怪みたいなもん？

脳裏にあの暴力男が乗っていたトカゲもどきが浮かび、自然と身が縮こまる。そんな私を尻目に、ムス力は持参していた布袋から次から次へと本を出していくと、私の座る花の上にどんどん積み重ねていった。一冊一冊が辞書くらいの分厚さで、背表紙には見た事のない象形文字のような字で……読めるわけないじゃん、こんな異世界の文字！と思うと同時に、頭に「四大大陸それぞれの発展と衰退」とか、「花姫としての心得」など文字に相当するであろうタイトルが頭に入ってきた。

読めてる、読めちゃってるよ私！

どういう仕組みで読めるはずのない異世界の文字が読めるのか、そもそもなぜ言葉が通じるのか、今さらながらに啞然とする私を気にも留めず、ムス力はこともなげにこれらの本を明日までに全て読むようにと言った。

「これ全部？」

「全部じゃ。明日、また内容について把握しているか確認するから

の。さぼるでないぞ」

「いやいやいやいや全部は無理でしょー……」

「夜明け鳥が鳴く頃、また来る。時間はたっぷりあるじゃろう」

よつこらせ、などと言いながら腰を叩き、荷物をまとめ始めたムスカに嫌な予感がする。

「まさか……私をひとりにして自分だけ帰る気？」

昨日の夜はムスカは私につき添い、花の横に簡易テントのようなものを張ってそこで寝てくれた。だから遠くで獣の鳴き声が聞こえてもそれほど不安にはならなかったし、何より話し相手がいるだけでも異世界の夜を過ごすにはありがたかったのだ。

「まあ、そろそろ日も暮れるしこのう。今日の学習時間はこれまでにしてやるう」

やっぱり。

この婆さんは、二日目にして私を暗い森の中に置き去りにして、とつと帰ろうとしている！

「ちよつと、さっき魔獣がどうたらとか言ってたじゃん！ひとりぼつちは絶対いやー！」

私は涙目でムスカの上着にすがりついた。握りこんだ裾からビリ、と布が破けるような聞こえたような気もしたが構っていられない。

しかしムスカは無情にも私の手を振り払った。鬼だ、この人。

「心配せずとも、おぬしには半身が付いておる。まだ正式に半身となる儀式はかわしてはおらぬが、ぬしの半身、シンザ・ロウ・ムソウ様ほど半身であつて心強いお方はおるまい」

「シンザ様ってツタに絡まって喚き散らしていたあのバカで変態な暴力男の事？ぜんっぜん心強くないんですけど！大体そのハンシンつて一体何なの？」

「まあ……おいおい話そう。とにかくわしはおぬしのことを報告したり、儀式の準備をしたりするのに一度は帰らねばならんのだよ。」

今晚、そう遅くならんうちにシンザ様がお前のもとに再び来られて、念のため周りに魔獣除けの結界を張ってくれるからな。安心せい」

「うわ。あいつ、また来るの？ムスカがここにいてよ！」
先ほどから、不安におののく私の心をちつとも癒してくれていないムスカの言葉。決定的な一言にさらに私のテンションは急降下する。あいつとまた顔を合わせなきゃいけない。

獐猛で残酷な金色の瞳を思い出し、嫌悪感を募らせる私の肩をなだめるように叩いて、ムスカはしわくちやながらも聖母のような微笑みをよこした。

あ、もしかして残ってくれる気になった？と私がほつとした瞬間に、無情にもムスカは荷物を持ち、私に背を向けた。紛らわしく微笑みやがって……。

「わしは今から帰ってせねばならんことが山ほどあるというに。シンザ様の編む結界はアリの子一匹通さぬと評判の緻密かつ堅牢なものじゃ。魔獣や妖獣に襲われる心配もなく快適に過ごせるはず」
妖獣って。なんか、敵の種類さりげなく増えてるんですけど！

背中で語るムスカに、私は振られて捨てられた女のように両手をかかげて追いつがり、足が埋まっているため動けずに突っ伏した。ではまたな、というムスカの声が振ってきたが応える元気もなかった。あきらめのうめき声が唇からため息とともに漏れる。

どうやら、今夜はひとりで野宿決定らしい。

小さくなっていくムスカの背中を見つめながら、私は今から明日まで無事に夜が過ぎせるよう、祈るしかできなかった。

見知った森のけもの道を歩きながら、ムスカは何度目かのため息をついた。罪悪感と不安に、足が自然と重くなる。

「あの薄乳が、真に俺の半身たる資格を持つならば、炎妖の一匹や二匹、どうにでもできるはずだ」

「しかし、シンザ様！妖力もなく、花に守られていることだけが救いの花人ですぞ！」

「だからこそ、だ。守られているだけの半身など俺はいらぬわ。先

ほどは天花の力に不覚をとったが、あれはあの女の実力ではなく、単に花が力をふるっただけのこと。幸い今宵は天花の力の弱まる双子月の夜。あの薄乳の力、見定めさせてもらおう」

シンザの去り際、そっと交わした会話を思い出し、ムスカはひび割れた唇をかみしめ、背後をそっと振り返った。

森の中、突然小さくひらけた場所にひっそりと咲く世にも美しい天花のたたずまいはもう見えない。天花に囲われた娘は今頃どのような顔をして不安に耐えているのだろうか。

ムスカの冷酷なあるじは、しかし彼女のような同情心を持ち合わせてはいなかった。

立ち止まり、引き返そうかとはばらく逡巡する。

何も知らぬ赤ん坊のような娘。いかに花に守られていようと、花の匂いに気付いた魔獣に身動きの取れないまま囲まれればどんなことになるかたやすく想像できた。

「……許せ」

絞り出すようにつぶやくと、ムスカは再び、けもの道を歩き始める。

雲ひとつない濃紺の空には、二つの三日月が寄り添うように光っていた。

4、異世界にて、変質者。（後書き）

一人称って難しいです。今さらながら後悔。

小話をまそぼっけのユーザーページの活動報告にのっけてます。
拍手とかおいてお礼文として公開することも考えたのですが、
そもそも拍手をもらえなかったら悲しいので、小話は活動報告にの
せていきます。

5 踊れ愚か者たち、双月の下で。(1)

「あにじゃ。あにじゃよ。うち、腹減ったわあ」

「しいつ。気付かれるわい。おとうとよ、じきにたんまり喰わせ
てやるけんなあ」

「久しぶりのごちそうやな、あにじゃ」

「ひさしぶりのごちそうやでえ、おとうとよ」

「それも花人や！」

「花人やでえ！」

こそこそと。

ささやき声が茂みから漏れ聞こえる。それ以外には風の音ひとつ
聞こえない。

天花は人里離れた山奥や、住むことが困難な高山の頂近くに生息す
ることが多く、それゆえ、人間はめったに聖域たるその場所に足を
踏み入れることはない。

そんな場所で声をささやき交わすものの正体はと言えば。
人外のモノに相違なかった。

紺碧の夜空には、妖しげに光る二つの三日月。ひっそりと寄り添
いあうそれらは、聖も邪も、全て暴くかのような残酷な光で、ささ
やき声の主たちをも照らし出していた。

「捕まえたなら、ばりばり喰らうてやるうなあ」

「あにじゃ、うちは頭が欲しい」

「あかん。おとうとよ、一番うまいところは兄に譲らんかい」

「じゃあ、うちは胸の、柔らかいところでええわ」

物騒な会話を交わす、子どもの背丈ほどの獣たち。

彼らの両耳は炎そのもので、闇夜の中、縦にまっすぐゆらゆらと
燃え上っている。真っ黒な大きな目をらんと光らせ、獣たちは

鼻をひくつかせて、かすかに香る天花の香りの中に隠された花人の匂いを嗅いでいた。

「ああ、ええ香りやのう。うまそうじゃ。まだ生まれたてやな」
2匹のうち、少し体躯の大きい方がよだれをたらし呟く。艶やかな銀色の体は、その下に強靱な筋肉を隠し、ところどころ隆起し、数メートル先に咲く天花に今にも跳躍せんばかりにうごめいていた。と、体躯の小さい方が不安げに鼻をひくつかせた。

「あにじゃ。なんやさつきから、うち視線感じるんねんけど」
「なんやと」

慌てた様子で茂みから頭を出し、じつと先を見つめる。人外の獣の眼はどのような仕組みになっているのか、かすかな月明かりしかない闇夜の中、確かに彼らの欲するものがこちら注視している気配を感じたらしい。

「おとうとよ。どうやら気付かれたようやで。気配を断ってるわいらに気付くとはなかなかの手練やの」

ニイ、と笑むと、大きいほうの獣は張り詰めていた空気をあえて乱すかのように、乱暴に音を立てて茂みから飛び出した。

「おとうとよ。そこでよう見とき。わいが人間の捕まえ方、見せたるけんなあ」

「あにじゃ、相手は花人やけん、油断せんといてな」

「心配せんでも今晚は双子月やけん、花の力は微微たるもんじゃ」
「でも、あにじゃ……」

弟と呼ばれた方が心配そうに大きな黒い眼をまたたかせ、じつと兄を見つめる。

兄は先ほどと同じ邪悪な笑みでその視線に応えると、はっきりした殺意を込め、花人に向かって獰猛な獣さながらに駆け出したのであった。

「来ないじゃん……」

思わず漏れた声は意外なほどか細かった。夜が深まるにつれ、反比例して音をなくしていく世界と、比例して闇を深く濃くしていく森に、私の心は想定以上におびえているらしい。

ムスカが去った後の森は急速に闇を深めてゆき、今や聞こえるのは木々の葉っぱたちの重なりこすれるかすかな音、どこからともなく聞こえる何かの動物の鳴き声のみ。

昔、夜の海で泳いだことがあるんだけど、方向感覚も分からない闇の中を泳いでいると、そのうち自分の下になにか巨大で獰猛な生物が泳いでいるような気がしてむやみやたらと怖くなった事を思い出す。

ここは森の中。ましてや異世界。どんな生き物が出てくるか分からない。

きわめつきに、夜空を見上げると、世界を見下ろしているのは何と2つの三日月だ。

はいはい、ここが異世界だったこと、よつつつっく分かりましたよ！2つの月ってどんなダメ押しだよ！

「まったく、あの変態、来るって言ってたんじゃないの？全然来ないじゃん。今来たら、変態から変態紳士に格上げしてやるのに……」

どうやらあのシンザという男がまた再びここにやってきて、私の中で危険な目に合わないように頑張ってくれる（と私はムスカの話を手元に解釈している）らしいのだが、いくら闇が深まり、空に月が2つあらわれ、獣の遠吠えが聞こえようと、あの男が姿を見せる気配は全くない。

最初は、ムスカじゃなくてあの変態乱暴男と夜を明かすくらいなら、1人の方がましだと思ったけど、こうして深い闇の中にいてると、あんな奴でも独りぼっちよりかはいいように思えてきた。闇に脅えている今、あいつがここにあらわれたなら、かなり感謝してしまっただろう。地獄に仏ならぬ、地獄に変態とでも言おうか。ん？地

獄に変態ってさらにダメなシチュエーションじゃん。何ていえばいいのだろう、うーむ……。

地獄で「巨乳はどこだああ！」と叫ぶ変態シンザを想像し、あまりにダメな状況に思わず腕組みをして考え込む。ふと、私の眼の端に、ちらりと不可解なものがうつった。ポロリと腕組みを外し、啞然とそれを見つめる。

私の座る花のわずか数メートル先の茂みに、何か炎のようなものが4つ、ゆらゆらとうごめいているのだ。それはまるで、典型的なお化け屋敷で見られる、あの、日本古来のおばけの象徴たる、いわく、魂が燃えている様だとされる……あああああ！！説明なんかどうでもいい！

「ヒトダマだよ、あれ！ぜったいヒトダマだよ！」

ささやくと同時にがちがちと歯の根が鳴り始める。私の苦手なもの。1つ、爬虫類。二つ、おばけ。

どうなっているのだ？この世界は。森の中で墓もないのにヒトダマがお散歩するなんて。

人間恐怖を感じると、その対象から目が離せなくなるらしい。

私もその例にもれず、ヒトダマから目が離せないでいた。と、そのヒトダマが突然大きく燃え伸びると、こちらに向かってすごい勢いで飛んできたではないか！

思わず息を吸い込むが、なにか奇妙な違和感を覚えて喉まで出かかった悲鳴を飲み込んだ。

何かがおかしい。

闇の中、目をこらすと、こちらに向かってやってくるヒトダマ2つの下に、何か体のようなものが見える。よく見るとそれは、一匹の動物の姿であった。

小さな頭から2つ、炎を生やした生き物。前足は退化して胸の前でちょこんとそろえられている。こちらに駆けてくる様子も、両足ですつくと立ちながらもピョンピョンと脚を懸命に動かし必死な様子。

「か……かわいい……」

私の好きなもの。1つ、お金。2つ、可愛いもの。
ピョンピョンとこちらにやってきて、ついに私の座る花の前まで
やってきたそれを、私はじっと見つめた。胸の内から湧き上がる、
抱きしめたい衝動をじっと押さえる。

頭から生える長い両耳はゆらゆらと燃えて、今にも花卉に燃え移
りそうで少し怖い。先ほどはこれをヒトダマだと勘違いしたのだ。
私をまっすぐに見上げる瞳は大きくて、きらきらとかがやいてい
る。

それは子どもの背丈ほどある、ウサギに酷似した生き物であった。

「お初にお目にかかりやす、じょうちゃん」

ぴよこんとウサギは頭を下げた。うわ！燃え移る！

ウサギがお辞儀をすると耳の炎も揺れ、すんでのところで花卉に
燃え移りそうになったが、花びらの方が意志あるかのようにすい、
と折れて炎を避けた。まあ、もう驚くまい。何より目の前の頭から
炎を生やしたウサギが日本語を話しているのだから。

「わいは、永久業火の支配する、近くて遠き澱の次元、炎山は炎
の草原よりやってきた、ちんけな炎獣でやんす」

「はあ……」

「じょうちゃん、たぐいまれなる花人として人界にあらわれたば
かりとお見受けしやしたが、まずは生誕おめでとうございます」

ウサギはまたピョンコンとお辞宜をした。ずいぶん腰が低い。これ
がムスカの言っていたあやかしの類なのだろうか？だとしたらずい
ぶん想像していたものと違う。なんというかこう……メルヘンだ。

「じょうちゃんみてえなお偉いさんに、なんやけど……そのう、
折り入って頼みがおまんねや」

退化して短くなつた前足を、揉み手のようにこすり合わせながら、
ウサギは上目づかいで私をじっと見上げてくる。うん。かわいい。

「何？私、この世界の事まだ何も分からなくて、役に立てるかど
うか分からないけど」

とりあえずうなずいてあげると、ウサギの耳がボツと一瞬高く燃え上った。どうやら感情に左右される仕組みのようだ。分かりやすくてよいが、火事になりそうで危なっかしい。

「ありがてえ！実は、背中がおとといからかゆくてのお……」

言いながらウサギはくるりと私に背を向けた。銀色の毛皮におおわれた背中は少し猫背気味で、思わず手を伸ばしてなでなでしたくなるが、必死に自分の手を押しとどめる。

「背中のおちようどもんなからへんを搔きたいんやけどな」

ウサギの前足が必死に背中に伸ばされる。が、退化したそれが背中の真ん中に届くはずもなく。

むなしく彼の両手が何も無い空間を引っかくのを、笑い出しそうになるのをこらえつつ、真剣な顔で見つめた。

「このとおり、届きまへんのや！」

背中を向けているのでどんな表情かは見て取れないが、悔しさと悲しみの入り混じった声をあげ、彼はずい、と背中を私に押し付けてきた。

「なあじょうちゃん、じょうちゃんなら届くやろ。後生やから、

わいの背中、搔いてくれへんか？」

ふるふると揺れるかわいらしい背中に、涙声。こんなメルヘンチックな生き物をお願いされたら……そりゃ、言うこときいちゃうでしよ？

返事もせずに、半ば反射的に私は背中に手を伸ばす。少し距離があったので、片手をつけて、上体をぎりぎりまで伸ばした。

と、ウサギの毛皮が、ぶわあつと逆立った！

「してやったり！」

ウサギが叫ぶと同時に、両耳が青い炎をまき散らしながら急に伸びたかと思うと、鞭のようになつて私に向かってきて……

気付くと、ウサギの耳から伸びた炎に全身をグルグル巻きにされていた。

*
*
*

5 踊れ愚か者たち、双月の下で。(1) (後書き)

その2に続きます。人称がころころ変わってすみません。

5話めの投稿ですが、最初の予定ではあと3話ほどで第1部が完結しているはずでした。実際、導入部分の説明すらできていません。構成力、文章力のなさができる技です。反省。。。

踊れ愚か者たち、双月の下で。(2)

大木の、大きくせり伸びた枝の一振りに寝そべりながら、シンザは小さくあくびを漏らし、首をほぐすように左右にこきこきと動かした。額に巻いた飾り布につけた小さなルビーの装飾品が動きに合わせてゆらゆらと揺れる。

葉っぱの折重なる合間からそつと眼下を覗き見ると、そこには一匹の炎獣と、何やら会話を繰り返している花人の姿があった。

生まれたばかりの花人は、強力な妖力を持ちながらも、まだ力も不安定で、扱い方もおぼつかないものが多い。そんな花人は、妖力を糧として生きる澱界の住人の格好の的にされやすく、自身が放つ独特の芳香のせいもあり非常に危険な目にあいやすいのだ。

そんな花人を結界で覆い、また完全に足が抜けるまで傍につき従い見守ってやるのが、花人の半身となった男の役目であり、しきたりであるのだが……。

この世界では珍しくもなんともない漆黒の頭が揺れるのを、シンザは感慨もなく見下ろす。

トウコ、と言ったか。

まだ、半身の役目の何たるかを理解していない、頼りない小娘。こちらが力を認めてやるまで、その内容は話してやるつもりもないが、万が一力を認めてやったとしても、自分に土下座し泣き伏すのを見た後に、鞭打ちの一つでもくれてやらないと気がおさりそうにない。

シンザは先刻自分が娘から受けた無礼な仕打ちを思い出し、眉をひそめた。

はたして自分が半身を彼女に託す気になるのかどうか。いつそのこと、このまま強力な魔獣の歯牙にでもかかれればよいのに、そうして泣き叫んで自分に助けを求めたならまあ助けてやっても良い、な

どと物騒な事を考える。

しかし彼の望みに反して、今宵、花の香りに誘われてやってきたのは。

「あれは……炎羅ウサギか」

炎の両耳を持つ炎山の魔獣は魔獣の中でも下位に属し、知力は中位魔獣ほどではあるものの、力は少し妖力のある子どもなら仕留めることができるくらい弱いとされている。

「早くひねり殺せよ、そんな虫けら」

チツ、と舌打ちしたのはもちろん、もっと大物が現れることを願っていたからである。妖力を見定めるために高みの見物と決め込んでいるのに、相手があれば話にならない。

いっそのこと自分が中位程度の魔獣を召喚してけしかけてやっても良い。そうしてやるうかと半ば真剣に考えかけ、しかしシンザは首を振った。

開花師のムスカが彼女をシンザの半身と認めてしまった以上、半身にこちらから危害を加えることは出来ない。じれる気持ちに形の良い唇を噛みしめた。

人として生きること捨て、1000年待った。

天花が咲いたという情報を聞いたび、いかなる場所にしようと思っただけ付け開花を待った。

しかし。

あるものは開花前に散り、あるものは開花しても花人を宿しておらず。あるものが宿した人とも妖魔ともつかぬ失敗作をこの手で斬ったことも数知れない。

南の大陸の主導者は、もうとつくの昔に花人から半身を見つけ、契約を取り交わしたと聞いていたし、北の大陸の男も、花人ではないものの強力な妖力の持ち主たる半身を味方につけたと、もっぱらの噂だ。

自分だけが遅れをとり、それでも彼を信頼してくれる民衆たちを

欺き続けている。

もはや自分のもとに半身はやってこないさだめなのかとあきらめかけた矢先、天花が開花したと聞きつけた。しかも、100年に一度ともいわれる絶妙なタイミングで実をつけた、至宝を生み出す花だ。

これで終わりにできる。これで、やっと戦える。これで、やっと望みに一歩近づけるのだ。

まず一目逢ったらどんな言葉をかけてやろうか。

感謝か、敬愛か、はたまた愛の囁きか。花人はとかく貞操観念が強く、身持ちも固いと聞いているが、自分の慣れた手管をもつてすればたやすく籠絡できる自信があった。とにかく強大な力をもつその美女を、心も体も自分に惹きつけ、2度と離れないようにして、そして。

利用してやるのだ。

そう思い、焦がれに焦がれたその力、半身候補に出会った。

結果。

出来損ない。

何の妖力も持たず、人を惹きつけるカリスマ性も美貌も持たないただの小娘が姿を現した時の落胆は計り知れない。だが、心のどこかに何か引つかかるものを感じたのも事実だ。その正体が分からず、こうして小娘の力を計るチャンスを与えてやっている。

もう一度眼下を覗こうとして、しかし彼は体を一瞬こわばらせた。小さな妖力の揺らぎを感じ、慌てて木々の間から顔を覗かせる。そこには鬼火に全身を拘束されて蒼白になる娘と、勝ち誇って高笑いを響かせる炎羅ウサギがいた。

チロチロと青白い舌を伸ばす炎が飛びかかる蛇さながらの勢いで自分を取り巻いた時、「熱い」とも「痛い」とも言えず、ただただ息をのむしかできなかった。だって、実際、熱くも痛くもなかったのだ。

ウサギの耳から伸びた炎は今や二重にも三重にもなつて体にまとわりつきメラメラと音をたてて燃え上つているのだが、体には何の異変も起きない。むしろじんわりとした優しい熱が伝わってきて気持ちいいくらいだ。

炎に対する視覚的な恐怖すら、そのお灸のような気持ちよさのせいで薄れていく。

え……これ、私、悲鳴あげたらいいのかな？でも熱くないしなあ。微妙な感覚にどう反応しようかリアクションし切れず視線をさまよわせる私に、先ほどまで有頂天で高笑いをしていたウサギが気付いてギョツとした視線を向けてくる。

「うーん、効くう……」

とりあえず感想をいうと、さらにウサギの真ん丸な目が大きく見開かれた。

「なんやてえ！？わいの炎鎖がきいとらん！」

いや、効くには効いてるんだけど。多分腰痛あたりに。とはなんだかウサギが可哀想で言うに言えず、とりあえず炎から逃れようと身じろぎしてみる。ウサギの耳から生えているものだから、自然、ウサギの体も私の身じろぎに合わせてグラグラ揺れた。

「ちよお、痛い、それ痛いって、じょうちゃん！」

「と、いわれても。ね、これ外してくれない？」

「嫌じゃあ！なんやねん、あんた！花の力が弱まる双月やってのに、そのタフさは！」

ウサギはぶるぶる震えながら、ぴよん、と一歩私から後ずさった。小さな前足で私の座る花を指す。

その前足につられて、膝もとに大きく花弁を広げている花を見下ろすが、別段、花はこの前の時のようにツタを出しているでもなく、

至って普通に鎮座している。

「多分、花のおかげで何ともないんじゃないかと、あなたの力が弱いだけじゃ……」

「確かに花から妖力の流れは感じへんけど！わいの力が弱いわけぢやうからな！」

わいは炎鎖ここにあり、といわれた炎使いの名手やでえ、などと息まきながらもウサギはピョンピョンとますます私と距離をとってゆき、次第に炎の鎖もどんと伸びていった。

と、彼の後ろの茂みから、ふいにびよこんと炎の耳が二つ飛び出した。

「あにじゃ！あにじゃ！どうしたん？」

音を立てて茂みから現われたのは、もう一匹のウサギだ。兄弟なのだろうか、彼の方が一回り小さい。またこれが二匹そろつと一対のぬいぐるみのようで可愛らしいのだ。

炎に縛られてる事も忘れてじつと見入っていると、弟君の方がおびえた目を私に向けてきた。

「あの姐やんが、あにじゃになんかしたん？あにじゃ、大丈夫？どこも怪我してへん？」

背中がかゆいと言つて人を不意打ちにした兄をさておき、まるで私の方が悪者のようになっているのが気に食わなく、さすがにむつとしたが、ウサギ相手に怒るのも大人げないような気がする。

まあいい。とりあえず鎖から解放されよう。

手を炎の鎖にそつとかけてみるとやはり熱くもなんともないので、安心してグイ、と炎をつかみ、思い切り引っ張ってみた。炭酸が手の中ではじけるような感覚と共に、いともあっけなく炎はちぎれた。「えええええ！わいの炎鎖を！解呪の！詠唱もなしに！解き、おつたでえ！なんや、この花人お！」

いちいち暑苦しいリアクションを返してくるウサギを無視して、両肩を払う。炎の残滓が線香花火のように落ち、消えた。

「さてと……」

ゆらりと頭を振ってウサギたちを見やる。今やウサギたちは両耳の炎を猫の耳くらいにまで小さく縮め、手に手を取り合ってふるえていた。いやいや、そんなにおびえなくても。

安心させる気持ちを込めてにっこりとほほ笑んでみる。ひいい、という声がウサギたちの声から漏れた。

「ごっこ、ころされるうう」

「あにじゃ、しっかり！」

「長年生きてきたが、こないな奴ははじめてじゃあ。おとうとよ、兄が倒れたら、炎原のヨシおばさんとこに行くんやでえ……」

「嫌や！うちもあにじゃと戦う！」

「……ちよつと、さつきから失礼な。別に怒ってないんだからそんなに怖がらないでよ」

ため息交じりに言くと、少し安心したのかウサギたちは少し緊張を解いた。

「わいら、じょうちゃんを騙して喰おうとしたんやで？怒ってへんの？返り討ちにせえへんの？」

「怒ってないよ。まあ実際、何も害は無かったわけだしねえ……」

先ほどまで炎に取り囲まれていた自分の体を見下ろしつつ、頬をかく。

嘘をつかれ、油断したところを不意打ちで縛りつけられたのも、なんだか子どもものいたずらにひっかかったような気がする程度で、そんなには腹ただしくはない。

そんなことよりも。

私はちらりと天空を見上げた。夜空はまだ深く、朝が来るまでまだ時間がかかりそうだ。

この暗くて陰鬱とした森の夜を過ごすのに、一人は嫌だ。一緒に過ごしてもらおう話し相手がほしい。

それがこんなにかわいいメルヘンな生き物なら大歓迎だ。

「ね、友達になってよ。友達が嫌なら、話し相手でもいいから」

私の申し出に、ウサギ達が音をたてて凍りついた、ような気がした。

踊れ愚か者たち、双月の下で。(2)(後書き)

長くなったので分けました。続きます。

踊れ愚か者たち、双月の下で。(3)

「ね、怒ってないから話し相手になってよ。夜は怖いし、長いし、さみしいし」

なにしろこちらはこの足が抜けきるまで、あと三日はここにいなければならないらしいから、夜の話し相手の確保というのは怖がりの私にとって最優先事項なのだ。

ウサギたちはきよとんとした後、両耳をなぜか一瞬大きく燃えあがらせた。嬉しいってことなのか？

「変な花人やなあ、あにじゃ！」

弟ウサギ君が素っ頓狂な声で叫ぶ。しかし兄ウサギ君はそれにはこたえず、真剣な顔をして腕組みをした。

「じょうちゃん。それは……わいら炎獣、炎羅ウサギと契約を交わすということかいの？」

「けいやく？いやいや、そんな大層なものじゃなく、ただ、この森で時間をすごすのに話し相手になってくれたらいいなあ……」

耳を片方だけ折り曲げてじつと私の話をきいていたウサギは、私の顔を見つめたかと思うと、「おもしろいやんけ」の言葉と共に大きく頷いた。

「よっしや」

掛け声とともに、一步前に跳ね出る。

「わいは！誇り高き炎羅ウサギの眷属にして、炎山一の炎鎖使いなり！真名は乱華。汝の強さに惹かれ、ゆえに、汝の力に伏し、汝の全てに進んで捕縛されよう！この力、今後好きに使いなはれ」

耳の炎が大きく燃え上ったかと思うと、するすると伸びて私の右手に絡みついた。さつき私をだまし打ちした時のような乱暴さはないけど、な、なんなんだろう、これは。

と、兄を黙って見つめていた弟ウサギ君の方がびよんと前に進み

出た。

「うちは、同じく誇り高き炎羅ウサギの眷属にして、炎山一……いや、炎山三くらい俊足を誇る魔獣なりい！真名は煉火。あにじやの意志にしたがい、汝のもとに下ろう。うちの力も好きにつこうて」
前足を片方かがげて宣言すると同時に、弟ウサギ君の耳もすると炎を伸ばして、今度は私の左手に絡みついた。痛くはないが、なんだかくすぐったい感覚に少し首をすくめてしまう。

両手を耳から伸びた炎に拘束される形になって文句を言おうと口を開きかけると同時に、音もなく炎はかき消えた。

このメルヘンウサギ達は一体何がしたいんだ？首をかしげ、ふと手首に違和感を覚えてまじまじと両手首を見る。と、小さくウサギの顔のようなものがポツンと描かれていた。い、刺青！？と焦ったが、それほど目立つ大きさでもないし、気にしないことにする。

「これで契約完了やで。話し相手でも、気に入らない奴を燃やすのも、なんでもじょうちゃんの力になったるからな」

満足そうに両耳を大きく燃え上らせながら、兄ウサギ君、——確かランカって名前だったけ——は私の隣にちょこんと座った。弟君——彼はレンカって名乗ってたかな——も、それにならって反対側に座る。両手に花ならぬ、両脇にウサギだ。可愛いものハーレムですか、これは。小さな両手にニンジンを持たせる妄想をして身もだえしそうになる自分を私は必死にだめた。なんだかよく分からないがウサギ達は友達になってくれたようだし、これで独りぼっちな夜も怖くない。

「シンザなんかと過ごすよりずっといいじゃん」
思わずぼそりとつぶやくと、せっかくやっところらに距離を詰めてくれたウサギたちがまた、ピョーンと大きく後ろに跳ね退いてしまった。

「シンザ？シンザって言った！？じょうちゃん、あの男の知り合いか？」

「姐やんの情夫なん？」

「やめときやめとき！顔だけはええかもしれんが、ほんまに最低男やで、あいつは！」

「ねえねえ、姐やんの情夫なん？」

口々に喚きだしたおかげで、静かな森が喧騒に包まれるのはありがたいが、内容が引つかかる。

「知り合いでも情夫でもないけど……、なんか、半身候補って言われた」

こたえると、ウサギ達の両耳が激しく燃え上った。四本の耳が同時に燃え上ったものだから、一瞬、私の座る花が、たき火でも焚いたかのように明るく照らされた。

「半身！？あかんで！よそあたってもらい！」

「姐やん、あんなやつは半身なんかにならんといてー！」

両耳をねじり合わせて雑巾絞りのように絞りながら、ウサギ達はおろおろと花にすがりついてくる。しかし、尋常でない嫌われっぷりだな、あの男……。一体何をしたんだろう。

「半身って、何なの？私が花人だから仕方なく半身にならなきゃいけないみたいな雰囲気なだけだし、一体半身が何する人なのかちゃんと教えてくれないのよね」

「ぼやくと、ランカ君が私の隣までもう一度やってきて、おずおずと座り込んだ。」

「じょうちゃんには生まれたてやから知らんのやろうけど、あれはわいら澱界の住人から見たらつくづく勝手な話やねん」

「でもあにじゃ、神さんが決めたこの世界のことわりやから、しゃあないで」

いつのまにかレンカ君も隣に来て、片耳を器用に伸ばし、兄の肩をポンポンと叩いている。

「わいら澱界の住人は、炎山、金山、水山、妖山の四つの場所に、属性に応じて住んどののは知つとるやる。ほんで、それぞれの山に一人ずつ、わいらを束ねる王がある。まあ人間は神妖と呼んでいるようやけど」

要するに妖怪の世界にも王様がいらっしゃるってことかな。よくわからないまま曖昧に頷く。

「神妖は多大な力を持つ。神妖が二人集まれば天界の王をしのぐとさえ言われているねんで。その神妖と

契約した人間は、その神妖がおさめる澱界だけでなく、その神妖の管轄の大陸をも支配できるんや」

ランカ君はぴよんと花から飛び降りると、地面にがりがりと地図を描き始めた。

小さい島を中心として、東西南北に大陸。大陸の右下あたりにはそれぞれ一つずつ小石を置いて、西の大陸の下に炎山、南の大陸に金山、東に妖山、北には水山と書いた。

「わいらが今おる西の大陸は澱界の炎山に属し、炎の神妖ギイスカル様の管轄やねん。神妖ギイスカル様と契約すれば西の大陸と、炎山をも支配できるつちゆうわけやな」

「なるほど、一粒で二度おいしいと」

私の相槌に首をかしげて、しかし深くは突っ込まずランカ君は続ける。

「で、神妖と契約するためには二つの方法があつてやな。一つは継承という形で、契約を他の相手に譲渡できる。もう一個はやな、争奪や」

「争奪……」

何気なく繰り返してみると、やけにその言葉が血なまぐさく感じられて思わず顔をしかめる。

「もし契約者の死やらなんやらで契約が無効になって、神妖に契約者の空きがたとするやろ。それに対し、誰かが私はこの神妖と契約したいです、と宣言する。もし他に契約したがつている人間がおらんかったら話は早い。それでその神妖と一戦交えて力でもって契約すればしまいや。けどまあ、大陸と澱界を支配できる権利や。そうすんなりいくわけがないわなあ。そこで、争奪の始まりや」

「奪い合うわけ？」

尋ねるとランカ君とレンカ君が同時に首をこくこくと動かした。

「とはいえ、人間はあほやから、無秩序のまま争つたらどえらいことになるやる。ほんで、神妖が決めたんや。自分と契約する権利を争奪するには、男と女のつがい、ひと組として参加すること。女が戦いに参加することで、行き過ぎた戦いに歯止めをかけることができるし、お互いを監視し合うこともできる。そうして勝ち得た神妖は半身同士、生涯二人で管理するんや。これが半身つてやつやな。つまり、じょうちゃんのことや」

ランカ君は言葉を切ると、真つ黒い大きな目で私をじつと見上げてきた。私は突然もたらされた情報の洪水についていけずにはしばし呆然としてしまい、その可愛らしい視線にひたる余裕もない。

「つまり……」

かすれた声で呟く。

「二人ひと組で参加する、危険な争いのパートナーってこと？」

自暴自棄な仮定に、しかし返ってくるのはウサギ達の力強い頷きだった。

何てことだ。そんなもんになつてしまえば命が危ういでないか。第二人をしつけるのに、兄弟げんかの中、自然と鍛えられたおかげで腕力には少々自信があるが、どうもそんなレベルの戦いではないっぽい。

腕組みして考え込む私の膝を、レンカ君が両手でたしたしと叩く。「しかも、姐やんの半身の男。そいつ、最悪な男なんやで！とんだぺてん師なんやで！」

レンカ君の言葉にランカ君も身を乗り出して激しく頷き、振動で花びらがふるふると震えた。

「じょうちゃん、悪いことは言わんから、その話断り。まだ半身契約しとらんようやし、間に合つて」

「さつきから聞いてると、ずいぶんシンザが嫌いみたいね。何かされたの？」

尋ねると、ランカ君もレンカ君も両耳を大きく燃え上らせた。そ

の瞳にも憎しみの炎が宿り、彼らを可愛いウサギから、何かまがまがしい獣へと変貌させ、ああ、ただの可愛いウサギじゃないんだなあと場違いな感慨に浸ってしまう。

私の感慨をよそにランカ君は何かを思い出したのか、歯ぎしりを漏らした。

「につつきシンザの野郎はなあ……我らの王たるギイスカル様を……」

ランカ君の可愛らしい口元から紡がれたささやきは、しかし最後まで言葉になることはなかった。

「そこまでだ。そろそろ終わりにしてもらおうか」

一方的な冷たい宣告。

私の真上あたりから葉ずれの音と共に漆黒の獣が降り立つ。

闇夜でも光る金色の目に不機嫌そうに曲げられた唇。

固まる人間とウサギ二匹を前にイライラと腕組みをしたその男は

シンザだった。

踊れ愚か者たち、双月の下で。(3)(後書き)

やっと一章分書けました。

6・覚悟を聞かせる午前2時。

なんなの、この男。

「ずーっと私の事を監視していたわけ？しかも木の上からってこの痴漢ですかい？」

あまりのことに無言でシンザを見つめることしかできない。

「愚か者どもが雁首そろえて何をするのかと思いきや、なかなか予想外の事をしてくれてくれる。曲がりなりにも俺の半身候補様が、低級炎獣なんぞと契約とはな」

シンザは首をわずかに傾けて、突然のことに唾然としている私を尻目に、視線をランカ君とレンカ君に巡らせた。低級って、彼らのことだろうか。だとしたら自分の友達をバカにされたようで気分が悪い。

「失礼な！ランカ君もレンカ君も低級なんかじゃないよ！あんなの方がよっぽど低級！」

「じょうちゃん、もっと言ったれ！なんや、いきなり出てきて。おつたんやったら最初っから姿見せんかい……」

声を荒げる私に加勢するようにランカ君が、（服は着ていないんだけど）腕まくりのようなジェスチャーをしながら果敢にも一步前に進み出た。しかし言葉こそ強気だが、語気はアリの声のように小さい。

「あ、あ、あなたさんにはガツンと言ったろうと前から思ってたんやで。あなたさんのせいでああ、炎山は荒れに荒れと……」

「うるさい。ペラペラといらぬことを話すだけしか能の無い虫どもめ。これ以上余計な事を話すなら問答無用で消滅させる。それが嫌ならとつとと炎山にお帰りいただけけるかな？」

冷酷な言葉に、ウサギ達の耳の炎は蠟燭の炎並みにみるみる小さくなった。事実だけを述べるならば、人間対魔獣二匹の図、なんだけど、彼らの怯えようからして、これじゃあどちらが魔獣なのやら

分からない。

「あ、あんたさんに言われんでも帰りますう。じょうちゃん、ほなわいらは失礼するでえ」

え、もう帰っちゃうの？

と呆気にとられる私に一瞬だけ申し訳なさそうな目を向けて、ランカ君は後ずさりして私たちから離れてゆく。

「待って、あにじゃ。うちも帰る！姐やん、うちらにまた会いたくなったら名前呼ぶんやでえ」

「あー、ヤな奴におうてもうたわい。今日はこんくらいにしといたるわ！」

チンピラのような捨て台詞を吐いて、ランカ君は両耳の炎を大きく燃え上らせた。そのまま頭を振り、両耳で宙にぐるりと円を描くと、両耳の描いた円の軌跡は、サーカスの時にライオンがぐるぐるような火の輪となって、消えることなく宙に留まる。

「ほなまたなあ、じょうちゃん！名前呼んでくれたらすぐ行くからな！」

ウサギ達はその輪っかに片足をかけると、くるりと向きなおって私に手を振った。なるほど、あそこから帰るらしい。

異世界二日目にして様々なファンタジーな出来事に慣れた私も慌てず騒がず、手を振り返す。

「絶対また呼んでなあ」などと言いながら、何度も振りかえって手を振りつつ、ウサギ達はいそいそと穴の向こうに消えてしまった。ちゃんと次に会う約束したり連絡先（そんなものがあるのかどうか知らないが）交換とかしたかったよ。

あとに残されたのは、途方に暮れる私と、そんな私を異様な威圧感を持って見下ろすシンザのみ。

あーあ、この人帰ってくれないかなあ。そしたらもう一回ウサギ君たちを呼ぶのに。

「お前」

ふいにシンザが声を上げたので、心のうちでも読まれたかとびく

りとしてしまう。

「あいつらとの契約の代償には何を要求されたんだ？」

わずかに低くなり、真剣さを宿した言葉の意味が分からずに眉を寄せる。あのウサギ達にお金でもカツアゲされなかつたか聞きたいのだからか？私を心配して？こいつが？うん、ないな。

「代償？何も渡してないし、何も要求されてないですけど」

とりあえず思ったままを正直に答えた。

「何も、か。そうか」

シンザは私に語りかけるでもなく口の中で「何も」をいう単語を転がしている。一体何が言いたいんだろう？分からない人だ。

ふと、その端正な顔立ちに、妙な違和感を覚えた。相変わらず不機嫌そのものを氷に刻みつけたような美貌だが、その目はどこことなく楽しそうに……

笑っている？

かすかに。

私を見て、笑っている？

なんで？

思わず瞠目してまじまじと彼を見つめっていると、私の視線に気付いたのか、シンザは即座に目を細めて表情を消してしまった。

金色の瞳に宿っていた、頬笑みというわずかなぬくもりが幻のように消えてしまう。

「試してみるか……」

ふいに彼の手が優美に動いて天の月を指した。

「お前、知ってるか？」

なにを、とは聞き返せなかった。見上げたシンザの顔が、月明かりの彫刻した陰影に彩られ、あまりに美しかったから。思わず息を止めるが、次の瞬間には全身が嫌な予感で小刻みに震えだす。

な、なんなの、こいつ！なんか怖いんですけど！

いつの間にかシンザは一步、こちらに踏み込んできていた。それだけで距離がぐっと縮まってしまう。本能的に身の危険を覚え、私

も一歩後ろに引こうとするが、足が埋まっているせいで動けない。焦ってせわしく周囲に目を走らせる私を見て、彼がのどを鳴らして笑ったような気がした。そこ、笑うところじゃないですから！

「今宵のような月を、双月といってな……この双子月の出ている間だけ……」

シンザのすらりとした指が私の顎にかかり、くいと上向かされる。抵抗する間もない私の目に、夜空にかかる二つの月が飛び込んできた。言い知れない恐怖を覚えて、慌てて視線を外すと冷たい微笑をたたえるシンザの顔が間近にある。金縛りにでもあったかのように体が動かない。

「お前のような花人は、花の力の大半をなくしてしまうそうさ。かわいそうになあ？」

どこか楽しそうな声が耳をなでて、全身に鳥肌がたつ。顎をつかまれたまま、器用に指でするりと頬をなでられた。反射的に、びくりと反応してしまう体が恨めしいが、どれだけそんな自分を叱責しようとも、目の前の男を喜ばせる結果にしかならないようだ。

私の反応を見て、シンザの唇が三日月のように美しく曲がる。天空に二つの月と、目前に艶めかしく歪む赤い月。三つの月に見下ろされて、頭の芯に霞がかかってゆく。

「なあ、力が使えないってどんな気持ちなんだ？」

教えてくれよ、と人差し指が私の唇をゆつくりと左右に撫でる。

私の体の中に火を起こそうと優しく、だけど凶暴さを秘めて、ゆつくり、ゆつくり。知らず唇が開きそうになるのを、なけなしの理性で押しとどめた。

これは現実ですか？なんで私、こんな目に合ってるの？

わけの分からない恐ろしさに思わず目をぎゅっと閉じ。

目を開けるともう目前に顔が近付いていた。

ぎゃあああーっ！近い、近い近い近いいいい！

額と額と付き合わせた形で、吐息すら感じるほどの近さに慌てて身をよじって距離をとろうとするが、どうやら後頭部に手を回され

ているらしくそれすら出来ない。文句を言おうとどうにか視線をあげたら、即座に金の瞳に射すくめられて、息が止まる。

「うづう……ごべんなざいいい……」

気付けば謝罪の言葉を口にしていた。私、謝らなきゃいけないようなことした？と思いつつも口が勝手に動いていたのだから仕方がない。まあいい。謝ってすむならこのわけのわからない状況から解放してくれー！

「……つくー！」

顔に、押し殺していたものを一気に吐き出すかのような息がかかった。それがどうやら笑いをこらえきれなくなつたために漏れたものだ。と気付いた時にはもう遅かった。

「お前、本当に色気のかけらもねーな。なんだよ、”ごめんなさい”って！お仕置き受けるガキじゃあるまいし……」

普通言うか？と、クツクツと喉を鳴らしている男を、私は史上最強に怨みのこもつた眼でにらみあげた。

「ふざけてたのね？コンチキショー！変態！変態！」

「知りたかつたんだよ。謝るくらい俺が近付くのが嫌なのなら、先刻のように花の力をふるっているはず。それが出来ないということ。は、やはり双月のせいで花の力が鈍っているのだろうな」

私の座る花の花びらを引つ張りつつも、シンザはまだにやにやと笑っている。ああ、こいつのにやにや笑いがまた腹だたい！

「花の力が使えないのに、お前は炎獣二匹を一度に”魅了”したのか。少しは使えるわけだな」

わけの分からないことを言いながら、再び私の頬に手を伸ばしてくるのを今度は思い切り跳ねのけた。

「これ以上近づいたらツタ出してグルグル巻きにするからね！」

「できるものならやってみろよ。ん？」

挑発されて、返事に詰まる。恐らく真つ赤に染まっているだろう私の顔を興味深い動物でも観察するみたいに眺めているその顔に一言、「悪趣味」

と吐き捨ててやったが、当の本人は、「よく言われる」と全く気にかけた様子もない。悔しすぎて噛みしめた唇が切れてしまいそうだ。「大体あんた、いつから私の事見てたわけ？」

怒りを押し殺して尋ねると、シンザはにやりと笑った。

「頭の悪い薄乳の花人が、やすやすと炎羅ごときの鎖に捕まる茶番劇の最初からだよ」

「そんな前からあ？ほんつと悪趣味だ！こっちは独りぼっちだと思いながら暗闇の恐怖に耐えてたつていうのに……」

衝撃の事実にわなわなと体を震わせる私に、シンザは鼻を鳴らし小馬鹿にした視線をよこしてくる。

「気付かないお前が悪い」

「ゴルゴ13でもあるまいし、黙って覗かれてて気付くわけないでしょうが！大体、なんで隠れて人のことこそ覗き見してるのよ。陰険。この陰険覗き変態野郎」

「……前半は意味が分からないが、後半の発言はしつかり覚えておくようにしよう。お前が俺にせねばならない謝罪は溜まる一方だ」

「じゃ、謝罪って何」

「まず、先刻の非礼の数々を土下座してわびる」

「土下座あ？あんたが最初に刃物振りかざしてきたんでしょーが。もういい。あんたみたいに話を通じない奴と話したくない。帰れ。」

「かーえーれっ、かーえーれっ、かーえーれっ」

こぶしを振り上げ、帰れコールを叫び出した私をシンザはこめかみを押さええて見ているが気にしない。

「やれやれ。希代の花から生まれ出た花人がお前のような奴だとはな……まあ、意外な能力もあるようだし、半身候補だとは認めてやっても良いか……」

半身候補と認めてやってても良い？

えつらそうに！何さま？

引っかかる物の言い方とその内容に、私は帰れコールのこぶしを収めてビシリとシンザに指を突き付けた。

「私、聞いたんですからね。その半身つていうの、すごく危ない役目なんでしょ？家族を心配させるようなことはしません。これでも嫁入り前の一人娘なんでね！」

「ふん、あのお喋りウサギが余計な事を。まあ、説明する手間が省けたな。どのみちお前に選択権はないけどな」

私の発言など全く歯牙にもかけていない様子で、シンザは羽織っていた漆黒のマントをばさりと後ろに跳ねのけて宣言した。

「ムスカに聞いたが、お前は濼界でも天界でもない、ましてやこの大陸でもない場所から来たそうだな？最初は平凡な己を擁護せんがための詭弁かと思っただが、まあ信じない理由もないことだし、ひとまず信じてやろう」

「偉そうに……あんたに私の世界のライターでも使って見せてやりたいよ……」

ハナから胡散臭い存在だと決めつけられているような気がして、少なからずムツとするが、原始人のような格好をしたシンザが、ライターに驚きひれ伏している映像を脳内に浮かべて、ひとまずイライラを押さえる。

「もといた世界に家族を残してきたんだろう？引き離され、さぞや会いたいだろうになあ？」

優しい口調とは裏腹に、心のこもっていない労わりの表情をわざとらしく作って見せ、シンザはにやりと笑った。

「俺の半身となって俺と共に東の神妖を手に入れば、もとの世界に帰ることも叶うぞ」

「……どうやって？」

あいつはとんだぺてん師やで。

ウサギ達の先ほどの言葉が脳裏によみがえる。花の上に座りつつも、知らず両手を後ろ側について、のけぞるようにシンザと距離をとっていた。そんな私を面白そうに見下ろして、シンザは私の前に右手をズイ、と差し出す。

「俺は西の大陸、並びに炎山統治の権利を持つ。神妖ギイスカルと

の契約者だからだ」

そういう彼の右手の中指には大ぶりの紅玉の付いた金の指輪が光っていた。

「なにこれ？」

見せつけるように眼前に出された指輪を仕方なく眺める。竜のような生き物がリング部分に彫られた精巧な細工ものの指輪で、見るからに高そうだ。しかしこんなものを見せつけるなんて、シンザは宝石を自慢したいのか？よく分からない。

私の要領をえないリアクションにシンザがやれやれとばかりに首を振った。

「これは契約の指輪。神妖ギィスカルとの契約の証しだ。もとは俺の父上が契約していたのを、俺が継承の儀を経て引き継いだんだよ」

「ほお〜」

「ほお〜、じゃねーよ。つまり、もし東の神妖フレアテとの契約に成功すれば、西と東、両神妖を手中にすることができる。神妖が二人揃えば、天界の主に匹敵するといわれているのは知っているだろう？」

手を月明かりにかざし、紅玉に月光を浴びせていたシンザが片眉をあげて尋ねてくる。

そういえば、先ほどそんな話をきいたような……。

力なく頷く私の前に、シンザはここぞとばかりに詰め寄ってきた。

「神妖二人は神の力。同時に召喚して助力を請えば、必ずや元の世界に変える方法を教えてくれるだろう」

「……本当に？」

「間違いない」

男は金色の目を光らせて頷く。

額の赤い布から髪の毛がひと房落ちて、はらりと頬にかかったのを見て、即座に顔をそむけてしまった。

急に動悸が激しくなったのは、一度に色々な事を言われて頭が混乱しているからだと自分に言い聞かせ、必死に頭を働かせる。

ウサギ達は、彼が信用ならない男だと言っていた。だが、ムスカは半身としてこんなに心強い相手はいないとも言っていた。一体誰を信じたらいいのか分からない。混乱する思いに頭をかかえたくない。

仮にシンザの言うように神妖を二人揃えたとしても本当に帰れるのかどうか、実際はあやしいところだ。

しかし、ここでその半身となる話を断ったとしても、事態は変わらない。何も知らないし何もできない私は、花に繋がれたまま暗闇の中、手探りで帰る方法を探さなくてはならないだろう。

ならば。

覚悟を決めて私は顔を上げた。

「さつきみたいなこと二度としないって誓えるんなら、なるよ。半身」

金色の光を正面から見据える。

私の言葉にシンザは唇をゆがめると、「まあ、おいおい努力してゆく」とだけ応えたのだった。

何かが一つ、確実に動いた夜だった。嘘も、真実もごちゃまぜにして。

6・覚悟を聞かせる午前2時。(後書き)

お気に入り登録、ありがとうございます。心から感謝します。

今さらなのですが、ウサギ達は大阪弁で会話してますよね。関西圏外の方にとって読みづらかったりするのではないかと不安が出てきました。

あと、自分の中で15禁の線引きをどうつけようか非常に悩ましいです。

7、花人は、今度は巨乳の夢を見る。(前書き)

ほんの一滴ほど、百合的表現が出てきます。苦手な方はマウスをものすごい速さで下にスクロールして飛ばして下さい。

7、花人は、今度は巨乳の夢を見る。

歩く。

乳白色の靄の中を、私はひたすら歩き続けている。雲の上を歩くような頼りない感覚に足がすくみそうになるけれど、何かに招かれているかのように気持ちがいせいで、ただひたすら歩く。時の感覚は薄れ、上も下も右も左も、自分がどこにいるのかさえ分からない。

分かるのは……、そう、これが夢の中だということだけ。異世界に渡ることですら夢のような話なのに、さらになお、今私は異世界にて夢を見ている。そんな自分が滑稽で笑い出しそうになる。

それにしてもいつまで歩けばいいのだろう。夢が覚めるまで？でもいつ覚めるの？漠然と考えたとき。

ふいに、赤い色が花火のように閃いた。

柔らかい風が優しく靄を取り払い、一瞬だけ視界が明らかになる。

どこまでも続く無限の白い草原に、

女の人があった。

風もないのに空に舞う長い赤毛。遠目からでもはつきりと形が良いと分かる美しい瞳は赤色で、炎のようにゆらめきながらこちらをじっと見つめている。

綺麗な人……ていうか、何あの巨乳！でっかい！それに、なにあの細いウエスト！私と全然違う……。

夢だしいいよね、と私はその女の人のくびれたウエストラインをぶしつけにもじっと見つめてしまう。それは上部へは豊かな胸のラインを形成するためにゆるやかなラインを描き、下部へは芸術品の

ような丸みを帯びたお尻のラインを描きつつ、長い両足へと続いてきた。

二種類のため息が同時に出てしまう。つまり、美しいものに対する感嘆のため息と、自分とのあまりの違いに出てしまう嘆きのため息だ。

それに気付いたのか女の人はこちらに首をかしげて見せると、あでやかに微笑んだ。と、同時に女の人の背後でバラに似た赤い大ぶりの花がニョキニョキと一斉に生え出し、それらは早送りボタンを押しただかのように一気に成長すると、ものの数秒でつぼみから大輪の花々へと姿を変じた。

わが夢ながらすごい演出だなー、おい。

口をあける私をよそに、女の人はバツクに大輪の花を背負いつつゆったりと私に手を差し伸べた。

「ちいさき迷い子。こちらへおいで」

「へっ、あ、あ、あっしのことですか？」

あっしって。私でしょうが。

夢の中でさえ緊張して舌を噛んでしまい、うまく言葉をつむげない。

「そう、おまえのことだ。つまらぬ迷い子よ」

女の声は呼びかけとは裏腹にどこか温かく、私の警戒心を一掃する魅力にあふれていた。

「はやくおいで。凡庸な迷い子よ」

……呼びかけが毎回ひどいけなし言葉に代わっているような気がするが今は置いておこう。

誘われるまま、女の手の届く場所まで近寄ると、女が何か手に持っているのが分かった。

目を凝らしてギョツとする。それは鎖の束だった。驚いたのは鎖に対してではなく、女の手の鎖の束の先にあつたものである。

鎖を下にたどると、その先端は女の片足に着き、そこに容赦なく二重にも三重にもからみついていたのだ。

じ、自分で自分の足に鎖巻いちやってますよー、この美女。

どう突っ込めばいいのか悩む私の視線に気付いた女が、鎖を持っていないほうの手で私の頭に手を伸ばし、優しくなでてきた。

「これは、いにしえの契約。わたくしが、わたくし自身にはめた足枷なのだから心配いらぬ」

「あの、外してあげましょうか？」

女の人の指は白く、細い。力もなさそうだしきつと鎖が絡まって取れなくなってしまうたんではないだろうか。至極まっとうな問いに、女は小さな笑い声で答えた。

「おまえには外せない。あの人との約束なのだから。契約が執行される条件が整わない限り、わたくしはわたくしの枷をはずさない」

女のたおやかな指が私の髪を優しく梳く。気持ちよさに言葉の意味を問いただすことはどうでもよくなって目を閉じた。喉を撫でられる猫の気持ちばかりかけたその時、女が身をかがめた。

数瞬遅れて、唇に暖かく、柔らかい感触を感じる。

「わたくしが欲しいでしょう？欲しいといいなさい。さあ、契約を優しい問いかけ。静かな命令。ダメ押しで女の赤い髪がたなびいて私の頬を優しくくすぐる。私がもし男なら、ハイと即答しているところだが、残念なことにメスなんですよね、私。

新聞の勧誘、押し売り、甘い話はすべて断ることが我が家の家訓。亡き父親に代わり家長を務める私はそのしきたりを異世界でもしっかり守る。

「結構です」

「欲のない」

女の声は私の返答を予想していたかのように平坦だ。

「無理やりにも頭かせたいけれど、おまえは異世界の者。異世界の魂にわたくしの呪言は届かない」

「母親がクーリングオフのできないものを色々買っちゃって痛いめにあって以来、何でもかんでもハイハイ頷くなっているのが父親の遺言でして……」

美女が少しばかり悲しそうに眉をひそめているので、何か申し訳ない気持ちになり、つらつらと言いつつ、訳がましいことを言い連ねてしまふ。美女は聞いているのかいないのか、曖昧に頷くと私の目をじつと覗きこんできた。

「でもおまえは敗北したくないだろう？争奪に勝ち、おまえのいた次元へ帰りたいたらう？」

「そりやもちろん！今すぐにも帰りたいたいよ！帰れるの？」

帰る手だてを知っているかのような女の言葉に、夢だと分かっているつもりも希望を見だし、思わず女にすがりつく私を美女は優しく抱きとめる。耳元に甘い香りと共に吐息が忍び込んできた。

「ではわたくしを探し、彼を守れ」

「彼って？」

「虚ろの王。偽りの征服者。しかばねに鎮座する、彼」

「うつろ……えっ？ごめん、なんのことがよく分からない。メモるからもう一回言って」

自慢じゃないが記憶力は悪い。起きたら忘れているかもしれない言葉を書き留めておこうとあたふたとあるはずのないペンと紙を探す私に、美女は哀しく微笑みかけた。

「わたくしはここから動けない。だから、わたくしと彼をつなぐ、糸になりなさい」

言葉は命令だが口調は哀願そのもので、私はその真摯さに、知らず知らずのうちに頷いてしまふ。

途端、乳白色の霧が急速に濃度を増し、美女の姿をその白いマンツトで覆い隠してしまった。

おいおい、ちょっと待って下さいよ。帰る方法のこと、聞いていない。

焦って手を伸ばしても、もはや何も掴めない。

取り残された私は、途方に暮れて立ちつくす。

霧の中、周囲がぐるぐると回り始めたような気がして、遠のく感覚に身を任せ、目を閉じた……。

目覚め、周囲を見渡す。

そこは異世界三日目にして、もはやなじみの出てきた花の上。埋まっていた足は、もう足の甲まで見えてきて、あと少しで抜けそうだ。

しかしまた、よく分からない夢を見てしまった気がする。

どうにも現実感に乏しい、鬱蒼とした木々をぼんやりと眺めながら、私は先ほどの夢と同様、霞がかかったような頭で記憶を再確認した。乳白色の霧。赤い美女。突然、とあるワンシーンに思い至った。

「キスされちゃったよ……」

しかも美女に。

先ほど見た夢を巻き戻し、赤面しつつつぶやくと、

「あん？誰がお前なんぞに口づけるか」

唐突に、頭上から言葉が降ってくる。

見上げる間もなく、花に差し掛かる大木の枝から、一人の男が地上に音もなく降り立った。

おまえは忍者か？

腕を組み、侮蔑の視線を遠慮なく寄こしてくる彼——シンザに心中で突っ込む。

異世界はどうやら朝を迎えたばかりのようで、昨夜、私を震え上がらせた獣の唸り声は消え、代わりに耳に心地よい小鳥のさえずり声があちこちから聞こえている。しかしそんなさわやかな朝を一蹴する男の登場に朝から思わず嘆息してしまった。

” 半身となった男は花人を守るため、足が抜けきるまで花人の傍に付き従う”

という言葉通り、どうやら彼は私がいつの間にか眠ってしまっても、一晩中この私の頭上の木の枝で寝て過ごしていたらしい。ありがたいといえはありがたい話なのだが、どうやらこの男、寝起きは

すごい悪いらしく、私を見下ろす瞳はいつにもまして不機嫌に見える。

「早朝早々、気持ちの悪い独り言で俺を起こすな。だいたい、俺の半身に選ばれたからといってうぬぼれるなよ。この身の程知らずの薄乳が」

「あ、あんたにキスされる夢なんか見てない！あんたにじゃなくて……」

赤毛の巨乳美女によ！という言葉を目の前でとどめる。いかん、これじゃあ私が欲求不満みたいだ。

ももごと押し黙った私にシンザは鼻を一つ鳴らすと、胸に片手をあてて厭味つたらしくお辞儀をした。

「まあとにかく。我が半身候補どのおかれましては、今朝もご機嫌麗しく。私の編みあげた結界の居心地は如何ですか？」

「結界？」

聞きなれぬ言葉に眉を寄せると、シンザは片眉をあげ、わざとらしい驚きの表情で首を振った。

「我が半身様は子どものように無知で、愚かでいらつしやる。結界とは天花と花人を守るための覆いのようなもので、例えば愚かな花人が低級炎獣なんぞに狙われるような、くだらない事態を避けることもできるのですよ」

…… 本当に嫌な奴だな。こいつは！

半身とやらになる決意は間違いだつたかもしれない。にやにやと嫌な笑いを向けてくる男を睨みつけながら、どうしたら穏便に前言を撤回できるのか考え始めるが、ふいに腕を掴まれ思考を中断する。

「ふむ、何の鍛錬もされていない、見事にだらしない腕だ……」

真剣な顔で失礼な事を呟きながら、掴んだ私の腕を遠慮なく観察しているその美麗な顔に、思い切り右ストレートをかましてやりた。が、それを行動に移す前に、花びらたちの方が勝手に閉じて私を包みこんでくれた。おお、偉い、花！調子も戻っているようで嬉しい。

昨夜はこの花の不思議な力が使えず、この歩く18禁男に恐ろしいめに合わされそうになったが今日はその心配もしなくて良さそうだ。

と、安堵のため息をもらすのもつかの間、目前の花びらが無理やりかき分けられ、そこからシンザがホラー映画のワンシーンのように獰猛な顔をのぞかせてきた。

「俺が話している途中で花を閉ざすとは、良い根性だ」

「あんたが失礼な事ばかりするからでしょうが」

「失礼？お前に礼を払う必要などない」

言いきるシンザは花びらを躊躇いもなく引きちぎると、地面に投げ捨て、再び私の手首を掴む。

「大体お前、こんな腕で剣を扱えるのか？」

「そんなもん使えるわけないでしょ」

「……信じられないな。妖力も絞りかす程度にしか持たないうえに、武術の心得もないときた。こんなのを半身に据えるとは、俺も早まったか？」

シンザは額に手をあてて、この世で最も非常識な状況に遭遇したかのように嘆いているが、一体、現代日本に住む一般女性のうち、どれくらいの人が剣を扱えるというのだ。

私は釈然としない不快感を抱えて押し黙るが、それをシンザは不安の沈黙と受け取ったらしい。

「まあこちらとしても力の無いままお前を放置するわけにはいかなからな。お前が花から解放され次第、すぐに武術・妖術の特訓を始めるぞ」

なんの慰めにもならないことを言っただけ私の肩を叩いてきた。特訓つて、まさかこいつが教官？

嫌な予感に身がすくむ。シンザが心の内を見透かしたかのようににやりと人の悪い笑みを口元に刻んだ。

「残念ながら俺はそこまで暇ではない。ムスカがそろそろお前の世話役たちを引き連れてやってくるはずだ。お前はそいつらから最低

限の剣の扱いと妖術の使い方を学べ」

「世話役つてまた大層な……」

「やっと現出した半身様に、煉火宮の五神官達の間ではお前の世話役を誰が射止めるかと小さな争いが起きたらしいぞ。結局、武術と妖術それぞれ秀でたものが一人ずつ選ばれたのだが、お前を見て何というか見ものだな」

私が半身になる決心をしたことで、何やら関係者たちも動き始めたらしい。しかしあまり歓迎したくない方向へ話しが進んでいつているような気がする。

「私、運動は出来ない方なんだけど……」

「したくなければ勝手にしろ。守られるだけの半身など、容赦なく切り捨てさせていたただけだ」

文字通りにな、と続ける。血に濡れた剣を持つ彼の足元に、死してひれ伏す自分の幻影を見た気がして慌てて目をそらした。

「力の無いものに生きる価値はない。せいぜい努力して、俺の足を引っ張らぬよう強くなれ」

一段と低くなり、急に冷たさを増す声。その冷たい黄金の瞳の奥底に暗い炎が見え隠れしている。

この人は本気だ。私が役立たないと判断すれば即座に私を殺すだろう。

いわれのない確信にわたしの背筋がひやりと冷たくなる。

一体、この男の力へのこだわりはどこからきているのだろうか？

冷たい瞳に捕らわれて、思考を深い闇へ落としかけた私の背中に、唐突に。

「シンザ様あー！シンザ様あー！お会いしとっございましたあー！」

底抜けに明るい声が浴びせられた。

恋する乙女のごとくキラキラした輝きに彩られたその声の美しさに思わず振り向くと、そこには。

唇をへの字に引き結んでたたずむ、懐かしいしわくちや顔のムス力。

黒髪を眉毛の上でパツンと切りそろえた、涼しい瞳の美少女。

そして、両手を組み合わせて私にはなく、私の前に立つシンザに熱いまなざしを送る、赤毛の美少女が、いた。

7、花人は、今度は巨乳の夢を見る。(後書き)

花から生えているおかげで場面が全く動かないという。早く動いてほしいです。

8、花嫁修業のオ二教官。

赤毛の少女はスキップでこちらに駆け寄るんじゃないかというくらいのはしゃぎっぷりで、何度も手を振りながらやって来た。み、見えるよ。彼女の周りに飛び交うおびただしい数のハートマークが。彼女たちの後ろには巨大な鷹のような鳥が、くちわと手綱のようなものをつけられ羽根をバタバタとさせている。どうやらあれに乗ってここまでやって来たらしい。なんだあれ！移動手段の一つか？トカゲもどきと言い、巨大な鷹と言い、全く異世界の交通手段はわけが分からないな。

私の困惑をよそに、ムスカは鷹の手綱を近くにあつた手頃な木に括りつけ、その口元に懐から出した干し肉のようなものを投げ込んだ。嬉しそうに咀嚼する口元からは、鳥のくせに獷猛な牙が見え隠れしていて、私は絶対に近づかないように心に決めた。

そうして三人はシンザの前に揃うと優美なしぐさで膝をつく。ムスカはくるぶし丈のワンピースを着ているが、二人の少女は詰襟の、体にぴったりにした漆黒の上着とそろいのズボンを身につけていた。

ズボンの裾は茶色い革のブーツに入れ込み、幅広の銀色の布をベルトのようにしっかりとウエストに巻いている。年頃の少女が着るには余りにも武骨で、まるで軍服のようないでたちは、しかし彼女たちにはよく似合っていた。美人は服を選ばないって本当だな。

しかし、赤毛の少女は短剣らしきものを、黒髪の少女は長剣を腰から下げているんだけど、18、9にしか見えない彼女らがそんな物騒なものを持っているなんて、平和ボケした私から見たらなんだか奇妙なコスプレにしか見えない。

じろじろと少女たちを見ていたら、黒髪の子がつと視線を動かした。あ、今日があつたぞ。

と思ったのもつかの間、少女の目が思い切り見開かれた。が、すぐに口を引き結び、表情を消すと私に向かって頭を軽く下げる。今の、どういう意味の謝罪なんだろう。美人だと思っていた花人が至って普通の面構えだった事に驚いてしまつてスミマセン的な謝罪？だとしたらいたたまれない。

「シンザ様、このたびはおめでとうございます。また、お忙しい中、半身様への御挨拶のお時間を作つて頂き心から感謝申し上げます」
黒髪の少女は私から視線を外すと頭を深く垂れ、胸に手をあてた。首元で切りそろえられた髪がさらりと揺れ、彼女の凜としたたたずまいに少しだけ色気を添える。

「アドラも心から感謝いたします！」

隣に膝をつく赤毛の少女はそんな彼女を横目でにらむと、いかにも偶然肩がぶつかったふうを装つて肩で押しやりつつ、ずい、と前ににじり寄つた。おおっと、女同士の戦いが今ここに！というか戦っているのは赤毛の彼女だけで、黒髪の子はいたつて普通なんだけど。「シンザ様が半身を得られたと聞いて、アドラは、アドラはどうしてもお会いしてお祝い申し上げたく、ムスカ様に無理を言つて駆けつけましたの。シンザ様、心からお祝い申し上げます！」

お祝い申し上げるといふより、お慕い申し上げるの言い間違いだろう。緑色の目を熱烈に輝かせ、赤毛の少女はじつとシンザを見上げている。視線で目玉焼きが焼けそうだ。

しかしシンザは気にとめた風もなく鷹揚に頷いた。態度から察するに、このような暑苦しい視線には慣れっころしい。むかつくなあ、このクールさ。この子たちに、ツタでぐるぐる巻きにされていたあの情けない姿を見せたい。

「焰火宮の五神官はいずれも能力の秀でた者たちだが……やはりお前たちが選ばれたか」

シンザの声に黒髪は唇を引き締め背筋を伸ばし、赤毛の子はにへらあと表情を崩した。なんだか対照的な二人に見ていて思わず笑つてしまいそうになる。黒髪・黒眼と同じ色彩を持ち、礼儀正しい性格

も見え隠れする態度の黒髪の子の方が私的には好ましい。

「カガリ・デイ・シータ」

「はい」

黒髪の少女がシンザに名を呼ばれ、頭をいつそう深く垂れる。

「アドラメルク・デイ・レキア」

「はあい」

赤毛の少女はくねくねと小首をかしげてシンザを見上げた。普通に返事が出来ない病らしい。

シンザは二人を順に見やると私を顎で指し示し、右手をつい、と膝をつく少女たちの前に差し出す。

「本日より我が半身の影となり、いついかなる時も半身に従い、また半身の成長の礎となるべくその身を奉じよ。シンザ・ロウ・ムソウがこの名において命じる」

「なーにが」名において命じる”よ。ぺつ。一般人が口にしたら頭を疑ってしまうようなありえないセリフでもこの男なら不思議と似合ってしまうのが悔しい。性格は悪いのに、普通にしていたら格好いいというのはある意味サギだな。

「謹んで承ります」

カガリと呼ばれた黒髪の少女はシンザのこぶしを恭しく押しただき、中指にはめられた指輪に口づけた。と、ふいに横から再び肩で押されて、バランスを崩しそうになる。危ういところで押しとどまった彼女は、隣から肩タツクルをかましてきた少女を冷やかな目で睨みつけたが、主君の前で争う気はないらしい。

「アドラもこの身をシンザ様に捧げます。いえ、とうの昔から、身も心も捧げています」

「その熱意、ぜひ半身の育成に活かしてくれ」

奪うようにシンザのこぶしを手に取り、指輪に深い口づけを落とすたものの、なかなか頭を上げる気配の無い赤毛の少女の後頭部を、シンザはわずかにあきれを含んだ目で見下ろした。

「もうそのくらいにしておきなさい、アドラメルクよ」

二人から一步離れたところに控えていたムスカが諫めるとアドラメルクはしぶしぶといった体で唇を指輪から離れた。

「ではお前たちがこれからその身を奉じお守りすることになる半身様に御挨拶を」

ムスカは私の前まで来ると、私の羽織っている、ムスカがくれた白いローブを整えてくれた。耳元で、「よく生きていた。わしは嬉しいぞ」とささやいて、意味が分からず首をかしげる私に静かな微笑みを向ける。

「こちらに鎮座しますお方が、西の大陸、至高にして最後の至宝。異界よりお越しになったトウコ様、我らの半身様じゃ」

「ばーん！とばかりに片手を私にかかげてドラマチックにお披露目してくれるが、二人の反応は薄い。カガリは固い表情のまま私の顔を見つめ、アドラメルクに至っては私の姿をその目に認めてもそのまま素通りして、私の背後や周囲にまだまるで誰かが隠れているのではないかと言いたげに視線をあわただしく動かしている。

しかしまた私もどういいう態度をとっていいのやら、分からない。今まで貧乏生活しか送っていない普通の人間に、いきなり教育係や世話係などつけられても困るんですけど。

「あ、あの、竹上トウコ、です。趣味は節約、特技は暗算です…

…」

とりあえず自己紹介して接客業で鍛えた営業スマイルも添付してみるのが、二人の表情はより一層困惑に彩られるばかりだ。はた迷惑な事に、花人は美しいっていう認識はこの世界においてよほど鉄板の常識らしい。ええい、迷惑な話だな！

「お前たちの戸惑いはよく分かるが、この女は顔こそ平凡、妖力はゴミ程度ながら異界から来たという異質性がある。一縷の望みに賭けて我が半身に据えることにした」

シンザが私の頭に手を置き、犬の頭でも撫でるような気安さでポンポンと頭をたたく。振り払ってやりたいが、今それをするその後あとどんな仕返しをされるのか想像するだけで恐ろしいのでとりあえず

睨みあげるだけにしておいた。

「なんてお心の広いお方なのでしょう、シンザ様」

感極まった声を出して、アドラメルクは胸に手をあてると私のそばまでやってきて、優雅に腰を折り、花びらを手に取ると唇を落としました。

「なんて美しい天花なんでしょう、みずみずしい妖力に満ちた花びらのこの神々しさ！花人様もこのようなお姿は仮のお姿で真のお姿は異界に置いてこられたに違いありませんわ」

おお、新しい解釈だ。しかもけなしていないように見えてさりげなくけなすこの技。この少女、ただものじゃないな。

花びらを「神々しい」「ありがたい」などと褒めそやしながらひとしきり花を愛でている少女の横に、カガリが膝をつき私に視線を合わせてきた。涼しげな瞳が媚びも蔑みもなく、伶俐に澄み切って私をうつしだす。

「半身様、御挨拶が遅れましたことお詫び申し上げます。我らは神妖ギイスカル様を奉じる神殿、焰火宮より、恐れ多くも半身様のお世話を任命され参りました者。私は、五神官の一人、カガリと申します。半身様にはこのカガリめが剣技・護身術等の武術をお教えいたします。若輩者ながら命の限り尽力いたしますので、どうか御前にはべる不躰をお許し下さい」

よどみなく挨拶を述べ、私にもきつちりと頭を垂れるカガリに、今まで人に頭を下げられたことなど数えるほどしかない私は、緊張してあたふたとお辞儀を返した。

「半身様、私のようなものに頭など下げてはなりませんよ」

非難がましい口調でカガリにさっそく怒られたわけだが。なんだかムスカに似ているな、この子。真面目なところに好感を持てるが、自分に厳しく他人にも厳しいスパルタ人間かも……。

「カガリ、半身様を早速諫めるなんて失礼だよ」

赤毛の少女が花びらを愛でるのをやめて私の手を取る。暖かい握手に故郷に残してきた人達のぬくもりを思い出し、少し胸が締め付け

られた。

「私も焔火宮からカガリと共にお役を賜り参じました。私は五神官の一人、名をアドラメルクと申します。私がお教えることは何もありませんが、半身様に妖術をお教えするよう申しつかつております」

「カガリ、アドラ。こいつは一から全く何の訓練もされていない素人中の素人だ。あと二日もすれば足が抜け、神殿より暁の聖母がお迎えにみえるはずなのだが、その時までには少しでも形になるよう、最低限の礼儀と知識を身につけねばならない。全てはお前達にかかっているからな。頼むぞ」

シンザはカガリとアドラの肩をそれぞれ軽くたたくと、私に目もくれずムスカのそばまで行き、何か小声で話し始めた。時折ちらちらとこちらを見ているような気がするが、いったい何を話しているのだろう。

「さて。俺とムスカは少々話さねばならぬことがいくつがある。しばし席を外すので、その間にでも、こいつの暑苦しいローブ姿をなんとかしてやってくれ。神殿から着替えなど色々と持ってきたのだろうか？」

「はい、ここに」

アドラが鷹に駆け寄ると、太もも部分に括りつけていた箱を取り外しかかげてみせる。耐久性を重視してか武骨にゴツゴツした固そうな革の箱は、しかしアドラの手で開封されると、ちらりと見えただけでもきらびやかな装飾品、淡いピンク色の布や上質そうな生地の中に内包していた。

ていうか、あれを私が着るの？無理無理無理。ピンクとか絶対に合わないから！それだけは絶対を選ぶなよという私の祈りが通じたのか、アドラは数瞬間んだ末、シンプルなクリーム色のワンピースを箱から取り出した。

うん、ワンピースだと足が固定されても上からかぶればいいだけだから簡単だよな。

しかもこの三日裸にマントという何とも情けない恰好だったのだ。着替えられるのは単純に嬉しい。

「ああ、こいつの象牙色の肌になじみがよさそうな色だ。着せてやれ。ムスカ、行くぞ」

シンザはムスカを促すと、ひらりと鷹に飛び乗った。ムスカもよたよたと危なっかしい足取りで鷹に乗り込む。

「また夜半に戻る。頼んだぞ」

鷹の上からこちらを見下ろすさまは、腹ただしい事に一枚の絵画のように美しい。顔に集まるうとする血流と必死に戦う私を尻目に、アドナが人目をはばからない感嘆のため息を漏らしたのだった。

なんだかよく分からない状況になってしまった。

シンザとムスカを乗せた鷹が飛び去った後、私はいたたまれなくなつて、とりあえず二人に笑いかけてみた。しかし緊張で顔がひきつる。う、うまく笑えなかつたかもしれない。

二人の視線を痛いほど感じて汗ばむ私の耳に、小さなつぶやき声が聞こえた。

「つたく……じょーだんにも程があるぜ。なにが哀しくて、西の大陸の妖術の天才たる僕がこーんな子ネズミの面倒見なきゃなんねーんだよ」

……はい？

なんか今、ものすごくどす黒い少年の声が聞こえたんですけど！自分の耳を疑ってきよろきよろとあたりを見回すも、その言葉を発したと思われる少年の姿は見つからない。

ただし、

「大体、シンザ様もどうかしているよ。こんなヤツが半身なんかのわけがない。美しさも僕の方が上だよ。思わない？カガリ」

低いひくい少年の声は、今現在も目の前のもと美少女アドラメル
クの口から漏れていて、よくよく眼を凝らせば、彼女……もとい、
彼の喉には、はっきりと喉仏がついていた……。

8、花嫁修業の才二教官。(後書き)

エロが書きたいです。我にエロの筆力を……。15禁マークが泣いていますよ！

カガリはこの世界で一番安定した常識人です。彼とか彼は……。常識何それおいしいの、なかんじ。

9、花人は異界にて漢字を教える。

「何かの間違いだと思わない？こーんな子が花人で、シンザ様の…
…半身だなんてさ！」

喉仏をつけた美少……年、アドラメルクは怒り収まらぬ様子で、私の座る花の花びらを思い切り平手で叩きつけた。あの一、あなた、それさつき「神々しい」とか言って愛でてましたよね……？

揺れる花びらから目の前でぷりぷりと肩を怒らせている少年に目を移し、茫然と見つめる。

二重人格？というか、オカマ？

いやいや、世の中には色んな趣味嗜好の人がいるんだし、私だって言われなく趣味を理由に人を嫌悪したり差別したりする気は毛頭ない。いや、でもこれは想定外だ。大体、この子、男の子なんだよね？で、女ことば使ってくねくねしながら、シンザに熱い視線を送っていたよね？怒りに頬を紅潮させている今は怒れる少年に見えなくもないけど。

「なにじろじろ見てるのさ。僕みたいな美少年がそんなに珍しいのかよ」

はい、珍しいです。女言葉を話す二重人格美少年@男に求愛中なんて初めて会いましたよ。びっくりして言葉が出ないですよ。

「口を慎め、アドラメルク」

氷のように冷たい言葉が、固まる私と腕組みするアドラメルクの間に降り立った。

カガリが、アドラメルクの首に、鞘付きの剣を水平に当てている。

いつの間にも動いたのだらう。見かけだけで判断するならば、まだ幼さの残る顔立ちに線の細い体で一見たおやかな少女なのだが、この身のこなしから察するに、本当に武芸の達人なのかもしれない。

「それ以上無礼を半身様に働くなら、貴様の首を切り捨てるぞ」

「……やれやれ」

顔を動かさないまま視線を横に動かし、カガリの姿を隣に認めたアドラメルクはいまいましげに顔をひそめた。

「カガリ。僕は君のそういう実直なところが好きだけど、同時に反吐が出るくらい嫌悪もしているよ。君はゴミに等しいガラクタを、上から”守れ”と言われただけで後生大事に守るんだね」

この世界の人たちはどうしてこんなに口が悪いのだらう。できそこないに始まってガラクタだとか、いくら図太い神経の持ち主たる私でも少しへこむぞ。私は落ち込んで頂垂れそうになる頭を持ち上げ、年上の威厳を持ってアドラメルクを見据えた。

「ねえ、アドラメルク……さん？くん？まあいいや、アドラメルク、私だって好きでこんな所に来たわけじゃないし、好きで半身とやらになったわけじゃないんですよ、不本意な事に」

「好きで半身になったわけじゃない？平凡な顔して、妖力も持たずによく言うよ！」

私の言葉はどうやらさらにアドラメルクの怒りの炎に油を注ぐものだったようで、彼はいきり立って形の良い眉を吊り上げた。喉元に付きつけられたカガリの剣をぐい、と下に押しやって私に詰め寄る。

「君はシンザ様の半身に選ばれるっていうことがどれだけすごい事なのか分かってるわけ？好きでなったわけじゃない？だったら僕が代わりたくらいだよ！」

「すごいことかどうかはおいといて、危険な事だつてことは知ってるわよ！ものすごく偉い妖怪を手に入れるための争奪戦に参加しなきゃいけないでしょ？できたらそんな生存率の低そうな戦い参加したくないわよ。でも仕方ないじゃない」

それしか、もとの世界に戻れそうな方法が見つからないんだから。言葉を飲み込んで黙る私の肩を、花からツタが伸びて優しくぽんぽんと叩いてくれる。ありがとう。私の味方は君だけだよ。うなだれる私を見やるアドラメルクの瞳はしかし冷たい。

「シンザ様の隣で戦える名誉を分かっていないな。ほんと、失望する」

「何が名誉よ、あんな変態暴力男なんかの相棒……」

「へんた……っ！シンザ様を侮辱したな！」

「落ち着け、アドラメルク。半身様も、どうか御身の半身たるシンザ様の事をそのようにおっしやるのはおやめ下さい」

カガリは、私に掴みかかろうとしたアドラメルクの襟首を掴んで、彼に低い声で注意した後、眉をひそめて私を見つめた。一人の少年の全力の抵抗を肩腕一本でとどめているカガリの腕っ節の強さに少し戦慄していた私は、突然向けられた、炎も凍らす氷の視線にこくこくと頷くしかできない。

この子、怒つたらめちやくちや怖そうだなあ。

「シンザ様はアドラメルクの言う通り、最も尊き血を持つお方なのです。あのお方の指輪をご覧になったでしょう？あれこそが大陸統治者の証し。この大陸にいないてはならない、太陽のようなお方な

のです」

「太陽……」

思わず噴き出しそうになる。初対面の人間に、薄乳などという不届きなあだ名をつける太陽があつてたまるか。

私の突っ込みをよそに、カガリはシンザの事を思い出しているのか、熱っぽい視線を宙に漂わせた。

「あのお方は24の若さで御父上……先代の大陸統治者、”白煌のアジエ”様より神妖ギイスカル様との契約を継承し、大陸の統治者となられ、以来この地と炎山を治めてこられました。そして、100年前、東の神妖の契約者が失踪し、新たな契約者をめぐり争奪が始まってからというものの、ひたすら半身を探し続けておられたのです……ずっと、あなたを、待つておられたのですよ」

角度によっては紫色にも見える黒曜石の瞳で私をじっと見つめ、カガリは一息ついた。

「突っ込みどころが多すぎて何から突っ込めばいいのか……」

額を押さえる私に不思議そうに首をかしげるカガリ。彼女は自分で少しも疑問に思わないのだろうか？

「100年前、つて……あいつ、一体いくつなわけえ？」

「24の歳で時を止められ、今は御年124、今年の子力の月で125歳になられますよ」

「……………そう」

言いたいことが色々頭をめぐるが口に出せずに、結局嘆息する。非常識な情報のオンパレードで頭が爆発しそうだが、今は余計な事

を考えずにシンプルに考えよう。

要するに、あの男は見かけは24歳、頭脳は124歳のご老体なわけだ。神妖だとかなんだとかいう前に、あいつが一番の妖怪じゃないか。しかし124年も生きていてあの横暴で子どもっぽくて失礼な性格はある意味すごい。三つ子の魂百まで、ってやつだろうか。

「大陸統治者を筆頭に、ごく一部の限られた方々のみが時を止める権利を持ちます。無論私たちのような者はみな平等に年老い、限りある命を終えますが、シンザ様や御尊母であらせられる、暁の聖母様のような尊い方たちは時を止め、西の神妖との契約を終えるまでこの大陸をお守り下さっているのです」

尊い方、という形容とあの暴力男の実体とがどうしても結びつかない。カガリの話しぶりから察するに、どうやら今のところ不老不死のスーパー権力者ということのようだが……さつきは長年生きてる割に大人げの無い性格だと思ったが、よくよく考えると124年間もこうやって崇め奉られてしまったら、調子に乗って多少性格が歪んでしまうのも仕方がないな。ああ、私はそんな権力者相手にあんな暴挙やこんな暴言を……！

脳裏に自分があいつにしてやった様々な仕打ちを思い返し、冷水を浴びせられたように全身に鳥肌が立つ。

「我らは西の神妖ギイスカル様を奉る神殿より、今回現出あらせられた半身様をお守りするだけでなく、護身のすべをお教えるために遣わされたのです。どうか、そのように御自身を卑下なさらないでください。なりたくなかったが半身になった、などと仰られては我らの立つ瀬もなくなりませう」

カガリは私の手をとると、力を込めて握りしめてきた。

なんだかよく分からないけど、この人たちにはこの人たちなりの

事情があるんだろつなあ。

最初は私を見てさぞやがっかりしただろうに、今は吹っ切れたのか私を疑うことなく真摯な目で見つめてくるその様子に、ついつい己の態度を反省してしまいそうになる。

「ふん」

黙って聞いていたアドラメルクが鼻を鳴らして、手を伸ばすと、カガリの手を無理やり私から外す。子どもかね、君は。

「ま、どうせ争奪に参加するより前に、すぐに脱落してシンザ様に斬り捨てられることになると思うけど！あのお方は力なきものに厳しい方だから」

そのお厳しい方がこの私にツタでぐるぐる巻きにされた事など夢にも思わないアドラメルクは小気味よさげに腕組みした。足手まといになった私が激昂したシンザに斬り捨てられるところでも想像しているのかにやにや笑っている。むかつくなあ、ほんと。

「我らの使命は、そうならぬよう、半身様の鍛錬の手助けをすることなのだぞ、アドラメルク。自分は関係無いような口をきくな」

「何と言おうと僕は認めないからね！こんな妖力のかけらもない奴が足が抜けるまでとはいえ、毎夜シンザ様に守られて眠るなんてうらやま……許せないよ」

本音の一部が聞こえたような気がするが、アドラメルクは気付かずぴしゃりと言いつくと、そっぽを向いて地面に胡坐をかいて座り込んでしまった。カガリがいまいましたにそんな彼を睨みつけると、私に氣遣わしげに頭を下げた。

「申し訳ございません、半身様。こいつは妖術の力だけは恐らく大陸で五本指に入る能力の持ち主なのですが……その、恩人のシンザ様の事となると性格も性別も変わってしまった……」

性格が変わるのはともかく、性別も変わるって、そんな話聞いたことがないけど。

まあ、こんな奴とコンビを組まれたこの子も大概可哀想だ。カガリに対する同情心で、暴言に対する怒りもわいてこない。

「別に妖力とやらがらないのは真実でしょうし、まあ何を言われてもいいんだけど……」

先ほどから少し気になることがあって言葉を切る。

カガリが少し緊張した面持ちで頷いた。や、別にたいしたことじゃないんだけどさ。

「その”半身様”っていう言い方、さつきからなんだかこそばゆいんだ。私、竹上トウコっていう名前があるの。だから私の事、トウコって呼んでくれないかな？」

「タケガ……ミトウ？失礼ですが、半身様の御名は私には聞きなれない語感でして、少々分かりづらいです」

「あ、ごめんね。タケ、ガミ・トウコ、です。竹林の”竹”に……」

宙に指で竹という漢字を書きかけ、ふと隣を横目で見やると、さらに首をかしげているカガリに気付く。ああそうか、黒眼黒髪だからつい初対面の日本人に接するのと同じ感覚で説明してしまった。しかしここは異世界、漢字の存在しない世界の彼女に分かるわけがない。

「ええと、これは”漢字”という文字。私のいた世界のね、東洋と

呼ばれる地域で多く使用されているの」

「……！では、半身様が天界でも澱界でもない、異世界の地出身だという噂は本当だったのですね！」

カガリが口に手をあて、目を見開いてささやく。冷静沈着に見える彼女にはそぐわないしぐさだが、どうやら一応信じてくれてはいららしい。だがその隣には冷たい視線でこちらを見やる疑心暗鬼の塊がいた。

「ふん、なあにが」私の世界”だよ。カガリ、騙されるな。この平凡女の作り出した妄想なんだから」

自分の赤毛をくると指に巻きつけ、つまらなそうに私たちの会話を聞いていたアドラメルクが顔をあげて吐き捨てた。感想、どうもありがとう！漢字を妄想で作り出すってどれだけ天才なんだよ。漢字を作った中国の人たちに失礼だぞ。

なんだか気分が悪くなり、ムツと唇を曲げてアドラメルクを睨みつけたが、カガリが私には気遣わしげな視線、アドラメルクには非難がましい視線を交互に送っているのを見て、ひとまず気持ちを静める。こんなことで機嫌を悪くするのはカガリに悪い。

「はんし……いえ、トーコ様。もうすこし詳しく、そのカンジとやらについて聞きたいです」

カガリが身を乗り出して私の顔を見つめてくるのは、どうやら私に気を使つての演技ではなく、本当に興味があるようだ。アドラメルクは相変わらずそっぽを向いていて感じが悪いが。

咳払いをして気を取り直し、居住まいを正す。

「ええと、漢字は……普通の音だけをあらわす文字とは違って、音

と意味を一文字であらわすことができるの。例えば私の名前の一文字、”竹”っていう植物をあらわす、”竹”っていう漢字はこう「

そう言いながら私は宙に竹、と大きく指を動かして記した。

カガリが見よう見まねで「こう……?」と言いながらでたらめに見える順番で指を動かしたので、慌てて首を振る。

「ダメダメ。それじゃあ、書き順が違うよ。出来上がる形は似ているけど、止め、はね、払いの細部が変わってくるでしょ」

上から下、左から右、と指を動かして、空中にたくさん”竹”を書き連ねてゆく私を、カガリが心なしか上気した目で見つめ、懸命に順番を覚えようと同じように指を動かす。漢字の竹を一心不乱に宙に向かって練習する美少女の姿は、どことなくシユールで面白い。

「……美しいですね」

一通り練習して、満足したのか指を止めたカガリの口から熱心なつぶやきが漏れた。

「トーコ様の故郷では、文字を記すにも秩序に乗っ取って記すのですね」

「秩序って程のもんじゃないかもしれないけど、まあ書き順は大事よねー」

適当に流そうとするが、秩序や決まりごとが好きらしい真面目なカガリは、この「書き順」という概念がいたく気に入ってしまったらしい。

他にも違うカンジ文字を教えてくれとすがるカガリに、アドラメ

ルクがあくびをこれ見よがしに投げかけた。

「面倒な文化だなあ。文字なんて好きなように書けばいいじゃん。僕には右から線を引こうが、左から引こうがみんな一緒に見えるよ」「うるさい。物事にはな、守るべき秩序や順番というものがあるのだ。出会う男、出会う女がまわらず部屋に連れ込んで、関係の進め方の順番をもすつ飛ばし、いきなりいかかわしい行為に走ってばかりのお前が学ぶべき美徳だ。お前は、もう少し秩序というものに敏感になれ」

書き順あつてこそその美しい漢字だ！と黒髪を振り乱して主張するカガリはまさに日本人そのものの姿だ。

まあ、いまどきの日本人と言うよりかは、もはや絶滅間近の厳格頑固オヤジって感じだが。

「快樂の追及に順番もへったくれもないよ、まどろっこしい。だいたいなんだよ、カガリまでその平凡女が異世界からやってきたなんて話信じるわけ？」

「信じる」

きっぱりと言いのけると、カガリはふわりと優しく微笑んだ。

「トーコ様、恐らく足が抜けるまであと2日といったところでしょうが、後ろ手に腕を縛りあげられた時の対処法や、頭突きで狙える敵の急所など、足が拘束されていても私がお教えできることはたくさんございます。もちろん花から解放され次第本格的な武術の特訓に入りたいと思いますので、がんばりましょうね」

可愛い顔して恐ろしい事を言つてのける。

なんだよ、頭突きで狙える急所って。知らないよ、そんなの。知らなくてもいいだろう。

こわばった顔でとりあえず、ガンバリマス、と答えるとさらに微笑んでカガリは大きくうなずいた。可愛い、可愛いんだけどさ、なんか地獄の鍛錬の序幕を自らの手で上げてしまった気がする。

「僕は教えないからね！才能の無いやつに教えても意味がないしい」

ぶいと横を向くアドラメルクに、「この……二重人格オカマ」とついつぶやきを漏らしてしまう。

極力聞こえないように言っただつもりだが、すぐにアドラメルクは振り向いた。どうやら地獄耳の持ち主らしい。

「何だと？いいか、平凡女。僕が女になるのはシンザ様の前でだけだよ！それに本物の女のあなたなんかより女装した僕の方がよっぽど女らしいし、美しいんだからな！」

「……アドラメルク。貴様、本当にいい加減にしろ。トーコ様、どうかこのバカの言うことになど御耳を貸さぬようお願いいたします」「バカ？カガリまで僕を愚弄する気か！」

ぎゃあぎゃああと三者三様、醜い言い争いを繰り広げる私たち。

その時、私は気付かなかった。

私の背後で先ほどまで無かった、この世界に存在するはずの無い竹が音もなくニヨキニヨキと生え、ひっそりと佇んでいた事などに。

気付かないまま、でも私は未だに自分がフードを纏ったままであることには気付き、カガリとアドラメルクを見上げると、異世界で初めてできた”御世話係”なるその人物たちに嘆息交じりにお願いしたのでった。

「とりあえず、せっかく持ってきてくれたその服、……着せてくん

と。
ない？」

9、花人は異界にて漢字を教える。(後書き)

お気に入り登録、心からありがとうございます。こんなちゃんたらしか話の進まない拙作を読んでいただいております。ありがとうございます。

本編では詳しく触れていませんが、アドラメルクは買ったたり、引っかけたり、売っちゃったりもする、性に奔放な人です。カガリは節操の無い人間が大嫌い。そんなでこぼこコンビなのでした。

10、異界で始まる猛特訓。

「失礼します！」

鋭い言葉と共に、カガリの手が素早く掲げられた。しまった、と思った時にはもう遅い。

カガリの手から小石に似た灰色の小さな木の実が連続して放たれるのを、避ける手立てなどあるはずもない私は、ただ茫然と見送る。一つ、二つ、三つ。

放たれた数だけ額に衝撃を感じ、脳裏に火花が三回散った。

い、痛いー！

呻きながら私は額を押さえた。涙で滲む視界には、カガリが手の中で木の実を転がしながら、困惑した顔で立っているのが見える。その横にはお腹を抱えて笑い転げているアドラメルク。ああ、腹が立つ！

——専属教師、兼お世話役なる人たちが私のもとにやってきた、

その翌日。

私は本日何度目かの激痛に悶絶していた。

「……カガリ、本当は私の事嫌いでしょう」

「滅相もございません。しかしこれも反射神経を鍛えるための鍛錬の一つ。おみ足が動かせぬ今は、とにかく頭を動かして避けて下さい。繰り返ししていればだんだん見切れるようになりますからね」

「なりません。私のおでこが腫れあがる、だ・け！」

昨日から断続的に、この馬鹿馬鹿しい特訓は続けられている。例えば会話の途中で。例えば私が本を読んでいてふと視線をあげた瞬間。例えば沈黙の中。カガリはさりげなく木の実を握りこむと、突然私に向かって放つのだ。もちろん一度も避けることに成功してい

ない。

「もう反射神経とかどうでもいいよ。人間の急所の話ももうたくさん。帰りたい……」

何が悲しくて異世界まで来てスポーツ根性ドラマのような特訓に明け暮れなければならないのだ。家事の後、一息ついて茶の間にゴロリと横になる、そんな日常がはるか彼方の出来事のように、懐かしさがこみ上げるまま呟いた。

「もうおみ足はほとんど見えております。明日にでも天花より解放されますよ!」

「……そうね。ありがとう」

帰りたいたいという発言を、日本ではなく、早く自由になってこの世界のどこかへ行きたいという意味にとつたらしいカガリが明るく慰めてくるのを、訂正する気にもなれず適当にうなづいて調子を合わせる。もちろん、こうした会話の合間にも容赦なく木の実を飛んでくるのでカガリの右手に気を配ることは忘れない。

カガリの慰めの通り、ここに流された当初は膝までどっぷり埋まっていた私の足は、もうほとんど胚珠から浮き出っていて、今は足の裏がピツタリ胚珠の表面に固定されているだけになっていた。思いきり力を込めて無理やり足を抜くなって言っていたしやめておこう。力は絶対に無理やり足を抜くなって言っていたしやめておこう。

つくづく不思議な植物だが、こうして共生していると妙な愛着が湧いてくるものだ。足が解放されるのはもちろん待ち遠しいが、同時に少しの寂しさも覚えて私はそつとゼリー状の胚珠の表面を撫でた。

「それにしてもシンザ様、戻られるのが遅いですね……」

「うん、僕も同じこと考えていた。今日は焔火宮に戻るって仰ってたけど何かあったのかな？」

カガリの呟きに、アドラメルクが即座に反応する。今までゴロゴロと草地に寝転がっていたかと思えば、シンザの話題の時にだけはきっちり身を起こして喰いつくあたり、本当に分かりやすい。

シンザは昨日ムスカと共に巨大な鳥に乗ってどこかへ行き、一度は帰って来たのだが、また今朝になって私を起こすと早々に再び鳥に乗り、空に発ってしまったのだ。

ちょこまかと忙しくないことこの上ないが、彼は彼で半身というものが決定してから色々と処理しなければならぬ事が増えたらしい。寂しくても我慢するように小馬鹿にした半笑いで言われたが、もちろんそれには私も小馬鹿にした半笑いで返しておいた。戻ってこなくてもいいよ、と。

「きっとシンザ様も暁の聖母さまをお迎えする準備でお忙しいのでしょうね」

「聖母さまもさぞやがっかりされるだろうな、こんな花人を前にし……」

アドラメルクはまたもや失礼な事を言おうとしたようだが、カガリに鋭い視線で睨まれて口をつぐむと肩をすくめた。カガリ、強いなあ。

「暁の聖母さまはシンザ様に告ぐ地位にありながら慈悲の塊のような巫女です。何も怖いことはありませんから安心してお会いになって下さい」

笑顔を浮かべてそう言うカガリに、少し前から疑問に思っていた事を聞くことにした。

「なんだかよく分かんないんだけど、明日その暁のなんとかって人がここに来るの?」

「暁の聖母さま、です。焰火宮で巫女たちを束ねる巫女姫であらせられます。天花から生まれた半身のしきたりとして、花人は暁の聖母さまの前で”献呈の儀”を執り行わなければなりません」

「けんていのぎ?」

聞きなれない単語に思わず眉を寄せる。私の表情がツボに入ったのか、カガリは軽く含み笑いを漏らすと、大きくうなずいた。

「次元のはざまに根を張った天花は、まれに澱界や天界に通じます。解放された花人は、その天花の胚珠より一度だけ、異界に存在するものを取り寄せることができます。澱界に通じている花からは澱界のものを。天界に通じている花からは天界のものを。トーコ様には明日聖母さまの前でそれをやっていただきます。運よく成功したならそれを聖母さまに献上するのが、ならわしです」

「ふんふん……えええっ!?!」

理解しがたい事は適当に受け流してしまつのは私の悪い癖だ。今もそうやって大事な話を受け流しそうになり、慌てて私はカガリの肩をつかんだ。

「要するに、マジックショーみたいにこの花から日本のものが取り出せるってこと?何でも?ポッキーでも、ライターでも、火炎放射機でも!?!」

「……?よく分かりませんが、トーコ様の天花が異界に通じているのなら、異界の物を取り出せるでしょうね。しかしこの献呈の儀式体、執り行われることは滅多になく、文献では今から何百年も昔に澱界出身の花人が澱界の剣……一振りで多くの命を焼き尽くす恐ろ

しい剣を取り寄せてしまい、大きな災いが起きたと読んだことはあります。トーコ様の場合、おそらく成功しないでしょうが、その場合は『この心を献上いたします』とでもおっしゃっていただければ献上の儀はまるくおさまりますよ」

なんとということだ。この花はやはり今も日本のどこかに通じているのだ。だとしたら……胸にわずかな希望の光がともる。

「この花が日本に通じているのなら、ここから私、帰れるんじゃない？」

そう、この花は異界と日本を隔てるドアのようなもの。簡単な事だ、ここからこの世界にやって来たのならここから帰ればいい。

しかし力ガリは顎に手をあて黙り込んでしまった。その後ろで、アドラメルクがあくびをしながらこちらに呆れたような視線を送ってくる。

「無理無理。一方通行なんだよ。大体、花を使って自由に澱界や天界に行けるのならみんなとつくにそうしているよ」

本当に無知なんだな、と知らない事まで付け加え、退屈なのか、落ちていた小石を片手で投げては受け止めお手玉のように遊び始めた彼をそっと睨んでおく。

「そうかあ……まあ、帰れないと決まったわけじゃないし」

一つの方法が否定されただけ。帰る方法は探せばきっとある。そんなにシヨックを受けていない自分に意外さを感じつつも、帰る方法を探し続けることを再認識した。

「ま、君が本当に異世界から来たっていうことを証明したければ、明日の献上の儀で君の世界の物を出してよ。僕は花から何かを取り出すことに成功した花人はまだ見たことないけど、半身様を選ばれ

るような花人様なら、きつとできるんじゃないかなあ〜」

人の悪い笑みを浮かべながらアドラメルクは小石をひときわ高く放り投げた。

故意に私の額めがけて放たれたそれは、放物線を描きながらこちらに飛んでくる。痛みと衝撃を予想して目を閉じそうになる私の視界の隅で、カガリが素早くこちらに手を伸ばすのが見えた。

「アドラメルク、お前の仕事は半身様の肉体の鍛錬ではない。妖術をお教えするのがお前の仕事だろう」

カガリは私に命中する前に空中でつかみ取った小石を地面に落とし、つかつかとアドラメルクに歩み寄ると、地面に胡坐をかく彼を見下ろした。あーあ、また始まったよ、この人たちの喧嘩。

私はうんざりと天を仰いだ。うすうす感じていたが、どうやらこの二人は仲が悪いらしい。

昨日から数回にわたり、事あるごとに口げんかを始める彼らを最初は止めようとしていたのだが、余計なエネルギーを使うより、喧嘩が集結するのを待つのが一番の得策だと最近になって悟った。

「僕はカガリのまねをして、あいつの反射神経を鍛えてやろうと思っただけだけどー？」

「トーコ様をあいっ呼ばわりするな。それと、仕事をしろ。トーコ様に、貴様が唯一誇ることができる貴様の妖術を教えて差し上げる」

「えー、無理だつてば。本当に、トーコ様はゴミクス並みの妖力しか持ってないんだよ？カガリも妖力の多い少ないくらいは判定できるだろ？僕がいくら強力な妖術の呪文を教えたところで、あいつには絶対使いこなせないよ。むしろ体に負担がかかって逆に危険なんだからね」

私にその妖術とやらを教えるのは、よほど気乗りがしないらしい。才能がないだとか妖力がないとか並べ立てているけど、そんなこと

私だって知っている。日本においてその妖術とやらを使った記憶は一度もないし、あつたらむしろ自分の頭を疑う。

カガリも何も反論しないことから察するに、アドラメルクの言うとおり私の妖力は『ゴミクス並み』なのだろう。しかし彼女は負けなかった。仕事に忠実な、真面目気質だった。

「トーコ様に力がないのは責様のせいではない。だが、トーコ様が妖術の扱い方を知らないのはお前の責任だ。我らの仕事はできうる限り、トーコ様を実戦に耐えうるようにすること」

一体どこからその情熱が出てくるのだろうか。あれか、ダメな生徒を受け持った熱血教師みたいな心境なのか。余計な御世話だという私の心の叫びが当然分らないカガリは、真剣な顔つきで剣に手をかけると、鞘でもってアドラメルクの顎を上向けた。無表情を保つ美少年に、ドスのきいた声で一言。

「教えて、差し上げる」

カガリ、怖いよ……。カガリの周りに冷気が見える。張り詰めた沈黙は、アドラメルクの嘆息で破られた。

「……仕方ないなあ。こいつがシンザ様の足を引っ張るのも許しがたいし、基本だけ教えてやるか」

さすがに観念したのか肩をすくめると、カガリの鞘を振り払い、立ち上がった。

「妖術の発動のさせ方とか、力の使い方だけを教えるよ。言っとくけど、僕は厳しいからね」

心底不本意そうに顔をしかめるアドラメルクに、私は心の中で『カガリ、ありがた迷惑だよ……』と呟きながら、アドラメルクに負けず劣らず苦い顔で、「よろしく願います……」と頭を下げたのだった。

10、異界で始まる猛特訓。(後書き)

お話の進行が襲いながらも、どうにかあと3、4話で足抜けて第一部完、となりそうです。時系列が自分でも読んでいて分かりにくく、申し訳ないです。ひと段落したら少し手直しします……。

11、秘密の話は燃える炎の宮殿で。(前書き)

場面変わって三人称にかわります。

11、秘密の話は燃える炎の宮殿で。

壮麗にして優美なる炎の神殿、焰火宮。

西の大陸において、唯一にして絶対の権力を持つ焰火宮は、大陸の最高機関でありながら謎が多い。

先代アジエの大陸統治に続き、その息子シンザに指輪が継承されてからも永らく西の大陸は平和を保ち、今は15の国を抱えつつも、400年にわたり一度も国の間の戦争は起きていない。

焰火宮は、神妖ギイスカルを奉じる神宮であると同時に、いつのまにか衰頹した各国の軍備に代わり、15国から非干渉を約束され力を奮う軍事機関としての一面も持つ。そこでは厳しい審査を乗り越えて入宮した神官・巫女たちが日々鍛錬に励んでいるのだ。

彼等の仕事はたまにあらわれる、はぐれの炎山の妖獣の討伐や、炎山以外の澱界から迷い込んだ妖獣の被害を取り除くことなど様々である。力が信条のシンザのもとで、大陸を守るために神妖に仕えるこの職業は大陸中の若者のあこがれの的であるのだが、入宮できる絶対数が少ないためその実態のほとんどが謎に包まれたままなのであった。

また焰火宮自体が炎石という、異界の炎山でしか採掘できない鉱石を切り出して作られた宮殿である事もその存在の異質さを際立たせていた。

妖力を宿すため、昼夜問わず青白く発光して見える幻想的な外観。どんな妖術も物理的な衝撃も跳ね返す強固な守り。

加えて、優美な印象を与える芸術的な造り。

炎山に住む異形の者の力添えなしには造りえないその宮殿のいでたちに、しかし本当に人外の者が建築に携わったのかと猜疑の声をあげる者はいない。なぜなら焰火宮は、炎山の統治者、神妖ギイスカルを奉じる宮殿なのだ。建立にあたり、炎山の者の力添えはあつ

て当然と言えた。

さて、その焰火宮に一羽の大鷲が舞い降りたのは、シンザが花人のもとで夜を過ごすようになってから、三日目の昼の事である。

宮殿は、久しぶりの主の不在のせいも少々、緩慢な雰囲気をもたないながらも、宮殿に住まう者たちは張り詰めた空気から解放されて、つかの間の休息を楽しんでいた。

焰火宮に住まう巫女や神官の昼食の支度に追われ、裏庭で多量の野菜の下ごしらえをしていた厨房料理人は、ふと青空を仰いだ瞬間に、大きく弧を描いて旋回する大鷲を発見した。そして音もなく宮殿の中庭方面に着陸する大鷲の軌跡をぼんやりと見送り、すぐに我に返った。追って、彼の主人の帰宅を知る。彼は自らの頬を叩いてあたふたと厨房に戻った。

永久に朽ちぬよう、特殊なまじないをかけた木材に、神妖ギイスカルの変化とされる龍を彫りつけた重厚な扉は、シンザの父親に当たる先代のアジエが炎山に住む手先の器用な人妖に命じ、完成させたものらしい。

取っ手の部分には金や紅玉まであしらわれた、もはや一枚の芸術品と評しても過言ではないその扉を、シンザは数瞬凝視し、かすかに苦い表情をうかべたのち、首を振って押し開いた。自室に入ろうとする主をとがめて職を失うような間抜けはこの宮殿にはいない。扉はたやすく彼を受け入れる。

ノックも何もなしに突然侵入してきたシンザに、しかしすでに部屋に召集されていた者たちは、一人を除いて驚くことなく宮殿の主を出むかえた。

「あ、わ。わー！」

ただ一人、円卓に手をついて立ち上がるうとしたものの、目測を誤って紅茶の入ったカップと受け皿に手をつき、膝に紅茶のしみをやる事となった女だけが、間の抜けた叫び声をだしている。

シンザはそれに（またか）というようなうんざりした目を向けたが、何も言わずに視線を一同に巡らせ、軽くうなずいた。

「お帰りなさいませ、シンザ様。今ちようどお茶をいただいております。シンザ様も如何ですか？」

銀と黒色を基調とし、華美すぎず、質素すぎない家具で統一された部屋。

せり出した窓枠に優美に腰かけ、ティーカップ片手に外を眺めていた男が振り向きざまに首をかしげて優しく問う。

ウェーブがかかった乳白色の髪がさらりと揺れ、碧い瞳が印象的な品の良さげな彼の顔立ちを優しく彩る。が、彼が振り返りのセルフォイと呼ばれている事や、そのあだ名の所以を知っているこの部屋の者たちは、誰も彼を優美だとも、品がよさそうだとも思っていない。

「昼夜問わず花人どのお守り申し上げるお役目、さぞや大変でしょう！しかし力ガリやアドラメルクは今頃半身様と鍛錬にいそんでいるんでしょうな。くっそ、うらやましい……」

野太い声が聞こえた。

部屋の片隅で腕立て伏せを高速で繰り返しながら、しかし息一つ乱さずに悔しそうに今なおぶつぶつと恨み事を呟いている、黒髪に紺色の目をした男が発言の主であり、彼の名はガジャといった。

鍛え抜かれた肉体を今は上半身だけ惜しげもなくさらし、腕立て伏せをしているのだが、どことなく場違いなその行動が彼の精悍な顔立ちの魅力を半減していた。

彼は真冬でも、ほとんど上半身に何も纏わないため、焰火宮に住

まう者たちからはひそかに、常夏のガジャという、セルフォイとは違つて間抜けなあだ名をつけられていた。

「あち、あち、ちよー熱いですう！」

そして今もスカートについた染みをとろうと躍起になつて、ごしごしとレースのついたハンカチでスカートを拭いている女の名はクレアといい、他の者たちと同様、夢幻のクレアというあだ名を持っている。

日の光に透けるような金色の巻き毛と茶色の瞳、バラ色の頬と人形のような美貌と、あざとささえ感じるドジっぷりを兼ね備えているためか、一部のマニアックな異性からは熱烈な支持を受けているのを本人は知らない。

そうしてこの部屋にいる者たち総勢三名は、この宮殿で神妖に次いで高位に坐する男を前にしても、物おじも、最敬礼もせずになんと思ひの行動で彼を出迎えた。

セルフォイは銀のトレイから白磁のティーポットを取り上げると、彼の主人のために慣れた手つきで茶を入れ始める。

ガジャは腕立てふせを切り上げ、おもむろに立ち上がった。床に落ちていた自らのシャツで汗をぬぐい、シンザのために椅子を引きにかかると、その横ではクレアが茶菓子をとりに行く途中で今度は絨毯に蹴躓き、横転していた。

三人が三人、見事に統率のとれていないこの集団こそ、妖術、武術その他を問わず各方面の分野で突出した者たちからさらに厳しい試験と実践をへて選ばれた精鋭中の精鋭、焰火宮五神官の面々であった。言わずとされた、残りの二名はカガリとアドラメルクであるが、彼らは羨望とやつかみを背に受けつつ、半身の御傍付きとなり聖域の森に出張中である。

「暁の聖母の容態は」

シンザの開口一番の問いかけに、セルフオイが紅茶のカップを勧めつつ素早くこたえた。

「相変わらず、です」

「なるほど」

短い返答で全てを悟り、椅子に座ったシンザは両手を頭上で組むと、伸びをした。緊張をほぐすその仕様に、しかしリラックスした様子は微塵も感じられない。

「聖母は我が半身が天花より解放され次第、聖域の森においでになられる予定だ……できれば顔をあわせたくないのだが、そうもいかないだろうな」

「聖母さまはシンザ様にお会いしたがつておりましたよ」

どこかとがめるようなセルフオイの言葉に、シンザは一瞬何か言いたげに口を開いた。が、首を振ると全ての表情を消してしまう。

「……もし暁の聖母の様態が優れぬままなら代理の者をたてるか」

「もう既にご出発の手筈も、万一の代理の者の選出も段取り済みです」

セルフオイの手際が良いのはいつもの事である。シンザは目線だけでセルフオイをねぎらうと、性格をあらわして几帳面に淹れられた完璧な紅茶を一口すすする。静寂が一瞬訪れるかに見えた。が。

「ねえねえシンザ様、半身様ってどんな感じですか？やっぱり妖力も相当に強いのかなー？それにちよー綺麗なんですよ？あー、会う

の楽しみです」

能天気な声が沈黙を取り払う。

茶菓子を片手に声を弾ませて矢継ぎ早にシンザに質問するクレアは、つかの間の休息を主君に与えてやるうという気は微塵もないらしい。額を押さえるシンザにも構わず、勝手に理想の花人像を想像し、夢見るようにうっとり両手を組み合わせて天を仰いだ。

「暁の聖母様にお会いした後は、聖泉で禊ぎをしてからお披露目のお祭りを焔火宮でやるんですよねー？ここにしばらく滞在するんだったら、あたしのベッドかしてもいいですよぉ！」

「必要ない。俺の部屋に泊らせる」

「……………あ、はい」

シンザの言葉に、前のめりで話していたクレアは一瞬動きを止めてシンザを見つめる。

心中でシンザをはやし立てたい気持ちと、そんな事をすれば自分の首が飛ぶことになるかもしれない恐れのお気持ちと必死に戦い、結局首の方を取ったクレアはもう一度うなづいた。

「そりゃシンザ様の半身様ですもの、お部屋ぐらい一緒に当たり前ですよね！それにしても半身様はきつとお顔もお力も優れた方なんでしょうね。早くお会いしたいです！」

「妖力は心もとないのだが、低級炎獣を2匹一度に魅了できるだけの何かは持っているようだ」

シンザの呟きに、三人の目が一斉に驚愕で開かれる。

「なんと！一匹を魅了するだけでも多大な妖力を必要とするって聞きますが…………それは大変、利用価値がある半身様ですね」

セルフオイの失礼な評に、当の半身のかたわれは気分を害した様子もなく涼しい顔で頷いた。

「感じ取れる妖力は確かにわずかしかない。だが魅了の技を持ち、炎鎖も効いていないようにみえた。なかなか面白い娘だ」

「謎の力を持つ絶世の美女ですか……いいねえ」

「ガジャってば低俗。そんなんじゃカガリに嫌われちゃうよー？」

「なっ……！カガリは関係ねえだろ！」

言い争いを始めたクレアとガジャを尻目に、セルフオイが思案顔で優美な顎に手をかけて深く嘆息し、信じられない、というように首を振る。

「いくら花から過剰に愛された花人でも、炎鎖が効かぬというのは聞いたことがない……」

「だからこそ半身に据えた。でなければとっくに斬り捨てている」

セルフオイの呟きに冷徹な答えを返し、シンザは冷笑を唇に乗せた。

「胚珠より解放された後の”献呈の儀”が楽しみだな。天花は我が半身殿に何を献呈してくれるのか」

シンザの呟きに誰も明確な答えを返せず押し黙る。シンザも答えを期待していたわけではない。満足げにもう一度唇を歪めると、部屋に落ちた沈黙を味わうかのように目を閉じた。

突然、それを打ち破ったのは、セルフオイの息をのむ音であった。

毛を逆立てた猫のように張り詰めた雰囲気をもとわせ、セルフオイは天井付近を睨みつける。舌打ちをすると窓の外に視線を移した。

「上これは……上級妖魔の気配……！」

強大な力への畏怖と、戦いの予感への狂乱に、わずかに震える囁きがセルフォイの口から洩れる。

ガジャとクレアも一瞬にして、今にも抜き身の剣を放ちそうなくらいの殺気を張りつかせ、互いに目配せをしあった。ただシンザだけがゆったりと椅子の上で構えている。瞳には、恐れの色が全くない。

「シンザ様がいらつしやるのに、炎山の大物があたしたちに喧嘩売るわけないよね。きつと水山か金山、もしかしたら妖山のやつかもー！一体どこに向かつてるんだろ？」

クレアは外に飛び出したそうにちらちらと扉を見やる。逸る気持ちを押さえ、静かに目を閉じた彼女は、その上級妖魔が一体どこに向かっているのか、気配を探った。そして最悪の答えを得る。

「聖域の森！カガリとアドラメルクがいるけど、半身様が危ない！」
「よし、俺が加勢しよう」
「ガジャの力押しでどうこうできる相手ではありませんよ。私が行きます」

クレアの言葉に、セルフォイとガジャは即座に出立を決意し、許可を得ようとシンザに詰め寄った。

しかしシンザは椅子から立ち上がり、彼らが口を開くよりも先に、片手を掲げて口を封じる。

「お前たちはここに残れ。俺が行く」

シンザの言葉は戦いの予感への興奮に血をたぎらせる彼らの正気

を取り戻す、一種の鎮静剤のような役目を果たした。
皆が皆、意外さのあまり一様に黙り込む。

半身はお互いを支え、助け合う。

常識として世に広まっているその概念だが、相手がシンザとなれば話が違ふ。大陸の覇者たる彼は、自らに齒向かうものは容赦なく潰しこそすれ、他者を助けるために動くことは滅多にない。

五神官の面々に加え、ムスカも全員、信じられないものを見るような目で主を見上げた。クレアに至っては場違いにも感動すら覚えたのかうつすらと涙ぐんでいる。

「半身に死なれては俺が困る。ただそれだけだ」

ぶつきらばうに吐き捨てられた言葉に、温かみは全くない。

次第に気配を濃くしていく、まがまがしい瘴気。

シンザはひるむ事もなかったただ窓の外を不敵な笑みを口元に乗せたまま見つめるのであった。

12、効かない呪文に無能な花人。

「このいんちき花人！」

鋭い言葉と共に、アドラメルクの手が素早く掲げられた。しまった、と思った時にはもう遅い。

薔薇の花の形をした何かは彼の手から連続して放たれるのを、避ける手立てなどあるはずもない私は、ただ茫然と見送る。

一つ、二つ、三つ。

放たれた数だけ額に衝撃を感じ、脳裏に火花が三回散った。

い、痛いー！

そして、デジャヴー！

君らは私のおでこに何か恨みでもあるのか？しかもいんちき花人ってなんだよ。

既観感に捕らわれてぐるぐると回る目を必死にとどめながら私はアドラメルクを睨みつけた。彼は手のひらの上に薔薇の花を置き、にやにやと笑っている。薔薇の花と言ってもどうやらただの植物ではないらしいそれは、深紅の炎で覆われていて、ゆらりと時折大きく燃え上っている。

カガリのありがた迷惑な叱咤により、妖術を教えてくれる気が全くなかったアドラメルクは重い腰をあげてくれた。

妖術の成り立ちやら発動の仕組み、呪文の意味などについても一通り講義があったのだが、私が話についていけずに何度も同じことを聞いたり、あくびをかみ殺していたのが彼の逆鱗に触れてしまった。

「頭の悪い奴に理屈を説明しても時間の無駄だ」という結論に達した彼は、とりあえず私に実践から教えてみることにしたらしい。

彼がまず最初に私に習得させようとしているのは、防御壁の張り

方、であった。

「痛いなあ！こんなもん防げっこないでしょ！」

カガリの時よりも加速して、しかも唐突に放たれるアドラメルクの妖術に対抗できず、痛む額を撫でさする。

「敵に襲われた時、襲った奴にそう言っただら？」

命がまだ残っていたらね、と付け加えて艶やかに微笑むアドラメルクは、男のくせに薔薇の花が異様に似合う。手のひらに乗せたそれに息を吹きかけ、蝋燭の炎を消すみたいに薔薇の花を消して彼はゆったりと腕組みした。絶対にDSだな、こいつ。

「大体なんで薔薇の花なのよ……」

まだカガリの木の実の方が痛くない。アドラメルクの出す妖術の薔薇の花は、花のくせに石のように固いのだ。

「この花は神妖ギイスカル様が愛でる花だから、僕の使う炎を使った妖術と相性がいいんだ」

それに僕みたいに綺麗だし、と付け加えて彼は唇をにんまりと曲げる。無邪気を装った完璧な笑顔の裏、瞳に残虐な光が宿ったのを私は見逃さなかった。

「さあ、痛いのが嫌なら、頑張って防御壁を張りな。花人様なら寝ていてもできるだろ？」

アドラメルクの手のひらに新たに薔薇の花が生まれる気配を察知

して、私は慌てて握りしめていた紙片を広げた。

そこにはアドラメルクが教えてくれた呪文が書かれている。叱咤されながら何度も聞き返して私が書きとったものなのだが、その言葉自体に妖力があるわけではないらしい。

”具現化する力を伴って”、”イメージを確固としたものに変える意志”を生み出しやすくするための自己暗示のようなもの、と説明された。が、もちろん全く意味が分からない。とにかく、これを唱えれば私の周りに見えない壁があらわれて、アドラメルクの薔薇の花をはじきとばすことができる、はず……。

「ええと……障壁を紡ぎ、わが身を守る盾となへ……うえ、舌嚙んだ」

「なんでそんな短い呪文間違えるの。ていうか呪文自体に意味は無く、重要なのは君の具現化能力なんだってば。ていうか才能ないよ！」

生み出した炎の薔薇を自分の足元に投げつけ、赤毛をぐしゃぐしゃとかきむしって叫ぶアドラメルクをいたたまれない気持ちで見つめる。ごめんね、教えがいの無い生徒で……。でもさ、私、いたってごく普通の日本人なんだよ？

「トーコ様は防御向きではないのでは？」

それまで後方でじっと黙って私たちの様子を見守っていた力ガリが口を開けた。

いやいや、防御が向いている、いないとかそういう問題じゃないと思うな。まず、私に妖術なんかが使えらるわけないしなあ。今まで魔法や超能力の類とは無縁の世界で生きてきたんだよ？それにアドバイスをしてくれるのはありがたいが、出来れば休憩を提案したり、このバカげた特訓を切り上げることが提案してくれたらよかったの

に。

心中でカガリにたらたらと文句を紡ぐ私をよそに、アドラメルクは私と違った方向で彼女に腹を立てていた。

「あのねえ、僕には僕の教え方があるの！剣についてはカガリの方が優れているけど、妖術に関しては僕が一番詳しいんだから、素人は黙ってて！それに、こいつが攻撃タイプのわけないよ」

鼻息も荒いまま、ずい、と私に顔を近づける。最初は絶対教えなうとか言ってたくせに、どうやら私の余りのダメ生徒っぷりに、カガリと同様、教師魂に火が付いてしまったらしい。

「僕やカガリみたいに徹底的に訓練された人間ならともかく、危機に面した弱い人間が、一番最初にとる行動は？もちろん攻撃じゃない、”逃げること”。防御は本能なんだよ。本能に従うまま、自分の周りに壁を作る。簡単だろ？」

「簡単じゃない……」

「えっ？何か言った？」

「いえ……」

美形の剣呑な顔は迫力があって怖い。しかしアドラメルクめ、最初はカガリと正反対の性格だと思っただけど、こうしていると結構似てるところあるな。カガリが二人……ああ、やっかいだ！

アドラメルクから目をそらし、私はこのわけの分からない境遇を呪った。

「だいたい君さあ、さっきからやる気あるの？」

私の座る花の花びらをばしばしと叩きながらアドラメルクが問う。お前は厳しい部活の先輩か？全国大会でも控えているのか？と聞き

たくなるほどの怒りっぷりだ。まいったなあ、相当イライラしているぞ。

「どうせ自分はシンザ様選ばれた半身で、希少な花人様だから黙って座ってれば全て事足りるとでも甘い考えをもっているんだろ？」
「いーえいえ、むしろ早くこんなことから解放されたいと思ってるよー！」

「嘘ばかり。毎夜、シンザ様に守られて、こんな綿密な結界まで作っていただいて、さぞや寝心地がいいだろうね」

「良くないつてば。今朝だって寝言を聞かれるし、プライベートもへったくれもあつたもんじゃない」

「寝言お？僕だって僕の寝言をシンザ様にお聞かせしたい……くっそ、贅沢な事ばかり言いやがって！たかが花から生まれただけの平凡女のくせに……」

イライラと赤毛をかきむしって、頭を抱えるようにしながらうずくまるアドラメルク。

……なんだか話が変な方向にずれてきているぞ？アドラメルクの後頭部から陽炎のように立ち上る嫉妬の炎の幻を困惑して見やりながら、全く見当違いだよ！と心中で異論を唱える。だが彼はさらにヒートアップしていくばかりだ。

「花から解放された後はシンザ様の半身としてお披露目されて、身の程知らずにもシンザ様の隣に常にはべることを許され、周りからはちやほやちやほや……ああ！腹が立つ！」

ちよつとー。目が完全に据わってますよー。

爪を噛みながらぶつぶつと恨み事を呟きだしたアドラメルクに危機を覚え、カガリの方をちらりと見やると、苦りきった顔で額に手を当てていた。

「アドラメルク、お前本当にいい加減に……」
「よし、決めた」

カガリのたしなめる声をさえぎって、アドラメルクはすつくと立ち上がる。

私に優美な人差し指を突き付け、据わった目のまま私をじっと睨みつける彼の気迫に、たじろいでしまっ言葉も出ない。

「僕の事をなめてるから本気をだせないんだ」

そう言いながらアドラメルクは自分の服の右袖を上にくいと引き上げ、腕をあらわにした。

なんなんだ、突然腕まくりなんかして。もしかして、殴られる？

「カガリ。実戦だ。僕の契約している低級妖魔を召喚して戦わせる」
「まだ早い」

カガリの刺すような返答に、アドラメルクは少しもためらう様子を見せない。それどころか楽しげに自分の腕を眺めている。

なんだか嫌な予感がするぞ。焦りを感じてじつとりと背中に嫌な汗をかく私に、彼はあらわにした腕を見せてきた。否応に目に入ったそれは、腕の内側に小さく彫られた猫のような生き物の刺青だった。

「……なにこれ」

「僕の契約している低級妖魔の契約印だよ。炎猫の一種ですごく可愛いだ」

「つまり、その妖魔と私を戦わせる、と」

彼の腕にある刺青に既視感を覚え、すぐに心当たりが浮かぶ。私の手首にあるウサギの刺青と似ているのだ。炎山からやってきた不思議なメルヘンウサギ達を思い出し心がなごみかけるが、慌てて気持ちを引き締める。アドラメルクの腕に形どられたその生き物のフォルムは猫に似ているものの、私の腕にあるウサギと比べて獰猛に見えるのだ。

「殺しはしないように命じるから。頑張ってね」

……どうやら先ほどから感じている嫌な予感は現実になったようだ。ほんとにこいつ最悪だな！

「トーコ様はまだ実戦に耐えうるレベルではないのはお前も知っているだろう」

目を細めて刺青を眺める彼に、カガリが低い声を投げかけるが、アドラメルクはどこ吹く風で首をかしげた。

「トーコ様に本気を出していただくために、けしかけるだけだよ？ 相手が僕やカガリだから切羽詰まらないわけで、ちょっと妖獣相手にしたら生存本能刺激されて妖術発動できるかもしれないし」

手のひらをひらひらと振って、大丈夫だから、なんて付け加えているけど、どこことなく彼の笑顔が胡散臭く見えるのはなぜだろう。

「カガリ、こいつ絶対、私で憂さ晴らしする気だ！」

「滅相もない。僕は、殺るときは殺る男だよ？」

……なんだか、アドラメルクが残忍な笑顔で「やる」なんて言ったら違う漢字を当てはめたくなる。私は命の危険を覚えてカガリの

方を見やるが、なんと。

「ふうむ……。アドラメルクの言うことも一理あるな。我らが相手だとトーコ様も遠慮されて本気が出せぬかもしれんな」

などと一人呟いているではないか。しまった。カガリは生粋の訓練バカだった。どうやらしぶしながらもアドラメルクの荒療治に賛成した模様で、それ以上突っかかってくる様子もない。ていうか私の意志はおかまいなしですか!?

もはや味方のいない状況。

逃げ出したいのに逃げられないこの状況に本日数回目に我が身を呪う。

ぎゅっと目をつぶると同時に、アドラメルクが腕を宙にかざし、口の端で笑うのが見えた。

「大陸屈指の妖術使いたるこの僕の、使役する妖魔と戦えるその栄光に祝福を」

そう言って、彼がその妖魔の名を呼ぼうと息を吸う音が聞こえた。

と、同時に。

ふいに空気が、変わった。

自分の意識を無視して、全身に鳥肌が走ってゆくのを他人事のように眺める。

「……何だ!？」

アドラメルクが上空を見上げて叫んだ。つられて私も上を見上げると、今までの青空はかき消え、代わりに巨大な雨雲が空全体を覆っていた。

突風がいくつも吹き荒れ始め、渦を巻きながら周囲の木々を揺ら

す。葉っぱが漏らす不吉な悲鳴を聞きながら、私は自分の体をかき抱いた。

これは、何？この、身の毛もよだつ威圧感は何？

強大な手のひらに、オレンジジュースを絞る時みたいに上から捻り潰されているような感覚。

見えない重圧。絶対の威圧。

頭をもたげられないくらいの圧倒的な恐怖に歯の根がカチカチと音を立て始めた。これは、あのとときのウサギのような可愛らしい妖魔の持つ雰囲気じゃない。冗談じゃない。こんなのが下級妖魔であつてたまるか。これはもつと強大で、残酷な異形のもつ雰囲気だ。

胃の中が圧迫され、吐きそうになって顔を歪める。と、私の周りを、何か半透明の壁のようなものが覆っているのに気付いた。

ちょうどお椀をひっくり返して私にかぶせたような形状のそれは、よくよく目をこらさないと分からないくらいの薄いブルーに色づいて、時折表面にちりちりと小さな稲光のようなものを走らせている。募る恐怖の中、その優しい青い光を目にした途端少しだけ安堵が生まれる。だからといって全身の震えは収まりはしないが。

「シンザ様の結界が発動している……何か、くるぞ！」

カガリが私の前に走りこみ、素早く抜刀した。上段に構えられた刃が灰色に変わり始めた空をうつつして銀色に輝く。

「僕の召喚した炎猫……のわけないか」

アドラメルクが半ば茫然と首を振り、やけくそ気味に豪快な笑みを見せた。どうやら彼の召喚は他の妖魔の出現により中断されたらしい。代わりにもつとまがましい何かが、来る。

「何をしている。早くトーコ様の背後を守れ」

「はいはい。なんだってこんな面倒な任務についちゃったんだろ……」

カガリの舌打ちに急かされるように私の背中側に回り、なおもアドラメルクはぼやき続けているが、面倒そうな口調とは裏腹に彼の雰囲気研ぎ澄まされて行くのが分かった。

私を挟んで隙なく佇む二人に、戦闘態勢、という言葉が脳裏をよぎる。

「トーコ様、何が起ころうとそのシンザ様の結界からお出にならぬよう。あなたを覆うその青い囲い、その内部にいればまず安心です」「分かった……でも、なにが来るの……？」

霧に覆われた視界の先から何かがやってくるような気がして、恐怖と興味のせめぎ合いのさなか、カガリの睨み据える方向を私も確認しようと思いを伸ばした。

「伏せていて下さい」

正面を向いているため私の様子は見えないはずなのに、私の行動をすぐにとがめ、カガリはじつと霧の先を見つめている。

「恐らく相手は上級妖魔だ。アドラメルク、トーコ様を命をかけてでもお守りしろ」

「冗談。僕が命をかけるのはシンザ様だけだよ」

軽口で叩き返すアドラメルク。その後続く不可解な詠唱は、おそらく何らかの妖術をふるうための呪文だろう。

「来るぞ！」

叫びはカガリかアドラメルクのものか。
金切り声に、雷鳴。そして稲光が重なった。

12、効かない呪文に無能な花人。（後書き）

次回は戦闘シーンです。初めてトウゴさんに戦ってもらいますが、現代人。ちゃんと戦えますでしょうか。流血描写入るかもしれませんでご注意ください。ていうかあまあまラブシーンはどこですか。どンドン展開が漢の世界になって行きます……こういう意味の15禁じゃなくて、違う意味の15禁がかき……

13、王の帰還に迷惑三唱。

「誰だ？ここが聖域の森と知って足を踏み入れたか！姿を見せる！」

カガリの厳しい誰何に、霧の中からゆらりと人影があらわれる。

その予想外の小ささに思わず目を見張った。

まがまがしい気配を色濃く残しつつも、森の奥から姿をあらわしたそれは

まだ幼い少女だった。

「……貴様、炎山の妖魔ではないな」

カガリは少女の外見にさほど気を取られた様子は無い。厳しさを緩めずに少女を油断なく観察している。

私もこっそり少女を覗き見たけど……なんてことはない、青い髪と青い瞳が印象的な、7、8歳の美少女がそこにいるだけだった。片手にかごバッグを持ち、まるでピクニックの最中に、ここに間違っただけで迷い込んでしまったかのような場違いな雰囲気を出している。その立ち姿も顔立ちもあどけなく、とうてい妖魔だとは思えない。もしカガリがいなければ普通に「お家はどこ？迷子になっちゃったの？」などと声をかけているところだ。

「炎山？キトハがそんないなか出身のわけないじゃろ」

少女が肩をすくめてこたえた。老人のような言葉づかいは彼女のいたいけな外見にそぐわなくて違和感があるものの、自分の白いワンピースの裾に目を落とし、そこに泥土が跳ねているのを発見して、潔癖なしぐさで汚れを払うその仕草はやけに人間っぽい。

「ではここに何をしに来た？」

「キトハは、おつかいをたのまれただけじゃ」

キトハと名乗るその少女は首をかしげると、にっこりとほほ笑んだ。三つ編みにして両脇から垂らされた青い髪も少女の動きに合わせてゆらりと揺れる。愛らしいしぐさに少しばかり緊張がとけかけるが、カガリの背中が小刻みに震えているのを目の当たりにして気を引き締めた。いけない、いけない。相手は多分、人外なんだ。

「おつかい、だつてえ？」

私の背後を守っていたアドラメルクが、少女にとげとげしい声を投げかけた。さりげなくカガリの隣に移動し、その耳元に小さな声で「全員に守護呪文をかけたからね。油断しないでよ」と囁く。

「これだけ上級妖魔の気配を漂わせながらよくぞぬけぬけと人畜無害を装う。おつかいを命じた主人は誰だ」

「さあてさて？」

カガリの問いにくすくす笑いで返す少女。どこことなく妖艶な響きを持つその笑いに、思わず背中がゾクリとし、身震いしてしまった。

「あれあれ？そこにいるおまえは、だれじゃ？」

今やっと私に気付いたかのようにわざとらしく両手をあげて驚きをあらわしながら、キトラは視線をこちらに巡らせた。カガリがその視線から私を守るように体をずらす、少女は気にする様子もなく手にしたかごバッグの中に手を突っ込み、メモ帳を取り出した。

「ええつと……ぬしさまから”やることりすと”をわたされたのじ

やった」

愛らしい唇が動き、そこに記されているだろう文字をゆっくりと読み上げる。

「ひとつ。せいいきの森へしんにゆうすること。ふたつ。西のはんしんを見つげること。みつつ。見つけたはんしんを……」

キトハの舌がぺろりと唇を舐める。幼女にそぐわないまめかしさに、この少女がただものではないと確信する間もなく。

「……ころせ、とな！」

キトハが叫ぶ。と、同時に顔全体に風圧を感じ、私は思わず目を閉じた。

カガリとアドラメルクが跳躍したのだと悟るまで、数秒。

さきほどまで二人が立っていた場所を、何かが真横に薙いでゆくのを目端で捉えるのが精いっぱい、悲鳴を上げる暇もない。

眼前に千切れた雑草の葉っぱたちがひらひらと舞い上がる。

「灼火よ全てを焼き尽くせ！」

土ぼこりが視界を覆うさなか、私の正面に着地したアドラメルクの声が響いた。

間髪いれず、返事のように炎の柱が何本も立ち上がり、制止する間もなく少女を包みこんで燃え上る。

「あ……うそ、でしょ……」

熱波に頬を撫でられながら、私は目の前の光景の惨酷さ、熾烈さ

に、ただただ目を見張った。

なぜか分からないが自分の命を狙う妖魔。だがその姿は人間の少女のような形。アドラメルクは、容赦も躊躇もなく、その人間の姿をした相手を燃やしてしまった。先ほどまで軽口を叩き合っていた彼の背中が、得体のしれないものに見えて身震いする。

命を奪う、命を守る。このやりとりが当たり前に根付く世界。

そんな所に私は来てしまった。今さらながらの実感に熱波が漂う中、背筋がうっすら寒くなる。

「ふむ。にんげんにしては、なかなかの術を使うではないか」

ゆらり、と炎の中で人影が揺れる。カーテンのように炎をかきわけあらわれたのは、涼しい顔の少女。

満足そうに微笑む彼女は火傷一つ負っていないかった。それを確認し、心のどこかで安堵のため息をつく自分がいるのは、やはり甘い事なのだろうか。

「なるほど、はんぶんだけ、にんげんなのか。西には面白いやつがいるものだ……できれば一献、ともにかたりあいたかった」

「残念。4年後にまた来たら？一献の後、おまけで抱いてあげるよ」

下品な言葉を返すアドラメルクに、キトハの唇が大きく吊り上った。

「……………守備範囲ひろすぎ……………」

呆れて思わず突っ込んでしまいが、アドラメルクの問題発言も、私の突っ込みもものともせず、キトハはゆっくりと首をかしげた。

「つぎはなんの術をつかう？ 言うておくが、キト八には並みの炎術はきかぬよ？」

「おまえ、水山の上位妖魔か……！」

アドラメルクが舌打ちして私に振り返ってくる。

「トーコ、命が惜しかったらそこから絶対出ないでよ。下級、中級ならなんとかなったけど、水山の上位妖魔には僕の炎は相殺されてしまうんだ」

「どうした？ 何もせぬなら私から」

少女が口の中で何事か呟くと同時に、少女の右手側に大きな氷の塊があらわれた。おそらく彼女の何倍もの大きさがありそうなそれを難なく掴み、アドラメルクに向かって投げつける。

「あぁっ！」

突然のことに防御壁をはる対処もできず、アドラメルクはお腹全体に氷の塊の直撃を受けてしまい、地面を転がった。

「アドラメルク！」

うつぶせに倒れている彼の背中を、私はおろおろと見つめることしかできない。どうしよう。どうしたらいいの？ 救急車も、警察も呼べない。こんな時、誰を呼べばいいの？

パニック状態で頭が真っ白になる中で、なぜか一番会いたくない人間の顔が浮かぶ。

私をこんな危険な戦いに巻き込んだ、張本人。

「シンザ……」

かすれた声が自分のものだと思わず、知らず名前を呼んでいた。半身なら来てよ。助けてよ。

だけでももちろん、都合良く彼が現れるわけもなく。

「さて」

少女は私の絶望を愉しげに見やりながら、憎たらしいほどの余裕をもって、ゆっくりと右手をかかげた。と、今度はその小さな手に一振りの短剣があらわれた。鞘もなく、むき出しの刀身は氷のように透明だ。こんな時でなければ綺麗、という感想すら漏らしていたかもしれない。

「ほづけているばあいか、はなびと」

少女はこちらをひたと見据えながら、短剣を片手に歩んでくる。

……ちょ、来ないでほしいんですけどー！

私の焦りに応えるかのように、花から伸びたツタがウネウネと揺らめいて、少女の威圧に対抗している。しかし彼女は一向に怯まない。

と、とにかくここから離れなきゃ。じたばたと私は胚珠の上で後ずさりした。だけど、足の裏がピタリくっついていて動けない。その間にもキト八はこちらへ一歩一歩近づいてくる。

「なんてぶざまで、みっともない。これが、西のはんしんか？……ん？」

近づき、私まであと数歩というところで、ふと少女は顔をしかめた。見えない壁にぶつかったかのように、その場で地団駄を踏む。

「にくらしゃ。いまいましきは、このけっかい」

短剣を構え、鬼気迫る表情で、見えない壁に何度も切りつけてくるその姿を、私は”結界”の内側からこわごとと観察する。

振り下ろされる刀身はそのたびに見えない壁に弾かれて、その刃が私に届くことはない。

シンザのおかげだ。彼が張った結界 防御壁が私を守っている。ありがとう、変態男！この世界に来て初めてシンザに感謝をして、しかし私は重大な事に気付いた。

カガリは！？先ほどからカガリの姿が見えないのだ。ハツとして周囲を見渡す。

カガリは いた。

キトハの隙を窺うように、気配を消して少女の背後に。

忍びより 大きく長剣を振りかぶった！

「良いたちすじ。だけど、おそいな」

振り向きざま、キトハは振り下ろされたカガリの剣の刀身を素手で掴んだ。ひるむカガリの胸元にキトハの短剣が迫る！が、後方に飛び、すんでのところでそれをかわす。

幼女と少女、拮抗するはずのない力の押し合いを両者互角のまま無言で繰り広げる。

しかし幼女の体軀はさすがに接近戦では不利らしく、わずかにカガリの方がキトハを押し始めた。キトハの顔が苦しげに歪む。ふいに、弟たちの幼いころの姿が重なった。

「カガリ！手加減してあげて！」

思わず声を上げた時にはもう遅かった。

私の一声にカガリは一瞬動きを止めてしまった。それが隙を生ん

だのかもしれない。

ふいに足払いをかけられ、バランスを崩すカガリ。次の瞬間には胸元に残忍な光を放つ短剣がつきつけられていた。

息をのむ私に振り返り、青い瞳を細めて笑顔のようなものをむけてくる。

ああ、この子は間違いなく妖魔だ。少なくとも人間では、無い。表情は笑っているが、決して笑っていないその顔に、今さらながらに確信した。

少女はカガリをどこからか取り出した金色の紐でぐるぐると縛り上げ、無理やり座らせると、ゆっくりと短剣をカガリの喉元に押し当てた。

「さあ、はなびと。とりひきだ。そのいまましいけっかいから、出てこい」

勝ち誇った顔で要求を突き付ける。うつむいていたカガリが激しく顔を上げ首を左右に振った。

「いけません！絶対にそこから出ないでください！」

「出て来なければ、この女と、あそこの男もころすよ」

「私はトーコ様のためならいつでも命を捨てる覚悟があります！アドラだつて！」

カガリの悲痛な叫びに、倒れていたアドラメルクがよろよろと身を起こすのが見えた。彼は状況を一瞬にして把握したようで情けなさそうな顔になった後、私に向かって大きく首を振ってみせる。横に。

多分、私のために命を捨てる覚悟なんてさらさらない、ってことだろう。この期に及んでアドラメルクは自分を捨てない。まあ、そりゃそうだ。私だつて私のために誰かに命なんかかけたくないし、

かけてほしくもない。

じつと胚珠に張り付いて動かない足を見つめる。さっきからもやとした気持ちはずっと、心の中に霧のように立ち込めていた。なんだろう、この気分は。何か違和感を感じる。

「ここから出たら、カガリを助けてくれるの？」

「ああ。約束しよう」

キト八の返事で心を決めた。両足に力を込める。きつとこのまま力を込め続ければ足は剥がれるだろう。そうしたらキト八の要求通り、ここから出ることができる。

カガリの制止の声を聞きながら、私はさらに両足に力を込めた。めり、と嫌いな音を立てて踵が少しだけ浮く。

よし、もうあと少しだ、と気合を入れた　　その刹那。

バサバサとあわただしい羽音ののち、甲高い鳥の鳴き声が天空から降って来た。

思わず見上げた上空には、見覚えのある大鷹のシルエットが旋回している。徐々にそれはこちらに近づいてきて……ほどなくして、それは私たちのいる場所に盛大に降り立った。

「　　お前、俺の事なさけない声で呼んでいたなあ？ 思わず焔火宮に引き返しそうになった」

大鷹から降りるや否やそう言って、人の悪い笑みをこちらによこす、陰険な男。

何を考えているのか全く読めない、金色の瞳を光らせて、彼シンザは私と、少女の間に立ちふさがったのだった。

13、王の帰還に迷惑三唱。(後書き)

戦闘シーン苦手です、申し訳ないです。精進します……。
500近くものお気に入り登録ありがとうございます!!
たくさんお方に読んでいただけ、もったいなくらいの幸せですが、
更新のたびにお気に入りを解除されたり厳しい採点がつけられる事も
厳粛に受け止めて、浮かれる事の無いように頑張ります。

14 役立たずのヒーローは傍観する。(前書き)

久しぶりの更新となりました。

あとがきに思い切り私事のお知らせがあります。活動報告に載せるようなことなのですが、あそこは小話公開所として使っている為なんとなく載せにくく……。

作者のどうでもいい日常の呟きで目を汚したくないお方はあとがきスルーをしてください。

14 役立たずのヒーローは傍観する。

小さい頃から、ヒーローもののドラマを見ていて疑問に思っていたことがある。

襲われるヒロイン。迫る敵の死の手。あわや、というところで颯爽と現れるのは、いつもギリギリで間に合うヒーローだ。昔からそういうシーンを見るたびに突っ込んでいた。おいしい登場シーンになるまで待っていたに違いない、自分が現れる絶妙のタイミングをうかがって。と。

「……遅いわよ」

漏れたつぶやきは自分でもビックリするくらい低かった。

「ほお？」

降りた大鷹の首元を軽く叩いてねぎらっていたシンザが、こちらを振り向き面白そうに小首をかしげて微笑んだ。優美なしぐさにアドラメルクが場違いにも熱のこもった気持ちの悪いため息をこぼしたのが聞こえたけど、彼とは違い、こんなしぐさに騙されるような私ではない。

「遅いつ！」

不意をうつつ私の一喝に、その場が一瞬静寂に包まれる。カガリの目が大きく見開かれて私を凝視しているけど、かまうものか。

「まーたこの前みたいにピンチの私をどこかから観察してほくそ笑んでたんでしょ！おかげであんな小さな子にアドラメルクは無様にやられるわ、カガリは縛り上げられるわで大変だったんだから

ね！人が困っているところを面白がって観察するなんて悪趣味！変態！」

一気にまくしたてると、今度は気が緩んで涙が出てきそうになった。格好悪すぎるので目じりにぐつと力を入れて涙を根性でとどめることに成功し、何でもないふりがこの男に通じているのかどうか不安を感じつつも、何とかシンザをにらみつけた。しかし腹ただしいことにシンザにとっては私の睨みなどそよ風並みに軽いらしく、にやにやと笑うばかりで怯んだ様子など微塵も見せない。

「なんだ。お前、俺の事を待っていたのか」

そうかそうか、とやけに上機嫌にシンザが目を細めてのたまう。待つてただとお？んなわけあるか！苛立ちで震える体を押さえて返事の変わりに思い切り顔をしかめてやる。そして勃発する不毛ならみ合いの戦い。

喉元に短剣を突き付けられたままのカガリは途方に暮れて、そんな私とシンザをおろおろと見やり、アドラメルクは熱いまなざしを相変わらずシンザに送り続けている。

カオスな状況の中、唯一冷静さを保つ妖魔のキト八が、シンザの顔をじつと見つめて口を開けた。

「……おぬしは、西の神妖のけいしょう者か。なんと両半身がそろうとは。いつきに殺せて都合よい」

「あいにく低級な妖魔に名乗る名は持ち合わせてはいないのだが、いかにも俺は西の大陸統治者だ。お前は薄汚い水山から湧いた蛆虫の仲間か？道理で先ほどから卑しい匂いがぶんぶんするな」

シンザは腕組みをし、これ以上ないというくらいにぶんぞりかえ

って形の良い顎をそらすとキト八を虫けらでも見るような目で見下ろした。

しまった。こいつは、不遜な上にバカだったのだー！

先ほどからのキト八の言動から推測するに、妖魔という種族は人間を見下しているような気がするのだが、だとしたら格下だと思っ
ている相手に低級だとか蛆虫だとか言われるのは相当不快な事に違
いない。カガリの首元にあてられたナイフがプルプルと震えだすの
を私は絶望的な気持ちで眺めた。

「なに挑発するようなこと言っちゃってんのよ！カガリが人質にとられてるのよ？早く助けなさいってば！」

結界の壁をどんどんと叩きながら叫ぶと、シンザが腕組みを解いて今度はこちらに氷の視線を向けてきた。

「我が半身殿は自分の置かれた立場が理解できていないようだなあ。何やら勘違いしているようだ」

言葉を切って、つかつかと私の正面までやって来ると、結界の壁をコンコンとノックする。

「だーれがお前を助けてやるなどといった？カガリもアドラメルクも主人に救われるのは最大の屈辱だろう。彼らは武人だ、己の失態は自分の命で償う覚悟はいつでもできています。お前も俺の半身となり共に戦う以上は、半身の前に武人でもあるのだ」

……つまり？

言葉もなく啞然と口をあける私に、シンザはとろけるような優美な微笑みをよこしてきた。くっそう、気持ちが悪いのに美しいのが腹が立つ！

「言っただろう？我が半身よ。足手まといになるなら切り捨てる、とお前の代わりなど、探せばいくらでもいる」

「……はいい？」

「カガリともあるうものがこの程度の妖魔に隙をつかれ、アドラメルクに至っては水山に対抗しうる妖魔を使役する準備も怠っていたとはな。五神官の面汚しと罵られても文句はあるまい。そしてお前。そこから守られて、見ているだけか。優雅なことだ」

優美な微笑とは裏腹な、冷酷な言葉に瞬時に頭に血が上る。昔からそうだ。本当に腹が立ったときって、すぐに言い返せない。感情がうまく言葉に紡がれず、思考の中で高速で渦巻き、燃え上がる。それでもやっとの事で頭を持ち上げてシンザの金色の瞳に視線を合わせた。

「……ええと、要するに。カガリもアドラメルクも助けるつもりはないと。私に至っては自分で何とかできないのなら死んでくれ、と。そういう事でおっけー？」

返事の変わりに、微笑を口元に刻んだシンザの顔が近づいてきた。目を閉じた流麗な相貌が対峙し、私の真正面に柔らかな口付けを落とす。境界の壁に阻まれたキスに場違いにも赤面しそうになったのも束の間。

彼が口付けを落とした場所にピシリ、と亀裂が入った。

蜘蛛の巣のように細やかなそれは、上等なレースのような複雑な模様を境界表面に縦横無尽にあつという間に走らせて行く。無駄なことだと分かっていたいつも、反射的に亀裂の一端に手を伸ばして留めようとするのも一瞬のこと。

一斉に鈴を振ったような高い音と共に、私を覆っていた堅牢な境界は跡形もなく消え去ってしまった。

うおおー！なんてことしてくれるんだ、このバカは！助けに来てくれたと思っただら結界を解いて、一体何がしたいんだ！

「なんとまあ。世にもおかしき人間じゃ。半身をどうぞこころしてくれとはな！」

キト八が叫び、カガリを突き飛ばした。両手で短剣を構えてゆらりと私に向き直る。

非難の意味も込めてシンザに視線を送るが、私の結界を解いてしまった当の本人は、何を考えているのか全く分からないニヤニヤ笑いを張り付かせ、キト八の殺意にさらされる私を高みの見物とばかりに眺めていた。こんな奴の名を一瞬でも呼んで頼ろうとしてしまった自分が情けない。

脳裏にウサギたちの言葉がよみがえる。シンザを信用するな。あの忠告は真実だったのだ。

平和な日本で、本物の殺意にさらされることって殆ど無いに等しいだろう。全身を刺すような寒気と恐怖。殺されるかもしれないという思いに体がかくかくと震えだす。そんな状態で、キト八がふいに投げつけてきた短剣をよける事ができたのは本当に奇跡だった。

キト八が手を振りかぶったのを意識の底で認識し、風をきる音を聞きながら、飛んでくるナイフの進路を音速の速さで想定して右に体を傾けた。たったそれだけのワンアクションが自分の命を救ったのだという事実、真横にのびるツタに刺さったままのナイフを眺めながら愕然とする。

シンザがヒュウ、と口笛を吹いたが完全に状況を小ばかに仕切っている冷やかしにしか聞こえない。

「もうあんた、帰れ！」

「大事な大事な半身を置いて帰れるわけがないだろ？」

よく言うよ！人から安全地帯を奪っておいて！取り澄ました美貌に平手打ちのひとつでも食らわせてやりたいが、今戦うべき相手は彼ではない。

「つち。外したか」

だが次は、というキト八の囁きに、傾けたままの体が後方に倒れそうになった。怖いよお！逃げ出したいが、足の裏がピタリくっついていて離れない。じたばたもがいて足を引っぺがそうとしている間に、一步一步キト八が近づいてきていた。

「こ、こないですよ！」

私の叫びに、それまでやられっぱなしですっかり存在感を消していたアドラメルクが立ち上がった。

「トーコ、守りの妖術を使え！」

「呪文が分からない！メモがどっかいつちやったよ！」

「だから！呪文なんかいらなくて！要するにイメージと、それを具現化しやすくするきっかけさえあればいいんだよ！」

「先生！意味が分かりません！」

私の打てば響く返答に、青い顔で額を押さえるアドラメルク。魔法の使えない日本人でゴメン……。

そうしている間にもキト八がじりじりとやって来る。わざとゆっくりにやってくるのは、余裕を見せ付ける事で私を見下し、いたぶっているのかもしれない。

焦って頭を抱える私に、今度はカガリの天の声が降ってきた。

「トーコ様、”カンジ”です！異世界の住人たるトーコ様にいくら精霊の呪文を伝えようと理解できないのは当然のこと。イメージを具現化しやすくするには”カンジ”しかない！」

カンジ……って、あの漢字？だよな？

果たして天の声なのか、意味の分からなさに首をひねる私に力加
りが必死に言い募る。

「要は、呪文によるイメージの具現化という形式を、漢字を書く
という行為に変えると……」

「……いけるかもしれないな」

アドラメルクが頬を紅潮させて頷いた。え？どいういこと？私は
さっぱり分からず、気でもおかしくなったのかと本気で二人を心配
しかけるが、そんな私を他所に二人は激しく盛り上がっている。

「文字に意味が宿るなら！トーコ様、水妖の弱点は土です！」土
”を書いてください！」

「土をイメージしろ！」

こんな時だけに二人は息ピッタリで口々に私に叫んでくるのだが、
漢字で土を書いてみるとは……

そんなことで妖術が使えるとは思えない。だけど絶対絶命なこの
状況を打破できる可能性なのだとしたらやってみる価値は……ある
か。

私は息を吸い込むと、もはや手を伸ばせば届くところにまで来て
しまったキトハをにらみつけた。

地上から少しだけ高く伸びた所に咲く花の上に座りこんでいる私
と、正面に立つ見かけだけは幼女のキトハの目線は同じくらいで、
至近距離で見る人形めいた美しさに思わずたじろぎそうになる。

「一人で死ぬのはさみしかろ？おぬしを殺したあとは、あの生意
気なおとこ、そしておまえの仲間にも止めをさしてやろうな。特に

あの男には一番苦しみが長引く方法で苦痛を与えてやる」

キトハが手を伸ばすと、触れてもいないのに右頬にサツと痛みが走った。知らず手をやると、そこに生暖かい感触を認めてやっと自分が血を流しているのだと気付く。

幸い痛みはひどくないが、木津つけられたという事実に関頭が真っ白になった。

「おぬしのように下らぬ花人でも血の色は我らと同じか。ふん、汚らわしい」

小さな子供の口から場違いな残酷な言葉が紡がれるのは見ていて気持ちの良いものではない。よどみなくそんな事をいえるこの子はやはり人間ではないのだ。そしてこの子は私を殺そうとしている。

切迫した事実におののく一方、先ほどシンザの結界の中で感じた違和感の正体がじわりと浮き上がる。

戦うカガリやアドラメルクを、安全な場所から傍観していたが、何か間違っているような気がした。

弟達と同じ年頃の子を危険な目にあわせておきながら、自分は安全地帯でぬくぬくなんで、なんだか違うような気がしたのだ。そりゃ死ぬのは怖いし逃げ出したいけど、あの時私は確かにこころも思っていたのだ。

私も戦わなくちゃ、と。

少女の手が掲げられる瞬間、考えるよりも先に口と手が動いていた。奇跡を信じる暇も、希望を持つ余裕もなく。本能だけで、咄嗟に。

「土！」

きっかり三回、正確に宙に走らせた指の軌跡が見えたような気がした。

何も、起こらない。

諦めが自嘲の笑いとなって出そうになった、次の瞬間。

キトハの頭上の空間がパカリと割れ。

そこから空気を震わす激しい轟音と共に、大量の土砂がさながら局地的な大雨のように……落ちてきた。

キトハの悲鳴すら飲み込んで、降り注ぐ大量の土砂。瞬く間に少女の姿は大量の泥に埋もれてしまった。

「なんか、でちゃったよ……ははは」

あとに残ったこんもりとした小さな山を見て、我ながら乾いた笑いしか出てこない。

シンザの満足そうに目を細める姿が、なぜだかやけにむかついた。

14 役立たずのヒーローは傍観する。(後書き)

読んでくださった方々、貴重なお時間を割いていただいて本当にありがとうございます。週末更新を予定していたこのお話ですが、実は作者まそぱつけの家庭の事情により少し更新頻度が落ちる事になりそうです。

というのも母親の癌が発覚しまして。現在闘病中の母親に代わって家事全般を受け持つこととなり、少し忙しくなるからです。しかし本当に母親のありがたみが身にしみます。

癌とはつきり、おそらく小説を読みに来られた方にはどうでもいいであろう情報をわざわざ書いたのは、これも何かの縁、もし身近な方や自身ががん検診を受けておられない方が一度健康診断だと思っ
て検診を受けるきっかけになればと思います。特に女性の方は子宮がん、乳がんの検診を受けてください。がんは恐ろしい病気ですが、早期発見であればあるほど完治の可能性も高くなる希望の
余地も残した病気です。

これからは月2くらいの更新頻度になりそうですが、よろしければもうしばらくお付き合いいただけると本当に幸せです。
読んでくださってありがとうございます。次回で戦闘シーンおわりにしたいと思います。

15、異世界にて、前科一犯。

「い、生き埋め、に、しちやっただ……」

目の前にこんもりと盛り上がる子供の背丈ほどの小さな山を前に愕然と呟く。

あーでもでも！見かけは人間と同じに見えるが、妖魔という種族であるからには、これしきのことでもまさか死んだりしないだろう。だって妖魔だよ？死なないよね？私、殺してないよね？

今までどんなに生活で困窮しようとも、お天道様に顔向けできなくなるような事はしまいと生きてきたし、これから先も太陽の下を堂々と歩ける人生を歩むと何の疑いもなく思っていた。それがこんな異世界で揺らぐ事になるうとは。前科一犯の言葉が浮かび、頭を抱える私の肩にぽんと手が置かれる。紅玉の指輪が似合っていて嫌みったらしいシンザの手だ。振り払おうとするのを避けるかのように、その手は肩から私の頬へとうつつた。

「いてっ！」

まだ血の乾かない傷口を優しくなぞられ、ピリピリとした衝撃に思わず顔をしかめ、今度こそびしゃりとその手を払い除ける。しかしすぐに手は戻ってきて私の頬の傷へ。払い除ける。また、すぐに戻ってくる。払い除ける。戻って……っく、イライラするなあ、この男は！一体何がしたいんだ。

「俺の半身たる大事な体に、こんな怪我まで負ってよく頑張ったな。異世界の文字で言葉を縛り術を発動させるとは、なかなか面白かったぞ」

人の怪我をなぞりながら、私が痛がる素振りを楽しそうに眺めている変態男はどこまでも上から目線で頓珍漢なことを言ってきた。

「ほんと、誰のせいで怪我しちゃったんですかねえ！」

もちろん、こいつが安全地帯の結界を消し去ってしまったせいだ。頭突きでもかましてやるうか。思い切り頭を振りかぶり、ふと思いつき留まった。

目をすつと閉じて、心に宿る苛立ちのイメージをそのまま、形に変える。

「炎！」

叫びと共に目の前に小さな炎が現れた。紫色に揺らぐそれは、ふいに風で煽られたかのように大きくなると、そのまま勢いを失わずにシンザへと襲い掛かる。

おおっと、私、使いこなしちゃってるよ！ふはははは、ゆけ、炎！

「トー」様！おやめください！」

「おま、ばか！何考えて……！」

突拍子も無い私の反撃にカガリとアドラメルクの慌てた悲鳴が重なる。

大陸の覇者を語る彼のことだ、これしきの炎造作もなく避けられるだろうと思いつつも一泡吹かせてやりたくとった行動に一瞬罪悪感が走った。が、すぐにそれは無用のものとなった。

「この俺に力を揮うか。全く行動が読めない奴」

シンザが私の出した炎を避けもせず、首を少しだけ傾けて肩口の辺りで遊ばせたまま、くつくつと喉を震わせ呑気に佇んでいる。ま、

全く効いていない……。こうやって笑っているといつも剣呑さは消えて、いい感じの人間味があるのだけど、一緒になって楽しく笑いあうわけもなく、私はがっくりと肩を落とした。

「しかし。なかなか興味深い構成の火を出すな。まあ、威力はゴミ以下だが。ところで」

横を向き、炎に向かってフツと息を吹きかけると、たったそれだけで私の炎はたちどころにちいさくなり、すぐにかき消えてしまった。お誕生日ケーキのろうそくだってもう少し粘りを見せるっていうのに、たった一吹きで撃沈かよ！も、もつと頑張れ、私の炎！

拳を握り締め悔しさを噛み締めるが、無論シンザにそんな私を労わる気持ちなどあるわけない。彼は優雅に腕組みすると、私の前に積み上がるこんもりとした山に顎をしゃくってみせた。

「そろそろ呪縛が解ける頃だと思うが。次の手は打っているのか？」

「へ？」

間抜けな返事と共に目の前の山が大きく内側から盛り上がった。なんかやばい感じがする……。！

ぼこり。

くぐもつた破裂音。

次の瞬間には文字通り破裂した山を前に、全身に土砂を浴びていた。どういう事ですか。

なんだよ呪縛が解けるって。要するにやっつけたのではなく、一時的に捕まえていただけなの？だったら早くいってよ！

毒づけども、時既に遅し。

「スカートがまっくろじゃ……手も……顔も汚れた。よくも……」
山を突き破って現れたキト八が、ふわりと目前に浮かび上がっている。重力を無視した現象のみならず、その汚泥にまみれた美貌に宿る、陰惨な表情に心が縮み上がった。前科一般にはなっていないかったのは嬉しいけど、被害者になるのはいただけない。

「キト八はあ、よごれるのがあ、大嫌いなじゃ……きさまも血と己の臓物で存分に汚れるが良い」

泥がこびりついた青い頭を振ってキト八が両手を組み合わせた。そこから何かが放たれたのは分かったが、唐突な展開に体が硬直して先ほどのように避ける事はできない。出来たのは目を硬く閉ざすことだけ。お母さん、弟達、ごめんね。私は異世界で命を終えることになりそうです

愛しい人たちの姿を思い浮かべて最後の時を待つ。
が、予想していた衝撃も痛みもなく、恐る恐る目を開けた。

「先ほどは遅れをとったが、シンザ様の前でこれ以上失態を重ねるわけにはいかぬ」

「まあ、トーコにはいい動きをしたからね。あとでシンザ様からじきじきに今回の失態の責苦を下していただく為にも、もう一働きしてやるよ」

いつの間にかカガリが私をかばうように正面にたち、その隣ではアドラメルクが片手にキト八が放ったであろうツララのような氷塊を受け止め立っていた。

「カガリー！アドラメルク……」

「トーコ様、シンザ様が結界を解かれたのは、あなたをあえて危険にさらす事で奴の隙を誘い、私を解放させるため。お考えあつての行動ですのでどうかお腹立ちなさないで下さい」

肩越しに振り返ってこちらに視線を送るカガリの目はわずかに非難の色を含んでいて、思わず口を引き結んでしまふ。

そ、そうだったの……？わざと私の結界を解いたの？シンザがしたり顔で頷いているのが見えたが、その唇が意地悪く笑っているようにも見えて、いまいち反省し切れない。

「まったく、シンザ様の胸のうちの半身のくせに露ほども慮ることが出来ないなんて……半身失格！」

言いながらアドラメルクが氷塊を持った片手をかけると、ジュツという音と共に氷は溶け崩れ、指の隙間から水が滝のように流れ落ちた。あなたの手はアツアツのフライパンですか？というツッコミをする間もなく、地面に落ちた水は足元の土と混じって生き物のように細く渦巻き浮き上がると、さながら泥の蛇となってキト八に襲い掛かった！もう何でもありませんね、この世界はあ！

「……生意気な……土蛇でわしを縛めるか」

「さつきは今度抱いてあげるって言ったけど、シンザ様のお姿を見たらそんな気なくなっちゃったよ。ごめんね 消えてくれる？」

「きさま……」

飛び掛ってきたそれを右手に握りつぶし、こちらを睨むキト八に、ただアドラメルクは恐れた様子もない。なんかこいつ、シンザが現れた途端に強気になってない？恋の力ですか？

「土の属性妖と契約してないから、土蛇そのものは召還できないけど、土蛇を水妖術でつくることは出来るんだよね」

だって僕天才だから！と、性格の悪さを巧みに隠したい笑顔で付け加え、更に口角を吊り上げると、彼の綺麗な顔は残忍な殺人鬼のそれに形を変えた。

「次に会うときは僕の使役妖魔として……会おう」

勝気な宣言。でもそれは、はったりではなかったらしい。アドラメルクの足元の泥が先ほどとは比べ物にならないくらい、見えないスコップで多量に掬い上げられ、それは水と交じり合って、私が口をあけてぽかんと見ている間に、子供の胴体ほどの太さのある土の大蛇に姿を変えた。

ウネウネとうごめく泥の巨体を目の当たりにしてとっさに身じろぎするキト八を、すかさずシンザが指一本横に動かしただけでその場に縫いとどめる。じわじわといたぶる事にかけては見事な連係プレイを見せる奴らだな。ドS連盟に加入しているに違いない。

「っ……！」

焦りをにじませるキト八に、大蛇が容赦なく襲い掛かった。その刹那。

私は見た。

太い胴体がキト八を締め上げると同時に、キト八もまた術を放ったのだ。殺意の一撃を。

剣を構えて私を守るカガリめがけて、飛んでくる巨大なつらら。

つい最近の、カガリの特訓がよみがえる。短時間で反射神経が身につくわけが無い。だけど、先ほどと同様に私の体は反射的に動いていた。

「カガリ、危ないっ！！」

叫び、手を伸ばす。だめだ、届かない。背中を突き飛ばしたいのに、

足の裏が胚珠に吸い付いていて離れない。
ならば。

一連の動作は、本当に一瞬の出来事だった。

私は思い切り足に力をこめ、胚珠を蹴りつけ、気付けば前に飛び出していった。めりめり、という嫌な音と、何か糸のような物がプチプチと切れていくイメージが脳裏に閃き、次いで起こるかすかな痛みを足裏に感じつつ。

絶対に無理やり足を抜いてはならない。

ムスカのそんな言葉がチラリと脳をよぎったが、もう遅い。

自由だ。解放されたというかすかな喜びの中、これでもう届くはずのカガリの背中を思い切り押しした……つもりが、手ごたえなく、勢いもそのままに前方にもんどりうって転がり込む。

衝撃。口の中が切れて砂と混じり合っているのが気持ち悪い。

「いたたたた……」

横になったままの私の視界に恐らくカガリが弾き落としたのである。う、キトハの放ったツララの残骸がいくつかに砕けて転がっているのが飛び込んできた。当のカガリは私が突き飛ばさずとも、ツララを弾き飛ばした後に速やかに横に跳躍し攻撃を避けたいらしい。

顔を上げるとカガリが心配顔でこちらに駆け寄ってくるのが見えた。キトハは順調にアドラメルクの出した大蛇に締め上げられている。

あー、私ばかだなあ。よく考えたらカガリがこれしきの攻撃、避けられないわけ無いじゃない。なんで飛び出しちゃったんだろ。超絶格好悪いなあ、もう。

たぶん真っ赤になっていよう顔をゴシゴシこすりながら、何とか起き上がった。カガリを助けようとして、見事に骨折り損のスライディングを披露したところだが、ともあれこれで辛い花上生活

から逃れられるってものだ。最初から無理やり引っこ抜けばよかったな。
などと考えていて、ふと視線を感じて振り返ると、私を凝視し、思いつきり眉を寄せているシンザと目が合った。
なんなのよ、ちょっと無理やり足を引っこ抜いたっからって、大げさな。

とりあえず何か言っつてこの恥ずかしさを誤魔化そう。

「あー……うん、カガリが危ないと思って動いたんだけどさ、カガリとつくに避けてたね」

「……………ラ ハマリア ジレスティガ コライ トーコ
!？」

「あー、うんうん、ごめ……っつて、何？今なんていったの？」

またイヤミでも言われるからと予想して、シンザの言葉を軽く受け流そうとしたのだが。

聞きなれない音の羅列に今度はこっちが眉を寄せる。

「……………なんて？」

「トーコ！ハマリア オウイルジ エティエ ラーク！」

シンザは私に負けじと更に眉を寄せ、私の足を指差した。その表情にはからかいの色はない。急に意味の分からない言葉を話し出して、一体どうしたんだろう。

アドラメルクも大蛇を使ってキト八を縛り上げつつも、横目でこちらと気遣わしげな視線を向けてくる。

と、彼の気がそれたのを敏感に感じ取ったキト八が不意をつき、アドラメルクの額めがけて氷のつぶてを弾き飛ばした。あっと思ったときには、もう遅く、気をそらした隙に緩んだ大蛇の戒めからすりりと小柄な体は抜け出てしまった。

「キトハ！」

アドラメルクが叫んで大蛇を追わせるがキトハは器用に空中で一回転して大蛇の牙をさけ、人差し指で目の前に一文字を描いた。指の軌跡に合わせて空間に切れ目が入る。この世界の空間の仕組みはどうなっているのか謎だが、どうやらあそこから逃げるつもりらしい。そこにスルリと体を滑り込ませようとするのを、アドラメルクは更に大蛇をけしかけて追おうとする。しかし、それまで厳しい目でキトハを見上げていたシンザがふいに手を叩いてアドラメルクを振り向かせて、追跡を止めさせてしまった。

「ハリスト ケーヤ キール マジャ デイス」

「克蘭テ デチ ハマールン シンザ」

シンザは、命拾いしたことをそれほど有難がっていないような、やけに人をくつたニヤニヤ笑いをもらすキトハに侮蔑の視線を向ける。それから更に日本語ではない、私の知らない言葉で二、三言、何事か彼女に言くと、ふいにどうでもよくなったかのように欠伸をした。場違いな欠伸にキトハの顔がこわばったのも一瞬のこと、彼女は悔しそうに自分を見上げるアドラメルクに向かって、何事か叫ぶと、その言葉を最後に空間の切れ目に姿を消してしまったのだった。

一体なんだっていうのだろう……。訪れた静寂の中どっと疲れてため息を漏らす、あたりを見回し、自分を見つめる視線に気づかされた。まだ問題は解決していない。

何かとんでもないことを私はしてしまったらしい。
いきなり言葉が通じなくなってしまったのだ。やはり花から無理やり降りたのが原因だろうか。

「テリ ハマリア デイキア トーコ エテイエ…… ラ デイキア ギイスカル！」

駆け寄ったカガリが私の横に膝をつき、目に涙をためて、シンザと同様意味の通らない言葉で話す。どうしたらいいか分からずに口をパクパクさせる私に、シンザが表情を幾分和らげた。

「トーコ セリ ラセリ キータ」

などと言い、人差し指を自分のこめかみ周辺に持っていくと、その横でくると小さな円を描き、ふいにパツと手を広げて見せた。分かる。これは分かるぞ。つまり、お前は馬鹿か？といったジエスチャーだ。全世界、ならびに異世界共通のしぐさに瞬時に頭に血がのぼった。

「なによ！やる気？」

叫び、シンザにつかみかかろうとしたがカガリに袖を引っ張られて止められる。

彼女は首を左右に静かに振ると、ゆっくりと花を指差した。私の目を真摯にじっと見つめ、次に私の足を指す。交互に。

どうやら花に戻れと言っているらしい。シンザもカガリ同様、花を指す。

せっかく花から開放されたのに、またあの花の上に乗らなきゃいけないのか、やれやれ。いやだが仕方がない。私はしぶしぶうなずくと、すごすごと花の上に戻った。ほよんとした上等なクツシヨンのような感触は、しかし今は私を癒しはしない。だってせっかく地面に降りられたのに……。

何度目かのため息をつきながら、足をぺたりと胚珠にくっつけた。ひんやりとした感触に一瞬身をすくめる。

「やれやれ……わが半身がここまで馬鹿だとはな。花人の歴史上、類を見ない大馬鹿花人だ」

……途端、耳に入った日本語に、全身の血が沸騰した私だった。

*
*
*

15、異世界にて、前科一犯。(後書き)

第一部終わる終わる詐欺です。せつかく足無理やり抜いたのに逆戻り。20話までには終わると思います。。。

16 異世界にて、牛丼換算。

「…………なぜ、このようなことを…………」

青い髪の幼女に命を狙われたり、異世界で漢字を絶叫したり、変態男のどSっぷりが露見したり……『絶対足を無理やり抜くな』と言われていたのに言いつけを破ったりと、怒涛のすったもんだから、明けて早朝。

寝起き早々にして、私はこの世の終わりに直面したかのような洗面のムスカと対面していた。その横には困惑した顔つきのカガリ、あきれた様子で肩をすくめるアドラメルク、そして私の横には無表情で腕組みしているシンザ。

昨晩は疲れて眠りすぎたせいか、頭がまだ少しぼうつとしている。アドラメルクいわく、これは妖力の無い人間が無理をして力を使いすぎると反動でおきる現象らしい。

どうやら寝ている間に小雨が降ったらしく、雨上がり後独特の濃厚な緑と土の芳香が漂っている。普段私の周りに広がっている花びらは、今は半分だけ閉じて、私が小雨に濡れないようにしてくれたいらしい。

あー、日本では節約やりくり上手の出来たお姉さんだった私が、異世界では大馬鹿扱いされた拳句に忘れ物をして怒られる小学生のように大目玉をくらっているなんて……。

帰りたい。消えてしまいたいよー。
足元に広がる綺麗なピンク色の花弁に、雨の水滴が真珠飾りのように一粒ついているのを現実逃避気味に眺めていたら、頭に大きなため息が落ちてきた。

「本来花人は思慮深く、大樹のように落ち着いているもの。わしの忠告を忘れ、天花の繋がりを無理やり引き抜き花を飛び出すとは……前代未聞の不祥事じゃ。聖母様になんと申し開きをすればよいのか……」

「咲いたのは天花ではなく、馬鹿の実がなる花だったとも言えはよい。開花師ムスカの名は失墜するだろうがな」

「あるじ様！戯れを申しておる場合ではないのですぞ。これは、由々しき事態だとあるじ様もおわかりのはず。聖母様はもう宮殿を発たれて、明日にでも到着されるというのに……！」

「さぞかし見物だろうな。まあ、儀式自体今まで一度しか成功していないという茶番のようなもの。もとより期待はしていない」

ムスカの乗ってきた大鷹の頭をぽんぽんと叩きながらシンザがどうでもよさそうに言う。あくび交じりに投げられた言葉に、ムスカの顔が困惑と苛立ちを宿して歪んだ。お年寄りにこんな顔させるなんてなんて奴だ。とは思うが、一番の根源は私にあるからいたたまれない。

どういう仕組みなのか、私はこの花の胚珠を通して異国語を理解して、かつ話せていたらしい。今は胚珠に足をぺったりつけているから、ムスカの怒りの言葉も、シンザの適当な相槌もよーく分かるけど、足を離れたらたちまち言葉は理解不能な音の羅列にとつてかわり、まさしく私は異国に迷い込んだ外国人状態になってしまうのだ。

しかもしかも！

さらに困ったことに、私は妖術を駆使する力を花を媒体として使っていたらしく、花の接続が切れた途端、妖術も使えなくなってしまっらしい。つまり、花から降りればただの人、だ。

ムスカ曰く、自然に足が抜けるまできちんと待っていれば、異国語を理解したり、力を使えたりといった天花の能力をそのまんま私にまるっと移行できていたらしい。そう、きちんと待っていてさえい

れば。

「まったく、こんなことになるうとは……」

ムスカの刺すような視線と言葉にたまらず私はうつむいてしまふ。そばにいたカガリが私の手をそつと握り締めてくれた。

「もとはといえば、恐れ多くも私をかばってくださいってトーコ様は花から降りてしまわれたのです。ムスカ様、すべての責は私にあります。トーコ様は何も悪くありません！」

優しいカガリは先ほどから何度も自分が悪い、トーコ様に咎は無いとムスカに訴えてくれている。かばうつたつて結局カガリは自分で攻撃をよけていたんだし、どう考えても悪いのはやっぱり私なんだけど、本当に優しい子だよ、カガリ……。感動で私の目に熱いものがこみ上げてきた。異世界で芽生えつつある女の友情に、しかし水を差したのはアドラメルクのため息だ。

「ま、いくらカガリが擁護しようと、トーコ様の失態は拭えないけどね。あの生意気な水妖にも逃げられちゃうし、まったく、あいつ去り際に、シンザ様にろくでもないこと言いやがって……」
赤毛をいらいらと掻き毟って、アドラメルクは悔しげに唇をかみ締めた。

花から降りていたせいで言葉がまったく分からなかったのだが、どうやらあのキト八という少女との間に剣呑なやりとりがあったようだ。いったい何を言われたのだろう。

「気にするな、アドラメルク。水妖の言葉なぞ戯言だ。それに言葉自体に呪がかけられている。信じれば言葉に捕らわれてしまうぞ。」

それはそうと、お前の造りだした土蛇はなかなか面白かったな。あれに免じて、水妖に逃げられた件も不問にしよう」

「シンザ様……」

瞳を潤ませて熱い視線を送るアドラメルクに、唇の端をわずかに上げて微笑みを送ると、シンザは「さて」とおもむろに私の右手を持ち上げた。

「馬鹿な犬には首輪をつけてやらねばな」

そうだろう？という琥珀の瞳の問いかけに、意味も分からずとりあえずあいまいにうなずく。何だろう、犬でも飼いたいのだろうか？わけが分からない。

「では」

感情の読めない微笑。口元は確かに笑っているのに、この男からはどうして感情の揺らぎというものが伝わってこないのだろう。まるで、薄い氷の膜の隔たりを通して見ているみたいだ。

そんなことをぼんやり考えながらシンザの顔を見ていたから、薬指に伝わったひんやりした感触に咄嗟に気がつかなかった。

「え？」

視線を指に落とし、やっと、自分の指に嵌められた指輪に気づく。角度によつては紫色にも見える銀色の金属の土台には、シンザの指に嵌められているものよりもずっと小ぶりな赤い石が留められている。ルビーだろうか。小さいとはいえ、深みのある色合いから想像するに、きっと日本で私が毎日朝晩バイト尽くめで1年働いても買えるかどうか分からないくらいの値段がするに違いない。400万円くらい？牛井一杯の値段に換算したら何万牛井円だ？

「気に入ったようだな」

どことなく満足そうな声にはっと我に返った。

「と、唐突な出来事に思考が牛井巡りを……」

「ギユウドン？またわけの分からぬことを」

「っていうか、これ！何なの！？」

シンザの手にまだ自分の手を乗せたままだった事に気づき慌てて手を引き叫ぶ私をシンザは小ばかにしたように鼻を鳴らして眺めている。

「その石は紅玉といい、妖力を圧縮・保存する性質に優れている貴重なものだ。これに花の妖力を封じておけば、花から離れてもしばらくはもつだろう。それに、お前に何かあれば、離れていてもすぐに居場所が分かるよう特殊な術もかけておいた。ま、お前には過ぎた首輪だが、この俺の半身を務めるのであればこのくらいのものでしておけば人間、人外問わず丁度よい威圧になるだろう」

「……首輪発言には今は触れないでおくけど。つまり、この指輪をしたら……」

「鈍い奴だ。その指輪に封じ込めた妖力が枯渇しない限り、お前にとつての異世界語も理解し、話せるし、おまえのつたない弱弱しい、お粗末な妖術も使える、というわけだ」

ありがたく思えよ、と偉そうに告げるシンザに、しかし今回はかりは文句を言う気にはならなかった。

だって、花を降りたら言葉が分からないし、このまま死ぬまで花上生活かっつとこまで覚悟してたんだよ！？安堵感が先ほどまで胸を占めていた絶望を見るうちに押しやっていく。居場所が分かるとか、プライバシーを主張したくなる余計なオプションもついているようだけど、これさえあれば堂々と出歩けるんだ。認めたくないけど……ありがたい。

「シンザ、私、この世界に来て初めてあんたに感謝したかも……！」
「ふん。最初に俺と会話した時点で平伏して感謝すべきなんだよ」

鼻に皺を寄せて険悪な顔つきで言い返すシンザに、いきなり押し倒して剣を突きつけてきた奴に感謝できるかという突っ込みを飲み込んで、文句は言わずに、小さな声で礼を述べる。

「礼を言うなら働きで返せ。これから存分に役立つてもらわねばな
少しだけ感情を宿して揺らいでいた瞳が急速に冷えて氷の湖のよう
に色を失う。

また、この目だ。”力”にかけるこの執着は異常なくらいだ。
思わずうつむいて押し黙る私に、ためらいがちな咳払いがかけられ
た。

顔を上げると、ムスカが先ほどまでの渋面をやや和らげてこちらを
注視していた。べつに存在に気づかなかったわけじゃないんだけど、
なぜか急に恥ずかしくなつてバタバタと手を振ってしまう。

「いや、これにて一件落着だねっ！シンザに便利道具もらったし、
もう何の気兼ねも無く花から降りられますよ……っ！」

論より証拠。指輪をそつと撫でて、立ち上がった私は勢いをつけて
花から飛び降りた。

密集して生えている苔の上に立ち、大地の感覚に感動しながら一歩
一歩踏みしめて、ムスカとカガリの前にたどり着く。ああ、歩ける
って素晴らしい。

「あの。ワタシノコトバ、ワカリマス？」

かしこまって片言になりながら首をかしげると、ムスカもカガリも苦笑を口元に刻んでうなずいた。

隣で一連のやり取りをどうやらずっと硬直して見ていたらしいアドラメルクはやつとのことで空きっぱなしだった口を一度閉じると、もう一度開けた。そのしぐさが変な機械仕掛けの人形みたいで思わず笑ってしまいそうになる。何をそんなに呆けていたんだろう。シンザが便利道具をくれたことがそんなに珍しいことなのかな？まあ、優しさのかけらも普段から見せなさそうな奴だから、こんなことは珍しいのかもしれないな。

「アドラメルクも大した怪我はしてなくてよか……」

「シンザ様！こんなやつに、紅玉の指輪を与えるなど！」

色々あったけど私が日本に帰れるまで仲良くしようね、の意を込めて差し出した私の言葉と右手は、アドラメルクによって発せられた、棘に覆われた悲鳴まじりの声に見事に振り払われた。アドラメルク……本音むき出しで生きてるな！。

「まあ、先ほども言ったが指輪と思うな。首輪だ」

シンザがどうでもよさそうに頭をかきながら告げるが、アドラメルクは激しく首を振った。いくら相手がシンザであれ、どうやら譲れないものがあるらしい。

「指輪でも首輪でも一緒です！紅玉を嵌めてよいのは大陸の統治者と、それに連なる者……」

言いながら、ハツとして口を閉ざすアドラメルク。

いったい何だつていうんだろ？わけも分からず私は首をかしげて彼を見やるが、怒りと困惑の入り混じった視線が返ってくるだけだ。

「まあまあ、たかが指輪でそんなにカリカリしないでよー。私の世界じゃ、指輪はあげる人と受け取る人によっては特別な意味を持つ

たりするんだけど、こつちの世界じゃただの装飾品でしょー？あ。
首輪って言わないでよね。人を犬みたいに。シンザ、これは、ゆ・
び・わ！」

前半は場を和ますように明るく、後半はどこぞのバカに諭すように
ややきつめに言ったのだが、場は和むどころか微妙な沈黙を呼び込
んでしまったようだ。

アドラメルクは怒りのあまりこぶしを握り締めているし、カガリと
ムスカは曖昧に苦笑している。

そしてシンザは……なんか怒ってないですか？

お得意の冷笑を張り付かせた顔でこちらを見るその目は何というか、
微妙に据わっていて、無表情の中異質な存在感を放っている。

これ以上発言しないほうがよさそうだ。

日本人特有のスキル、ザ・空気読みを発動させて押し黙る私に、ム
スカがため息混じりに、

「……とりあえずは、聖母様をお迎えする準備をしようかの……」
とつぶやいたのだった。

地面に降り立てても、窮屈さは何も変わらないな。

ああ。面倒ごとの予感ですよ。

17 呼ぶ声（前書き）

13〜15話のシンザ視点です。

最初だけ少し一人称ではないのですが、概ね彼の胸中が色々と。

17 呼ぶ声

シンザ。

彼の名を呼ぶものは皆、地べたを這うような目線で彼を見上げ、恐れと共に呼ぶ。

シンザ、と。

炎山の住人たちは恐怖と怒り、そして屈辱に耐えかねながら瞳を揺らし。

大陸の人間たちは畏怖と自分勝手な崇拜をこめて瞳を濡らし。そうして否応なしに高みへと担ぎ上げられる。

望んで崇拜を得たいわけでも、恐怖を支配したいわけでもない。ただ、必要なのだ。

力が。足りないものを補う為だけに。

ただ、綻びを必死に繕い続けるためだけに。全ては、探し続けていまだに見つからない、あれのせい。

あれ 真の指輪が、まだ見つからない。その穴を誤魔化して、首尾よくいつてあがめられ、また期待にこ

たえるために誤魔化して、の堂々巡りだ。趣味の悪い終わらないすごろくのために、これからも永遠にサイ

を振り続けるのだろう。畏怖や怒りにまみれた、名を呼ぶ声を聞きながら。

シンザ！

ふいに名を呼ばれた。

意識を唐突に揺さぶられ、シンザは大きく体を揺らす。常人より発達した運動神経を持つ彼でなければ、遙か彼方の地上に落下していたかもしれない。

愛する主人のわずかな動揺を察知して、手綱の先の大鷹が一瞬、気遣わしげに振り向いた。

安心させるように首の根元を叩いてやると、賢い鷹は一度大きく翼をはためかせ、再び気流を捕まえて安定した飛行に入る。

焰火宮にて花人の危険を察知し、愛獣に乗って飛び立ってから数刻が過ぎた。眼下に広がる景色は荒涼とした砂漠地帯から緑を増やしつつあり、少し先を見やれば、もう、すぐそこに神域たる森林地帯が広がっている。遠方からでも分かる、上級妖魔独特の禍々しい気配に、たった今も繰り広げられているであろう苦戦が予想された。焦る気持ちは一向に無いが、そろそろ景色に見飽きてきた。手綱を引き寄せ少し速度をあげれば、向かい風がさらに強まる。

「……俺の名を呼んだ、か」

強風に踊らされる己の黒髪が頬を叩くのをわずらわしげに頭に巻いた布に片手で押し込み、先ほど自分を呼んだ声を思い返す。

半身同士は意識せずとも心の声を伝えることが出来ると聞いたことがある。ただ、それはきちんと半身盟約の儀式もすませた場合の話で、まだ儀式も済ませていないうちから声が聞こえることはありえない。よほど、相性が良く、結びつきの強い半身同士で無い限り。

「まさかな」

馬鹿げた仮定に喉の奥で哂う。大陸の統治者たる自分が、おそろくたった今も結界に守られてなすすべも無く助けを呼ぶだけの花人などと相性がよいはずが無い。

天界、澗界いずれかより花を通して魂を召還され、実として形を成し人間界に生まれるのが花人である。その稀なる例外として、この世界の何処にも属さぬ次元から現れた、異界の娘を思い浮かべる。妖力も皆無に等しいくせに魅了の術に長けていたり、確かに面

白いところもあるが、奇特さに利用価値を見出しているだけであつて、まさか自分ほどの実力者と肩を並べるほど相性がいいとは夢にも思わない。そう、利用価値を見出しているだけだ。役に立たないなら、また代わりを探せばいいだけのこと。

今だつてこうして大鷹をせかして神域に向かっているのは、決してあれを助けてやりたい一心からではなく、せつかく見つけ出した貴重な花人という存在が惜しいゆえに、だ。しかしもし、戦いの場において泣き叫び逃げ惑うだけのつまらない女ならばこちらから斬り捨ててやろうかとも考えている。

自分が助けに向かうと宣言したときは、五神官の面々に面喰らわれ、万年乙女病のクレアにはとうとうシンザ様にも愛がどうのこうの、と気持ちの悪い感激までされたことを思い出し、シンザの唇が不愉快さを宿して曲げられた。

苛立ちで、過ぎ行く景色がやけにゆっくりに思える。

大陸一速く飛ぶ大鷹に乗っているはずなのに、こんなにも遅く感じるのはなぜだろうか。

「俺の名前を気安く呼びつけやがって……」

いったいどんな顔で自分の名を呼んだのだろうか。

そう、聞こえたのは脳裏でだ。だがまるで、至近距離の真正面で視線を合わせて実直に名前を呼ばれたような気がした。今まで彼の名をそんなふうに呼んだものはいただろうか。実の母にさえ、同じ視線で、正面きつて名前を呼ばれたことなど皆無に等しいというのに。何かむずがゆい様な、心臓を内側からくすぐられている様な、捕らえどころの無い感覚にとらわれて、知らず眉間に皺が寄る。

その不快感を気安く名前を呼ばれたことに対する怒りと結論づけ、全てが落ち着けばきつい仕置きでも据えてやろうと心に決めたシンザは、さらに大鷹をせかし神域へと向かう。

半身の娘が、初めて自分の名を口にしたという事実と、それに付随するかすかな満足は、飼犬が初めて伏せを覚えた程度の喜びと同等のものなのだろうと、トウコがきけば怒り狂いそうな理由をつけて、やりすごしつつ彼は大鷹を駆るのであった。

神域についてから目の前で繰り広げられた戦いは、茶番といったも差し支えの無いものであった。

どれほど力の強い妖魔が来たのかと思えば。

蓋を開けてみれば、恐らくは北の統治者によるつまらない茶々入れである。相変わらず、相手の動向をこそこそと覗き見る悪趣味は治っていないらしい。

西の統治者が半身を手に入れたと早速知って、上級妖魔を使い牽制でもしているつもりなのだろう。

脳裏に浮かぶ憎たらしい美麗な顔に心中で悪態をつきながら、この面白くもない騒ぎを早々に終わらせることにした。

わざとトーコの結界を壊し、隙を作ってやれば愚かな水妖はあえなくカガリを手放した。

もちろんトーコに危険が及ぶが、反応がいちいち面白いのでつい遊んでしまう。

異世界の文字を媒体に妖力を開放したときには少々驚いた。

その一風変わった妖術の発動のさせ方も驚きに値するが、本来使えるはずの無い金山の土属性の妖術を発動させたことも新たな発見であった。

妖術を使うには、使いたい妖術の属性を共にする妖魔を使役していなければならない。

アドラメルクのように炎山の妖魔を使役していれば炎山の加護を受け、当然、炎属性の妖術が使える。トーコも下級妖魔とはいえ炎

山の妖魔を使役しているので炎の妖術は使えて当然なのだが、彼女は異国の文字一つを依り代にして、土属性の土砂をつくりだしてしまった。金山の妖魔は使役していないにもかかわらず、だ。

威力さえお粗末ではあるものの、成し遂げた内容ははつきり言って、澱界の干渉を受けずに森羅万象をつかさどる存在　神妖レベールの技なのだ。

これは案外よい拾い物をしたのかもしれない。

薄乳・顔平凡・身の程知らずとどうしようもない娘だが、力に限ればやはり、面白いものをもっている。

退屈な戦いの中、やはりトーコを役立たずとして斬り捨てる必要はまだ無いと、頬に傷を負った横顔を眺めながら考える。

大した傷ではないが、今まで一度も戦いの場に身を投じたことが無いものにとっては衝撃的な怪我なのではないだろうか。ましてや顔だ。まあ、傷がついて惜しいほどの美貌かと問われれば否定するほか道は無いが。

なかなか気丈にも痛がる素振りを見せないトーコの、痛がる表情が少し見てみたくなり、なんとなく傷口を刺激してみる。

「いてっ！」

悲鳴を上げて、手を　振り払われた。知らず口角が上がる。面白い。もう一度刺激してみる。また、振り払われた。キツと睨み上げる目は苛立ちで燃えていて、この自分相手に煩わしさを隠そうともしない様子が、なんだか子ザルが懸命に虫を追い払おうとしているみたいで……面白い。

そのうち、妖魔が意識を取り戻す気配を感じた。

トーコはもうすっかり片をつけた気であるが、こういうところは甘いといえようが無い。

忠告してやるも甲斐なく、妖魔は復活してしまった。

そして……

茶番劇最大の見せ場が始まる。

トーコの世界には身分の上下というものが無いのかもしれない、とは最初にカガリたちと引き合わせた時から思っていた。

王や貴族、巫女や神官といった権力者と、支配され仕える代わりに安全と暮らしの保障を受諾するという関係はなじみが無いのだろう。

でなければ大陸の統治者たる己に対し数々の不敬罪をはたらけるわけが無い。カガリのような五神官といえども己の専属の従者に対して頭を下げたりと、半身相応の態度すらとれないくらいだ。

花人として降り立ち、半身としてこの自分の横に立つ名誉を備えながら、奢ることを知らない異界の娘は 世話係を救うために、自分の身を投じたのだった。文字通り、体を投げ出して。

出会ったばかりの、トーコにとっては異世界の人間で、身分も格下の世話係だ。

先ほどまで結界を壊され、身の安全を奪われ本気で怒っていたというのに、今度は自ら危険に身を投げ出した。しかも、自分のためではなく、その世話係を救うために。

一体どういう思考で動いているのだろうか。

開いた口が塞がらないという経験をしたのは初めてのこともかもしれない。

固まる口をどうにか湿らせ、やっと言葉を発する。

「トーコ、このバカ……花から降りたのか！」

それに対して返ってきたのは、意味の分からない異国語の言葉。

「早く足を花に戻せ、トーコ！」

叫べども、トーコは困惑した様子でたたずむだけだ。

なかなか予想外の動きをする奴だとは、早々にして気づいていたが、まさかこれほどまでだったとは……。笑い出したいような、苛立ちが膨れ上がるような、渦巻くさまざまな思いの中心で、台風の目の中にいるように不思議と落ち着いた気持ちでいる自分もいることに気づく。

この女は獣と同様、本能で動くのだろう。犬や猫と同じだ。

ならば……。首輪を与えればいいだけのこと。

恐らく言葉が通じなくなっただのは花との繋がりが無くなったからであろう。胚珠を通して妖力を送り出していたのだから、繋がりが絶たれた今、双方にとっての異国語を翻訳する力が働かなくなるのは当然のことだ。

幸い、母上から半身に捧げるように渡されていた指輪が焰火宮に保管してある。あれに花の妖力を注いでくれてやればよい。こんな奴に紅玉を渡すとはとんだ無駄だが、言葉が通じぬとあっては背に腹は抱えられない。

あとで適当な使役妖魔に取りに行かせよう。
つらつらと考えているすぐそばではアドラメルクと妖魔が再び戦いはじめている。

と、生意気な水妖が隙を突いて澱界への逃げ道を開いてしまった。
まあ、あんな雑魚もはやどうでもいい。

「せいぜいお前の間抜けな主人によく伝えてくれ」

逃げる背中に丁寧に挨拶をしてやった。

「お前の首はわたしのあるじのものだ」

振り返った水妖が下品な笑いを見せて挑発してくるが、こちらは生憎虫けらがいくら煩く飛び回ろうと、本気で追い掛け回すほど暇ではない。その旨伝えると、水妖の顔がたちまち怒りで歪んだ。分かりやすい妖魔だ。

「愚かなる王よ、ようくきけ。

おまえは かならず おまえの 命よりも大事なものを 失うだろう
う みえるよ、 なきさけび、 そうしつに たましいをぬかれる
おまえのすがたが」

水妖の声が歌うような節にのって耳に届く。

呪言だ。いまや廃れ操るものは稀だとは聞いていたが、相手の未来におこりうる出来事のうち、もっとも悲惨な未来を選び相手に伝えるという子供だましな、水妖特有の能力だ。対象者がその言葉を信じれば信じるほど、実現する可能性が高くなるとされている。

まあ、己の命よりも大事なものなどあるはずもないから、この呪言は無効に等しい。

そもそもこの俺に向かって呪言とは。鼻で笑ってしまったが、恐らくそれを聞かないうちに、水妖は次元の狭間に逃げ帰った。

まったく騒々しい茶番だ。

「ああ、神妖ギイスカル様！どうかトーコ様にお力をお与えください！」

突然言葉の通じなくなったトーコに対し、カガリが取り乱して神妖の加護を願っている。常に冷静沈着な彼女が取り乱すとは珍しいこともあるものだ。

とりあえず、途方にくれている愚かな我が半身に温かい言葉の一つでもかけてやろう。

「トロー、お前の頭は空っぽなのか？」

分かるように仕草も交えて話してやる。

見る見るうちに赤くなっていくトローの顔を眺めながら、指輪をくれてやればどんな顔をするだろうか、と密かに考えた。

17 呼ぶ声（後書き）

誤字脱字の見本市のような初期投稿を直しました。文法におかしなところや誤字脱字がまだありましたら教えていただけるとありがたいです。

18、頭叩かれりゃパンチで返せ。

がくがくと。

頭が揺れる。

髪の毛を掴まれては引つ張られ、結われてはほどかれ、結われては、ほどかれ。

先ほどからカガリの手が私の髪を持ち上げては下ろしたり、頭上で忙しく動き回っている。

イス代わりの花の上にちょこんと座らされた私は、前後左右に髪の毛を引つ張られ、がくがくと揺らされ続けているのだが、船酔いのような状態になってしまったらしく少し気分が悪い。

「ねえ、カガリい……」

私はげんなりとカガリを見上げた。真剣な顔つきで髪を両手に悪戦苦闘している彼女に、何度目かの提案を何度目かの嘆息と共に投げかける。

「別にここまで苦労して髪の毛結わなくてもいいんじゃない？」

「だめです。聖母様の御前に侍るのに、このような頭では私の世話係としての面子もたちませんし、聖母様への失礼にも当たりますので！」

たかが髪を結うくらいで息切れすらし始めているカガリは手を休めずにきつぱりと言いつつ切った。

口調こそ勇ましいが、その表情は悲壮感にあふれている。

「あつ……しつぱ……」

ため息と共にまた髪の毛がわしわしとほどかれる。しっぱ、ってなんて言おうとしたのカガリ!? 一体私の頭はどういうことになっているのかと、確かめるすべを持たない私は、とりあえず頭に手をやってみて、そこにあるはずのないポリウムを確認して絶句した。頭を結び上げる作業をしてもらっているはずなのに、どうして私の頭は毛玉でもつれふくれあがっているんだろう? 聞きたくても言葉に出来ない疑問を飲み込む。答えは出ていたから。

そう、カガリは致命的なまでに……不器用だったのだ。

「カガリ。そろそろ急いだら? 滞りなくこちらに向かっていると、聖母様の護衛編隊の伝令が入ったよ」

繁みをかき分け現れたアドラメルクは先ほどまで着ていた軍服のようないでたちを着替えてきたのか、少し華やかな装いに変わっていた。

とはいえ黒を貴重にしたぴったりとした上着にズボン、ブーツは変わらず、そこに金のふち飾りのついたマントを羽織り、味気ないベルトを外し、細やかな金の装飾を施したベルトをきりりと締めなおしただけなのだけ。

女に見まごう華やかな顔立ちが、華美ないでたちによってよりいっそう中世的になって美しい。性格はともかく、美人は得だなあと、まじまじと彼を見ていたら。

「トーコ、頭で小鳥でも飼うつもりなの?」

アドラメルクは私を数瞬注視すると、大口を開けて、遠慮なくげたげたと笑い始めた。はい、美人が台無し。まあ、男なただけ。

「トーコ、ではなくトーコ様とお呼びしろ」

カガリがびしゃりと言い返したが、相変わらず反論すべき論点が

ずれている。

「別に様づけで呼ばなくてもいいんだけどさ、私の頭、どうなってるの？」

「もつれております」

「もっじゃもじゃだね」

「……とりあえず、櫛、かして」

私のため息まじりの言葉に、カガリが申し訳なさそうに櫛を差し出してきた。これから会わなければならぬ相手がやんごとなき身分の間人だと聞かされても、所詮異世界のVIP。全くピンとこないし、私は別に自分の髪型がどう結われていようと、格好が失礼にあたろうと、心底どうでもいいのだけど。頭が鳥の巣状態というのは年頃の女としていただけでない。

通りそうなところから櫛を入れ、もつれをゆっくりほどくように髪を梳く。

私がいつか図書館でかりて読んだ異世界トリップを題材にした本では、異世界では黒髪は超珍しくて、それだけでも付加価値がついて回るのが普通だったのに、こちらの世界ではシンザヤカガリの髪も黒髪だし、私の頭は珍しくもなんともないようだ。しかもカガリの黒髪はさらさらと絹糸のような質感なのに、私の髪はしばらくのお手入れ放置生活のせいなのかゴワゴワで、手触りも最悪。

ああ、お風呂に入りたいなあ。元の世界の、あの狭い家の狭いお風呂につかりたい。戻って、鼻歌なんかを歌いながらゆっくりシャワーを浴びたい……。

なんてことを考えながら髪を梳いていたら、カガリもおおずおおずともう一つ櫛を出して手伝い始めてくれた。結うのは苦手だがさすがに髪を梳くくらいは出来るようで、着実に毛玉が減ってゆき、程なくして私の髪は元通りの肩下ストレートに戻ることが出来た。

「とりあえず下ろしたまんまでいいかな」

カガリが再チャレンジだとばかりに瞳を燃やして手を伸ばしてくるのを押しとどめ、傷つけないようににっこりと愛想笑いも付け加えると、しぶしぶ手を引つ込めてくれた。

「トコ様がどうしてもとおっしゃるのなら……」

「どうせ献呈の儀は一般大衆の目に絶対に触れることのない密儀中の密儀なんだし、カガリが気合入れるのは焰火宮に戻って目白押しのもろもろの儀式が始まってからでも遅くないんじゃない？ どうせ素材がこんなのだし、何しようと思駄だらうけど」

残念そうに櫛を懐にしまうカガリに、アドラメルクが失礼な慰めの言葉をかけているが、私はその失礼な言葉よりも、彼の言った話の内容に思わず立ち上がりかけて、あやうくカガリの顎に頭突きをかましてしまいそうになった。

「め、目白押しって何が……！？ そういえば、これから私一体何すればいいのとか、ぜんっぜん聞いてないんだけど！」

「何驚いてんのさ。献呈の儀が終わり次第、焰火宮に帰還してすぐに身を清めて半身契約の儀式が執り行われるし、お披露目のあとはすぐに東の大陸に出発するに決まってるだろ。それとも何？ シンザ様の半身としてこれから先は宮殿で何にもせず、一生左うちわで暮らせるとも思ってたわけ？」

そう言って、アドラメルクは首をかしげて私を睨んでくる。

な、なんか、さつきからこれまでも増してやけに攻撃的に突っかかってくるんだけど、何だっというのだろう。時折、私の指に嵌められた指輪を見て憎憎しげに舌打ちをしたりするのもよく分からない行動だ。

「左うちわも何も、こんな世界、長居しないで帰れるものなら今すぐにも帰りたいわよ。そのために神妖も一匹手に入れてさっさともの世界に帰してもらうんだから」

「トーコ様っ、澱界をつかさどる神妖を『一匹』などと動物のようにおっしやらないでください」

どうやら私の言った『一匹』がよほどショックだったのか、カガリが血相を変えてたしなめてくる。

この慌て具合や、神妖とやらを奉っている神殿があつたりすることから考えるに、神妖つてこの世界における神様みたいなものなのだろうか。だとしたら確かに神様相手に一匹などという数え方はまずいな。しかし神様なのだとしたら、神妖を信仰対象にした宗教も存在するのかな。うーん、よく分からない。

思わず腕組みして考え込む私の頭に、ふいに鈍い衝撃が走った。頭を叩かれたのだと気づいて文句を言おうと顔を上げたら、緊張した面持ちでこぶしを胸に当て、敬礼のようなポーズで固まるカガリとアドラメルクと目が合う。

続いて背後からのしかかる威圧感。頭上に落ちてくる、わざとらしいため息。

振り返ると、はあ、やっぱり。

「口を慎め。神妖を一匹などと数える花人なぞ世界ひろしと言えどもお前くらいだ。まったく、少しは半身としての自覚を持てよ。その指輪をしているだけでお前は俺の半身だと知れてしまうのだからな」

冷たい金色の瞳と視線が合うと同時に、小言の雨が落ちてきた。

さっきから小一時間ばかり姿の見えなかったシンザが、いつの間に戻ってきたのか私の背後でたたずんでいたのだ。まったく、そのま

ましばらくどこかに行つてればいいのに。

私の文句が口をつく前に、私の正面に移動したシンザの手が動いて、私の髪を掬い上げた。

「そろそろ準備も終わったかと思つたが、何だこの頭は。乱れに乱れてどこぞの妖魔かと思つたぞ。顔が平凡なのだから髪くらいどうにかしろ。第一何だそのむ……」

「胸も顔も生まれ持った私の財産っ！ほつといてよ」
「持たないほうがましな財産だな」

冷笑を含んだ言葉に……ぼちつとな。

普段は封印している怒りモードのスイッチが静かに押される。

「あのね。この際はつきり言つておく。確かに私は美人じゃないけど、こんな顔でもお父さんとお母さんから受け継いだ大切な大切な体の一部なの。顔でも胸でも、お母さんがお腹痛めて生んでくれた大事な私の体なの！私の性格のことならともかく、あんたに私の容姿をとやかく言われる筋合いはありま……」

言葉を切り、こぶしを握る。

「っせん！」

きつぱり言い切つて、シンザの腹にパンチをお見舞いしてやった。さつき頭を叩かれた仕返し……なんだけど、かったいなコイツの腹は！どんだけ腹筋鍛えてるんだよ。

殴つたこぶしをさすりつつも、少し驚いたのかわずかに目を見張るシンザを目にして、少し胸のつかえが取れる。こんなに文句言つつもりはなかつただけけど、初対面から薄乳だなんだといわれて私も深層意識下でよっほど鬱憤がたまっていたんだな。まあ、これで

スツキリだ。

私とシンザの言い争いに危機感を感じたのか、あわあわと口元に手をやっている力ガリと眉をひそめて私を睨むアドラメルクに肩をすくめて見せる。

と、シンザが私の頭にもう一度手を置いてきた。今度は叩くのではなく、そつと。

「父母から受け継いだものなど……俺にとっては下らぬものばかりなのだが。お前自身はお前にとって尊いものだというのか」

この流れだと普通謝ったりするものなんだろうけど、わけの分からないことだけを言っただけの謝罪のしゃの字も出さないシンザにまた怒りのスイッチが押されそうになる。が、その顔の表情にふと、誰か私のよく知る人の顔が重なって、結局文句を言うのをやめた。

「……ま、これからは容姿に関する文句は言わないことね」

頭の上にいる手の感触が居心地悪くて、首を傾けて手を外すと、シンザがにやりと笑った。外した手がするりと動いて私の右手がつかまれる。

「容姿に文句は言わないが、お前の場合は、性格の方に文句をつけなければならぬ。己の半身をこぶしで殴りつけるとはいい性格だ」

「だから、それはあんたがっ！」

「まあまあ、トーコ様もシンザ様もそのくらいになさって下さい！そろそろ聖母様にご到着されますよ！このように口論されているところを見られてもしたら……」

またもや言い争いに身を投じそうになる私とシンザをとめようと、

カガリが間に入って必死にとりなそうとしてくる。年下の少女にこんなにも必死な顔をさせるのはちょっと格好悪いな。と、反省したのもつかの間、アドラメルクが投げやりに、

「いつそのこと、聖母様が斬り捨ててくれたらいいんだよ。『シンザ様の半身にふさわしくない』って」

などと言い捨ててくるから、また私の闘志が燃えあがる羽目になる。

大体、この子も失礼なんだよね。ここは年長者らしく、バシツと行ってやらないとな。

心中で腕まくりして、ふと視線を森の奥のほうに動かすと、見慣れた白いローブが木々の間から揺れつつこちらに向かってくるのが見えた。

ゆったりとした足取りでやってきたのはムスカだ。片手に水差しのようなものを持っているが、よくよくみるとその中は空っぽだ。

「献上の儀のために、この周辺を”静かなる水”で囲ってきましたぞ。これで、我らのいる場所が外部のものに覗かれる心配はありません」

ムスカは少し疲れたように微笑すると、水差しをシンザに渡した。たくさんの皺に埋もれている、いつもは分かりにくい表情が、今は心なしに緊張にこわばっているような気がする。ムスカがこんなに緊張するなんて、聖母様とやらはよっぽどこの世界で身分の高い人なんだろうな。

あ、なんかさっきまで緊張してなかったのに、私までドキドキしてきた。

気のせいかな腹痛までしてきて知らずお腹を押さえる。

と、ふいに耳に、かすかな鈴の音のような澄んだ音が飛び込んできた。

リーン……リーン……というその音は、着実にこちらに向かって音量をましてゆく。

ムスカとアドラメルク、カガリが同時にザツと音を立ててその場に膝をついた。

シンザだけが飄々としたたたずまいで、口元に笑みを浮かべている。

「 やつと、母上殿のおでましか」

シンザのつぶやきを聞きながら、私は場違いなことを思っていた。さっきの言い争いの最中、シンザの顔を見たとき、誰かに似ているような気がしたのだけれど。

誰だかわかった。

弟たちだ。

バカなことをやって私に怒られ、しよげ返る弟の子供っぽい顔に似てたんだ。

今見たら全然似てないのに、変なの。

……と。

18、頭叩かれりゃパンチで返せ。(後書き)

トウコの心中におけるシンザの立ち位置が、ヘマをやらかして叱られたバカな弟・ポジションに昇進しました。シンザの中でトウコは、小猿的な何か、のようですが。どうなんたるこの人たち。

読んでくださった方、お気に入り登録をしてくださった方、お付き合いいただいて本当にありがとうございます。登録がゴッソーと減ることも多々ある今日この頃ですが、もちろん反省を胸に、がんばって最後まで書ききろうと思いますので、もうしばらくお付き合いいただけると本当に、幸せです。

緊張した面持ちで唇を引き締め、膝をついた体勢でじつとうつむくカガリと、人を小ばかにしたようないつもの嘲りの表情を消してカガリと同じ体勢で待機するアドラメルクを見ていたら、なんだかこっちまで緊張してきた。次第に大きくなってゆく鈴の音に比例して、私の心臓も鼓動を強く増してゆくような気がする。

花の中からコンニチハー、したおかげで、この世界では花人と呼ばれるレア人種認定を受けたり、半身なんて物騒な役目に（半ば選択の余地なしに）つかされたりと、回転する洗濯機の中に放り込まれたかのような試練の連続っぷり。

今度は拳句、あかつきの聖母とかいう偉い人と対面したのち、花から私の世界のものを取り出さなきゃいけないらしい。しっかし、事前情報によると、その聖母様とやらはどうやらシンザの母親らしいけど、一体どんな人なのだろう。恐らく美形であるのには間違いないけど、このシンザのお母さんでしょ？うーん、全く想像つかない。

ていうか！私、こっちの世界では花人とやらでも、もといた世界では至って普通の貧乏乙女だったんですけど？わけの分からない状況に陥れば陥るほど、どんどんドツポにはまっっているような気がする。私はただ、もといた世界に帰りたいだけなのに！

思わず頭を抱えて座り込みたくなる衝動と戦っていると、森の木陰から、あかつきの聖母ご一行様の先頭とおぼしき人物の姿が見えた。

来た。

ぎゅっところぶしを握り締め、一体どんな人たちなのかと目を凝らし

「へ？」

辺りに響く間抜けな声が自分の口から漏れたものだと思つた後、気がつき、慌てて口を押さえる。が、もう遅い。

姿を現したのは一人の男。その後ろには金色のごてごてした装飾が目につく。派手な輿がしずしずと続く。お祭りで見たとあるあの御神輿をもつと西洋風にアレンジした感じ。

驚いたことに、その西洋御神輿を前後に分かれて担いでいるのは、二足歩行する猫科の大きな獣だ。

ゆっくりとこちらに運ばれるその輿の中にあかつきの聖母さまがいるのだろが、今は見えない。

輿は前方部を真っ白な毛皮の白豹、後方部を漆黒の毛皮の黒豹によって担がれている。俺仕事頑張っています的な、きりりとした表情の彼らの口には大きな銀色の鈴がしつかと啜えられていて、それが彼らが歩くたびに涼やかな音を立てていた。

「え、あ、まあ、ウサギも喋るくらいだし、そりゃ豹も歩くよ、ね……？」

メルヘンな光景再びに、しばしの混乱の後やっと思つたとき、かなり無理やりに自分を納得させる言葉を搾り出す。と、それまで先頭に立つて厳しい目で周囲を見回していた男が、いまやっと思つたかのように私に頭をめぐらせた。

私の声に眉を寄せて視線を合わせてきたその男は、迷いのない足取りで花の鎮座するこちらまで歩み寄ると、所在なげに立ちすくむ私にゆっくりと向き直った。

「え！？ええ！？あなたが……シンザ様の……？」

天然パーマっぽい、少し癖のある黒髪が頬にかかるのをかきあげて彼はささやいた。

値踏みするように、私の頭からつま先までをせわしなく行き来するその目は、黒とも青とも言いがたい不思議な光をたたえている。

何より不思議なのは、彼が上半身まっ裸であることだった。筋骨隆々の彫刻のような体だから、たとえば中年男のだぼついたお腹のように見えていて見苦しいものではないのだけど……なんていうか、こっ、目のやり場に困る。そして暑苦しい。もっと言うなら、むさくるしい。

だけどこの場にいる人たち全員が、彼が裸であることに驚いた様子も見せないところから察するに、どうやら彼の裸は珍しくもなんともないらしい。

「あなたが、シンザ様の？」

はい、二回言いましたよー、この人。

自分の裸は棚に上げて、私を非常識だといわんばかりにじろじろ見てくる男を私も負けじと見つめ返す。

「ガジャ、何をしている。己の主君に挨拶もなしに、俺の半身を品定めか？」

シンザの発した言葉に、ガジャと呼ばれた、その上半身裸男は肩を大きく跳ねさせて慌てて胸に手を当て、地に片足ついた。カガリたちや彼の仕草を見る限り、胸に手を当てて片足を折って跪くというのがこの世界の目上の者に対する一般的な敬意の込められた挨拶らしい。ガジャの仕草もよどみなく優美なものではあったのだが、いかんせん上半身裸なものだから、どうにも間抜けに見えてしまう。

「シンザ様！品定めなどめっそもない！俺はただ、うわさの花人どのが、いったいどんな方なのかと……」

「それを品定めというのだ。大体ガジャ、貴様、トーコ様の御

前であるぞ。服ぐらい着ろ」

カガリがふいに顔を上げ、苛立ちもあらわにささやいた。知り合
いであるのか、幾分くだけた口調の抗議に、私も心中で同意する。
しかし逆にガジヤは一系まとわぬ上半身をさらに誇示するように腰
に手を当てふんぞり返る。

「何を言うか、カガリ。この肉体だけが俺を飾る唯一の装飾だ。裸
こそ俺の正装だ。カガリもそんな暑苦しい制服など脱ぎ捨て……」
「黙れ」

カガリの氷の一言はこの暑っ苦しい男の口を凍らせるのにも瞬時
に威力を発揮して、一瞬落ちる静寂の中、私は確信していた。

ああ、どうしよう。この人、顔は結構男前なのに……バカなんだ

……

「あいかわらずだねえ、ガジヤは」

アドラメルクのおきれ返った声にも、私の哀れみにも似た視線に
気づかぬまま、気を取り直したガジヤは背後に振り返った。

「それでは、蓮猫たち。暁の聖母様をこちらへお連れしろ」

ガジヤの言葉に、白豹が大きく頷いた。りと鳴り渡る鈴の音の
なか、ゆるりと輿が前に進み、そと地面に置かれる。

輿の入り口に幾重にもかけられた薄い紗のカーテンが内側から差
し出された手によって、美しいドレープを描いた。白豹がその手を
取って、中の麗人が出てくるのを助けた。

その手の白さ、美しさに目を奪われたのも一瞬のこと。

現れた『あかつきの聖母』は、白い肢体を漆黒のシンプルなドレ

スで覆い、同じく漆黒の黒髪をゆるく結び上げた、気だるげな雰囲気
の美女だった。

彼女が降り立った瞬間、森全体が、上空から舞い降りた冷たい絹
のカーテンに覆われたような気がした。

木々の緑にさえぎられ、陽のあまり差さないこの場所がよりいっ
そう陰り、かわりに少し肌寒いような冷気を肌に感じ、思わず身を
すくめる。

わずかに潤んで私たちを見つめる紫色の瞳といい、出るべきとこ
ろは出ている体つきといい、この美女からにじみ出る色気には、な
るほど親子だなどある意味納得んだけど、シンザと、この目の前
の美女が親子だなんてとても思えない。

だってシンザの母親だというからにはそれなりに年を重ねている
はずなのに、この人……一体いくつなんだろう？

私の混乱をよそに、先ほどまでガジャに対し憤っていたカガリは
地に膝をついて頭を垂れ、微動だにしない。アドラメルクも今回ば
かりはおとなしい。

隣のシンザをそつと見上げると、一線をひいて、遠いところから
私たちを眺めているような表情をしていた。その、どこか心ここに
あらずな様子に違和感を覚え、まじまじと彼の顔を見つめてしま
うが、ふいに大きなため息に耳を打たれ視線を外す。見ると、聖母が
大きく肩で息をしていた。

「ここは……聖域でありながら、ひどく、大気の流れが混乱して乱
れているのですね」

大きな紫色の瞳を瞬くと、地面に降り立った彼女は口元に手をや
つて、よろよるとよろめいた。何だか……とつても苦しそうだ。貧
血かな？どうやら体調があまり優れない様子の聖母に、豹たちとム

ス力が慌てて駆け寄る。

「伝令でお聞き及びのことかと存じますが、先日水妖の上級妖に侵入されました、恐らくその妖魔の残り香が残っているでしょう…
：わしも出来る限りは清めたつもりなのですが、未熟ゆえ聖母様のお加減に障る気配を残してしまつたようです」

申し訳なさそうに深く頭を垂れるムスカに、聖母は苦しさを懸命にこらえるように、蒼白な面に苦悶をにじませつつも、けなげに微笑んでみせた。

「気にしないで、ムスカ。わたくしたちがずっと待ち望んでいた、炎王シンザの半身がやっとあらわれた喜びを思えばいくらでも耐えられます。そもそも、この体を押してまで駆けつけたのも献呈の儀のためだけではなく、一刻も早く炎王の半身殿にお会いしたいという気持ちでいたからなのです。これしきの瘴気、なんとかかしてみせます」

「白蓮猫は邪を退け、黒蓮猫は穢れを喰らうと聞いておりますが。聖母の使役する聖獣ですら、この禍々しさを被い清めるには力不足ですか」

シンザが辺りを見回し、鼻を鳴らすと、かすかな異臭を感じたかのように顔をしかめた。

「どうやら昨日の襲撃のせいで、聖母に何やら負担がかかっているようなのだが、正直私は何にも感じない。

「いまだ療養中の身であるあなたのお加減がさらに悪くならなければいいが」

「大丈夫です。すぐに慣れますから」

「お体を気遣えず、申し訳ない」

シンザが淡々と謝るが、本当に申し訳なく思っているのかどうかいまいち分からない。何より先ほどから、聖母と話するときシンザは目線を聖母に合わせようとはせず、遠い目で話しかけているような気がする。わざと、目を合わさないのだ。それは聖母も同じで、シンザが何か話してもそちらを見ようとはせずに、視線をあやふやに泳がしている。彼女の丁寧な言葉遣いですら、うつすらとした拒絶を表しているような気までしてきた。

喧嘩中の反抗期少年と母親じゃあるまいし、一体なんだって言うのだろう。こんなにあおやかで、はかなげなお母さん相手に、何をよそよしく振舞っているんだこの男は。

なんだかだんだんイライラしてきた。私の心の苛立ちが漏れたのか、険のある目つきに気づいたのか、シンザをひっぱたいてやりたい衝動に震える私に、ふいに聖母が振り向いた。

「挨拶が遅れました。わたくしは神妖ギイスカルにお仕えする暁の聖母、ネフェルロウザと申します。どうぞネフェルとお呼びくださいませ」

「え、うわ、あ、はい、私はタケガミ・トウコといいますっ！」

突然の美女の微笑みに思わずわたたと手を上にやったり下にやったりとわけの分からない行動をとってしまう私を、聖母　ネフェルさんは慈愛に満ちた、という言葉がびったり当てはまる温かい目で見つめてくる。なんか、この世界に来て初めて優しさに触れたような気がする。この優しい美人があああの男の母親……。

「半身殿には尊き次元より卑しき現世へおいでになって頂きました、心より感謝いたします。炎王が半身を捜し求めてからながきに渡り、どれほど皆あなたのことを待ちわびていたことか。一時はあきらめ、人間の中から妖力の強いものを選出し半身に据えようという動きま

であったのですが、花人を半身にという望みをあきらめずに探し続けていた甲斐がありました。いまや焔火宮は、花人の半身殿の現出に、この上なき喜びに包まれておりますのよ。よく探し出しましたね、炎王よ」

ねぎらうように頷くネフェルさんに、シンザはわざとらしいほどにさわやかに微笑むと、いきなり私の肩を掴んで引き寄せてきた。

「ちよつ、何すん」

「これはこう見えてなかなかの妖力の使い手でもあります。俺もこれほどの味方を得て妖山に赴けること、心強く感じております」

言いながら私の肩に力を込めてくるので、思い切り足を踏んづけてやった。なーにが味方よ！半ば強制的に半身とやらに引き込んだくせに！

文句が口をついて出かけるが、ネフェルさんが嬉しそうに笑っているから何もいえずに、とりあえず私も作り笑いだけ浮かべておく。

「前炎王もきつとご存命であればお喜びしたるうに、それだけが残念ですね」

ネフェルさんの言葉に、私の肩を掴むシンザの手の力が急に強まったような気がして、痛さに顔をしかめつつ彼を見上げる。

「……………」

幾分顔色が悪いように見えるのは気のせいだろうか？なぜか眉を寄せて苦しげに頷いているシンザにまたまた違和感を感じてしまう。重苦しい雰囲気気づいてるのは私だけなのか、カガリたちはみんな方膝をついたまま私たちを見守っているのだけど……………

「シンザ？」

声をかけると、シンザははっと目を瞬き、少し慌てた様子で私の肩から手を離れた。もうすっかり先ほどまでのどこか追い詰められたような焦りは掻き消え、いつもどおりの不遜で冷酷な顔つきに戻っている。一体どうしたんだろう。ネフェルさんに会ってから、変な感じだなあ。

「聖母も、まだ瘴気の残るこのような場所に長くいては体に障る。ムスカ、今すぐにも献呈の儀を始めるぞ」

いきなりの宣告に予測はしていたものの、心臓が跳ね上がった。

「そうですね。そろそろ始めましょう」

ムスカも重々しく宣言する。

緊張した面持ちの中、シンザは何処吹く風、アドラメルクに至っては「どうせ何も出せっこないし、茶番だよな」などとつぶやいていたのだった……。

20 神妖ギイスカルも御照覧あれ。

献呈の儀。

カガリに聞いたところによると、花の中から私の世界のものを取り出さなくてはいけないそうなの。

チャレンジできるのは一回だけで、花人の力量に応じたものが取り出せる。ちなみにチャンスは一度だけ。異世界と通じた花は、その後再び花をつけるまで、冬眠のような状態になってしまうらしい。

って、無理無理。出来るわけない。

「あのお、私みたいなただの一般庶民がですね、そんな大層なマネできるわけないと思うのですが。だいたい何にもないところから何かを取り出すなんてことができるのはドラえ……」

「その高貴なお口で何をおっしゃるのかしら。半身様は尊き血を持つだけでなく、稚気もお持ちですね」

私の発言を軽くスルーして、ネフェルさんは口元を何処からか取り出した扇で押さえてくすくすと笑っている。いやいや、冗談とかじゃなく本当に無理なんですけど！

蒼白になる私をよそに、白豹と黒豹がいそいそと輿の中からじゅうたんとかクッションを取り出して、丁度花の正面にくるようになら配置した。するとそこには即席の観覧席ができあがった。ネフェルさんはクッションにもたれかかり、ゆったりとくつろぎはじめる。

おい、なんか完全鑑賞体勢に入っちゃってますけどお！

うるたえる私に微笑んでくれたのだが、そんなもので「よーしじやあ頑張って花の中から何かすごいもの出しちゃおうかなー」なん

てなるわけもなく。

「トウコ様、頑張ってください」

振り向けば、力強く頷いてくれるカガリと目が合うが、これから彼女を落胆させてしまうだろう結果を予想して余計落ち込んでしまう。その隣で早く行けとばかりにしつと手をふってくるアドラメルクに憎まれ口の一つでも叩いてやりたいところなのだが、不安で体が震えてきてそれどころじゃない。

「ちなみに今までこの我が大陸で半身となり神妖を継いだ花人は5人。過去には破滅の剣やら、大洪水やらを引き出した花人もいたそうだ。程度の違いはあれども彼女たちの引き出したものは多大なる繁栄と強大な力を我が大陸にもたらした、とはお前も知っていることだとは思うが」

シンザがまじめな顔で私の肩を励ますように叩くが、その金色の瞳の奥に宿る意地の悪い笑みを私は見逃さなかった。こいつ、絶対面白がっている！

「さらに異世界より使わされたお前なら、さぞかし役に立つものを取り出してくれるのだろうか」

「つく……なにさりげなくハードルあげてんのよ」

「面白いものを出せれば……そうだな、褒美に何か願いを叶えてやってもいいぞ」

願いつて……一番の望みは日本に帰ること、そして二番目はこの意地悪男とのコンビ解消だが、どうやったら叶うのだろうか。何だか途方もない願い事に思える。日本にいたころにもし願い事は？とたずねられたら「スーパーで残金を気にせず食材を買いまくりたい

！」「お肉ごろごろカレーを毎日食べたい！」とか即答していただるうに、今は警沢は言わないからだ、日本に帰ればそれでいいなんて、健気すぎて我ながら泣けてくる。

思わず腕組みして考え込みそうになる私の耳元に、ふいにシンザの顔が寄ってきて。

「まあ無理だろうが、とりあえず落ち着け。集中して、お前がもっとも必要としているものを強く念じながらやってみる」

吐息と共に差し出されたアドバイスに、思わず身を引いてこくこくと頷くしか出来なかった。

当の本人はしれっとしているが、この歩く18禁男はどうやら意図せずして色気のある行動にたまに出るときがあるから困る。本当に迷惑な話だ。

ため息をついて、もう一度後ろを振り返る。

聖母の期待に満ちたまなざし、カガリの力強い励ましの視線、アドラメルクのおくび、ガジヤさんの裸。

ああああ、集中できないいいい！服着ろよおお！

もういいや。

とつとと終わらせて、「私は無能なんデース」って言って、早く開放してもらおうそうしよう。

もう一度、ため息。それから今度は深呼吸。

「始めます」

なかばやけくそ気味になったせいも足取りも荒く花に近寄る。

眼前には、私の胸の高さくらいの高さで大きく花びらを広げる不思議な花。

改めてよく見ると、濃緑の茎やツタの中には銀色のラメのようなきらきらした光がゆっくりと上下にうごめいているのが見えて、こ

れがただの植物ではなく「生き物」なんだってことが実感できた。私、こんなところからひよっこり出てきたのかあ。そりゃまあ、規格外だな。まあ思いつきり一般人ですが。

そりりと一步踏み出し、花びらの中央　胚珠に腕を伸ばし差し入れる。

何だか花が痛がつてるような気がして思わず顔をしかめそうになるのも一瞬のこと。

案外すんなりと私の手首は花の中に埋まった。ついで伝わる、ひんやりしたゼリーのような感触。

ぎゅっと握り締めたこぶしを、そろそろと開く。握る。開く。

「……………えーと……………」

何も出てこない。何も掴めない。

どうしたらいいんですかこれ。

助けを求めるように背後に振り返ると、扇を握り締め、食い入るような表情で身を乗り出している聖母と目が合った。

真剣なまなざしで固唾を呑む彼女に、「なーんもでてこないんですけどー」とか言つて舌を出すなんて……………出来るわけがない。

どうしたらいいんだ!?

そうだ、とりあえず、落ち着こう。

また花のほうに向き直り、深呼吸。

大きく方で息を吸って、吐いて、もう一度胚珠に沈むこぶしをぎゅっと握り締めた。

本当に何か取り出せるか?なんて疑っている場合じゃない。

非現実的か現実的かで言ったら、もうすでに、私が日本からこんなところに来てしまったというだけで十分非現実的だ。いまさら「ありえない」ことなんていったい何があるというのだ。

今は、信じてみよう。花の力を。シンザのアドバイスを。

私が一番必要としているものは?

目を閉じ、頭に地球　日本を思い浮かべる。
春風に乱舞する桜の花びら。川沿いを新緑が線路のように伸びて
沿う、夏の土手。秋には炎のように色づく木々に、アスファルトに
降り積もる雪。

身近な四季を彩るのは、いつもそばにいてくれる家族の姿だ。
ゆきお。れんたろう。お母さん。

もうあなたたちの笑い声を、何日聞いていないのだろうか？

帰りたい。大切な人がいる場所。私の故郷、日本。
目頭が思わず熱くなる。

と、同時に。

突然、花に突っ込んだ右手が内側から強い力で引つ張られた。そ
の力は弱まることなくどんどん強さを増していき

「……繋がった?!」

半ば裏返ったような、アドラメルクの声が聞こえたが今はいち
ち反応してられない。

「いたたたたた!」

ものすごい力で手が花に吸い込まれている!脱臼する脱臼する!
なんだこれ超怖いんですけど!

焦りのあまり空いてるほうの左手でバシバシと葉っぱを叩きながら、
私は引き込まれそうになる右手を何とか気力と体重でとどめていた。

「痛い……いたいよおお」

いまや痛みは引つ張る力に加え、指を全部互い違いの方向に折ら
れているようなめちゃくちゃな痛みに発展していた。なまじ引つ張
っているものの正体が見えない分、余計に恐怖が募って、知らず涙

がごぼれ落ちる。

「やりおったか！」

私がこんなに苦しんでいるというのに、ムスカは呑気に喜色の滲むささやき声をもらしている。当然振り返る余裕もない。アドラムクの「嘘だろ……」という呆然としたつぶやきにも答えられず、痛みあまり飛び出しそうになる悲鳴をどうにか抑える。

「トーコ！お前の望み、お前が今必要としているものだけを考える！」

いつの間になっていたのだろう、すぐそばにシンザがいて、私の左手を握っていた。

「欲しいもの……私の大事なもの……って考えられるかこんな時にい！」

「何でもいいからとにかく何か考えろ、バカ！引き寄せてしまえば楽になるはずだ！」

珍しくシンザが焦燥を滲ませているが、ものめずらしさを堪能する暇もなく痛みに襲われ、ただただ首をふるしか出来ない。

「炎山におわす神妖ギイスカルも御照覧あれ！」

背後で聖母の美しい声が聞こえた。少し興奮を滲ませて震えたその声は、しかし失われていないその威厳でもってざわついた気配を沈静させる。

「継承者炎王シンザの半身にして、天花より来たりし異国の姫よ！

さあ、引き寄せなさい、異国の稀品を！」

朗々とした声が呪文のように私を打ち据え

ダイジナモノ……！

ふいに右手に伝わる硬い感触。

指先にわずか触れたそれを、何も考えず、無我夢中で引き寄せた。

「とつたあああ！」

思い切り足に力を込める。全体重を後ろにかけた反動をそのまま、掴み取ったそれを、思いつきり、引っ張り！

出す！

先ほどまでの怒涛の痛みは嘘のように消え去り、嵐の後のような沈黙が落ちる。混乱と焦燥がめまぐるしく脳裏を駆け巡った後遺症か、頭のなかでがんがんと音が鳴り響いている中、よろよると私は右手を掲げ、握り締められたものを見つめた。

見慣れた赤い縮緬の布地。

お母さんがつけてくれた、間抜けな顔のウサギの刺繍。

振るとちゃりんとかすかに音がする。

………うん。

大事だ。確かに、これ、私、死ぬほど大事。

たっぷりため息20回分の沈黙。

「何だ……それは？」

誰かの発した声に、搾り出すような声で、よじやく私は答えた。

「がま口……財布……」

と。

消えてしまいたい。

20 神妖ギィスカルも御照覧あれ。(後書き)

登場人物が複数いるシーンを書くと、必ず空気のキャラが出てきてしまうのですがどうしたらいいのかよく分かりません……。

次の話で幕間を書き、とりあえず一部が完了します。折り返し地点な感じです。

ここまでお時間を割いて読んでくださった方、見捨てずにいてくださっている皆様に心よりの感謝を申し上げます。

本当にありがとうございます。あと、すみません。なんか、色々、すみません。。。

21 幕間 星の砂漠に降る秘密(1) (前書き)

長くなったので分けました。。。
この幕間で、一部が完結します。

21 幕間 星の砂漠に降る秘密(1)

「ぐ……食べすぎたあ……」

はちきれそうな胃を押さえつつ、用意された寢床に倒れこむ。

この世界に来てしまっただけからというもの、一度たりとも休まることのなかった心と体を、1人つきりになれた充足感がじわじわと癒していき、まぶたが重りをつけられたかのように重くなる。

だけど、安心して眠りにつくにはあまりにもいるいるなことがありすぎた。

「そうとう怒ってたな、聖母さん……」

頭を抱えて、羞恥心に身を任せごろごろと敷布の上を転がる。

聖母さんの蒼白な顔の裏には、怒りと落胆が垣間見えてまともに言葉を交わせなかったが、最後に視線を合わせたときには激しく睨まれていたような気がする。

何もあんなに怒らなくてもいいのになー。

取り出した財布(8円入り)を献呈しようとしたときの拒否の言葉、「ご自分でお持ちになられては？」が脳裏にこだまして、いたたまれない気持ちになりながら、今は首から下げた財布を握り締めた。

しかしよくよく考えれば、もともとこれは私の財布だ、他人にくれてやるいわれは全くないのだ。拒絶されてむしろ良かったくらいだ、うん。

まあ、つらつらと考えても仕方がないか。私だって出そうと思っ
てあんなものを出したわけじゃないんだしな！

シンザの隠しきれていない押し殺した笑い声と、聖母の献呈物拒

否という異例の事態で幕を閉じた、呪わしいあの儀式の翌日。

一足先に宮殿へと帰還してゆく聖母様ご一行を見送ったのち、天花が人目に触れないよう結界を張りなおしたり、シンザのくれた指輪に花の妖力をチャージしなおしたりと細々とした準備や後始末を終えて、私たちも宮殿へむけて旅立った。

だけど、さすが異世界。よもや私まであの鷹に乗る羽目になるとは思ってもいなかった……。

ため息をつき、長時間座っていたせいで痛むお尻をなでさする。

目を閉じると、人生で初、巨大生物・大鷹に乗っての移動がまぶたに裏によみがえる。一度も飛行機に乗ったことがないというのに、鷹には乗ってしまったこの人生、誰か軌道修正してください……。めまぐるしく過ぎ行く眼下の景色を思い出しただけで鳥肌が立つ。もう二度と乗りたくない。だけど、明日の早朝にはまた乗らなければならぬのだ。

騎乗中、絶えず絶叫するという画期的な方法で恐怖をやり過ごしていたところ、同乗者のシンザが「これ以上一緒に乗っていたら突き落としてしまいそうだ」と発言したために、私たちは急遽中間地点で降り立って休憩を挟むこととなった。

一刻も早く彼らの本拠地である宮殿に帰りたがっていたアドラメルクはぶつくさ文句を言っていたが、カガリとムスカが私の体調を気遣ってくれたおかげで、結局今はこうして砂漠のど真ん中で個別にテントを張って休憩中というわけだ。

テントは、子供が両手を広げたくらいの大きさの羽を絹に一枚一枚貼って作られた布で出来ていて、日中の砂漠地帯の容赦ない太陽光線も緩和するし、夜の急激な冷え込みからも守ってくれるとカガリが誇らしげに教えてくれた。何でもこの大陸の特産物らしい。

ごろごろと転げまわったせいで膝までずり落ちくしゃくしゃになっているブランケットを顎下まで引つ張りあげる。

明日は早いんだし、もう寝よう。寝てしまおう。

そう思って目を閉じるのだけだ。

「……眠れない……」

まぶたは重いのに、変に神経が興奮しているのか一向に眠くならない。

「……そういえば、砂漠、見るの初めてだな」

エジプトやゴビ砂漠など地理の教科書では見たことはあるけど。

「散歩……してみようかな」

そつとつぶやいてみる。

口に出すと、その考えは眠気を呼び寄せるまでの時間稼ぎとしても、うつつつけの案に思えた。

大体、ここしばらくは歩くことさえ叶わずに花の上に拘束されっぱなしだったのだ。

うん、散歩したい。

そつしようそつしよう。

考えを決めてしまうと、私はカガリたちに見つからないよう、なるべく音を立てないようにテントから抜け出したのだった。

「うわああああ……」

テントからそつと出て、眼前に飛び込んできた景色に思わず声を上げてしまった。

カガリたちのテントも近くにあつて、聞こえたらまずいとは思ったが、感嘆のため息を殺すことが出来ずに呆然と景色に魅入る。

一面に、銀の海原が横たわっていた。

昼間見たときは果てなく続く広大な黄土色の砂漠がそこに広がっていたというのに。

今、月光に照らされた砂漠の砂は黄土色から銀色へと色を変え、光を放ちながら漣のように揺らめいている。

まるで一人、巨大な湖の水面にたたずんでいるような錯覚さえ覚えて、もう一度感嘆のため息を漏らした。

「……きれい……」

どうやらこの砂漠の砂は、一粒一粒が光を反射する性質を持っているらしい。それらが月光を浴び、わずかな風に銀色の光を放ちながらきらきらと一斉にきらめいて応える様はまるで、月夜に照らされる凧いだ大海原そのものだった。

もっと遠くまで見通してみたい。

ふと見ると少し向こう側にやや小高い丘をなす砂丘があって、半ば無意識のうちにそこに向かって歩き出していた。

足をかけるたびにさらさらと崩れ落ちて靴底を沈めてくる砂に苦勞しつつも、何とかその小高い砂丘を登りきって、眼前を見渡すと、先ほどよりもさらに視界が開けた。

もう何度目かになるか分からない感嘆のため息をつきながら、心行くまで夢幻の世界のような景色を堪能する。

人は見たことのない美しい景色に遭遇すると恐怖すら感じると、以前何かのドキュメンタリー番組で探検家が言っていたが、不思議と怖くはなかった。

そつと頭上を見上げると、紺碧の天空にかかる月が目飛び込んでくる。いつかと違って、月は一つだけで、地球で見るものよりも一回り大きな満月だ。今頃地球のどこかで、この同じ月を見ている人はいるだろうか。感傷的な疑問に、ふと気づいて自嘲する。

「そもそも、この月と、私の知っている月とが同じものかさえ怪し

いか……」

ここは異世界、というよりは異星なのだろうか。それとも全くの異次元なのか。そもそも、排水溝に吸い込まれて花から生まれるなんてわけの分からない方法でやってきて、どうやってもこの世界に帰ればいいのか……

ぐるぐると堂々巡りをし始めた考えに、涙腺を刺激されそうになつて、ぎゅっと目を閉じる。

腕を目に押し当て、悲しみの衝動をどうにかやりすこし、ぱたん。

と後ろに倒れこんでみた。

「いてっ！」

砂だから倒れても痛くないと思ったけど、後頭部を襲った意外な衝撃に思わず声を漏らしてしまった。

「何をやってるんだ、お前は」

ふいに耳に届いた声に慌てて身を起こす暇もなく、視界が無遠慮に覗き込んでくる人の影で塞がれる。

「……相変わらず気配のないことで。存在感ないって子供のころいじめられなかった？」

「出来損ないの半身が、この期に及んで脱走でもするようなそぶりを見せたら、きつく睨け直してやろうと気配を消して機会を伺っていただけだ」

本気なのか冗談なのか分からない笑顔を浮かべながら手を差し伸べてくる男　シンザの顔と手を交互に見つめ、ため息をついて、

手を取った。この男の横で寝そべったままというのは何だか危険を感じる。なにせ面白がって人をいじくる趣味と前科があるからな。引き起こしてもらった手を離し、よいしょ、と砂の上に三角座りをする、シンザもとなりにとかりと腰を下ろした。

え、なに。居座る気？

「ちょっと。私が先に見つけた絶景ポイントなんだけど。景色楽しむなら場所かえなさいよ」

「俺の領地で何を言う」

「あんたは自分の領地なら、そこに住む人の家のトイレも自分の領地だって言うわけ？」

ついつい口調がきつくなり了見の狭いことを言い出してしまふのは、献上の儀とやらで私の出したものを見たのち、たつぷり五分間は笑い続けて震えていたこの男の背中が脳裏にちらつくからだ。

「……まあ、俺が欲しければ言うかもしれない」

私も私だけど、こいつも頑固な奴だな！どこの世界に自国に住む住民のトイレに領土権を主張する王様がいるんだよ！

あきれて横を向くと、意外にもやわらかい微笑を浮かべてこちらを見ていたシンザと目が合う。

大人がぎゃーぎゃーわめく子供を苦笑しつつ見ているような、すかした余裕っぷりになんとなく気まずくなって慌てて前に向き直った。

そのまま黙って、眼前に広がる銀の砂漠を見つめる。

「美しいだろう」

シンザの言葉よりも、その言葉に乗せられた、弾むような響きに

意外さを感じ、せつかくそらした視線を再びシンザに向けてしまう。

「西の大陸の北部は聖域の森、中部は砂漠地帯、山を越えた東部には俺の住む宮殿がある。東部はいくつもの交易国で成り立ち、それぞれ特色を持つて栄えているが、住みやすい東部よりも俺は未開の地であるここが好きだ。ここは、その昔は肥沃な大地を誇っていたそうだが、花人が最強の武器を欲した半身に献上してしまった破滅の剣により、一瞬で砂漠に変えられてしまったそうだ。この砂は一粒一粒にその時散った剣の妖力を宿している　だからこそ、こんなに美しい。「力」の結晶が宿る地だ」

いつもよりも饒舌なシンザは珍しいが、しかし血なまぐさい話の内容には賛同できない。

「物騒な話ねー」

「物騒か？この事件により、人間は国同士で争うことをやめたのだぞ」

「じゃあ、この世界には戦争つてものがないわけ？」

「今はな。かつてはこの大陸でも多くの人間同士が争っていたそうだ。だが今は、神妖をめぐる争奪だけが争いの理由となりうる。各大陸の統治者だけが血を流せばよい。お前の世界には争いはないのか？」

ふとシンザが首をかしげて聞いてくる。

「あるよ。いろんな国が、いろんな理由で争つてる。肌の色や、宗教や、人種の違い　本当に、色々」

言いながら、なんだか身内の恥をさらしているような恥ずかしさを感じてしまう。

「シユウキヨウとは何だ」

そこからですか。異文化交流ってレベルじゃないぞ。

「ええと……信じる神様の流派、かな」

「ほお。お前の世界にも神妖のような存在がいるのか？その神様とやらが国を治めているのか？」

「んなわけないでしょ。それじゃ地球がファンタジーの世界だよ。

シンザの住むこの世界には、神さまは実在して実際に妖怪の世界を統治してるみたいだけど。私の世界にはたぶん神様は実在しているかどうかは……わからない。信じる人の心の中にいるのかな」

「お前の世界は変わっているな。いるか、いないか分からないものを巡って争い起きるのか？」

「うん……まあ、神様を巡って、っていうより、権力者が宗教を戦争の口実にしているだけなんだけど」

「奇妙な世界だ」

信じられない、というように頭を振るシンザに、文化の違いというか、世界の違いというものをまざまざと感じてしまう。まあシンザの言わんとしていることも分からなくもないけど。

私にしてみたらこっちの世界のほうが不思議な世界だ。

神様はいるかないかあやふやなものではなく、確実に「在る」世界。

国同士の戦争もなく、確実に存在する神様をめぐるって、選ばれた人たちだけが戦うシステム。

私たちは神様の存在を「信じる」からこそ、奇跡が起こったときには神様に感謝したり、人智を超えた存在を意識したりするわけだけど。この世界では奇跡や運命なんて言葉はないのかもしれない。

砂の海を見つめてぼんやり黙り込む私の耳に、ふいに、くっとい

う笑い声が飛び込んできた。

「お前は本当に 異世界の人間なのだな」

そう言うシンザの視線は、私の胸元で揺れているがま口財布に注がれていて、途端に今こいつが何を思い出して笑っているのかが分かり、思わず財布を襟元からシャツの中に押し込んで隠す。

隠したところでこいつの忌まわしい記憶を隠せるはずもなく、シンザの肩が笑いを宿して大きく揺れた。

「お前、見たか？あの時の、あの女の顔を」

あの女、という単語とそれが意味する人物が中々結びつかず、しばし眉根を寄せて考え込む私にかまうことなくシンザは満足げに目を細めた。

しかしこいつ、なんか今日はやたらと機嫌がいいな。気持ち悪い。一体どうしたんだろう。

訝しがっている私をよそに、シンザは自分の懐に手を突っ込むと、そこからおもむろに液体の入った小瓶を取り出す。そのままコルク栓を器用に啜え取り、ぐいっと中身をあおった。

一気に中の液体は半分に減り、満足げな吐息が彼の口からもれる。つていうか……

「酒くさっ！さっきからなんかよく喋ると思ったら……飲んだくれてたの？」

「アゾイの2000年もの、と言ってもお前に価値は分らないか。まあ、うまい酒だぞ。お前も飲むか？ほら飲めよ」

上機嫌な彼はぐいぐい人の口元に酒瓶を押し付けてきた。

酒癖わりいな！居酒屋でバイトしていたから酔っ払いの扱いは心

得ているけど。こういうやからは断ったりすると余計意地になって酒をすすめてきたりするものだ。

とりあえず機嫌を損ねないよう、一口だけ口に含んでみる。フルーツのような爽やかな酸味と、濃厚な甘みが舌の上に広がった。

予想外の美味しさにへえ、いけるじゃん、と思ったのもつかの間、脳天を貫く熱い感覚に襲われて咳き込む。

「めつつつつつちやくちや、きついんですけど!!」

「俺はまだ3本しか飲んでないが……弱いな、お前」

3本……このアルコール度数の高そうな代物をそれだけ飲んで、やっと上機嫌になるくらいの酔い方ですか。とりあえず私はこれ以上飲まないほうがよさそうだ。

「これは、祝杯だ」

「祝杯？何の？」

私の質問には答えず、シンザは再び瓶をあおった。あーあーあー……二日酔いになっても、知らないからねー。

「あの女　聖母は、おそらくお前が異世界よりあらわれた花人だと知っていたのだろう。だからこそ期待していたはずだ。それこそ、破滅の剣のようなものを。それがあんなものを出されたとあっては落胆するのも無理はない」

「あの女……って、自分のお母さんなんですよ？そんな言い方やめなさいよ」

「母親というか　血は繋がっていない。あの女は父上が神妖を得るために選んで連れてきた半身で　半身といってもお前のような花人ではなく、妖力の強さで選定されただけの通常人だ。俺の本当

の母親は、もう思い出せないくらい昔に死んだ」
「……」

咄嗟に言葉が出ずにシンザの顔を見つめる。

月光の照らす彼の横顔は、別に悲しげなわけでも落ち込んでいないわけでもなく、相変わらず機嫌よさそうに紅潮している。

「病に倒れた父が俺に神妖を継承させるまでは、あの女が父に代わり大陸を取り仕切っていたんだが……まあ、昔の話はいい」

ふいに言葉を切り、シンザは小首をかしげて私の顔をじっと見つめてきた。

酒のせいでやや潤み、異様に色っぽさを増してこちらを捕らえる黄金の瞳に、思わず先日嫌な出来事を思い出し、知らず知らずのうちには上体を傾けて距離をとった。

「正直、俺も少しは期待していた。お前が大層なものを取り出すことをな。だが、お前の出したものと、あの女の顔を見たら　少々、どうでもよくなった」

私の確保したたささやかなパーソナルスペースを、無常にくいつと踏み越えて、シンザの体がちやうににじり寄ってくる。何か、嫌な予感がする。今なら、肉食獣に狙われた草食動物の気持ちがよく分かる。

「確か、俺を満足させるようなものが出せたら、何か褒美をやると言ったよな？」

何がいい？とは声に出さずに、目で語るように見つめられ、ふるふると首を振るしか出来ない。いらぬいらぬ。なーんにも、い

りません！タダより高いものはない！

私の必死の拒絶をもともせず、シンザは一人頷いた。

「そうだ。お前だけに 俺の真実を教えてやるっ」

立ち上がって逃げ出そうとするが、それより先に手首をつかまれる。

「俺は……」

振り払って逃げ出せなかったのは、彼の顔が先ほどまでとは違い、やけに切羽詰っていて、どこか泣きそうな表情だったからだ。思わず体を固くする私に、彼はささやいた。

「 神妖を継承していない。詳しく言うなら、従えていない」と。

一瞬、言葉の意味が分からずに黙り込む。

……え？

……えええ？

だって。説明してたじゃん。

めっちゃくちや偉そうに、『俺は西の大陸の統治者だ』って。

自分はすでに西の神妖を手中にしているから、東の神妖と契約してしまえば元の世界に帰る方法も見つかるかもしれない、とかなんとか。

あれ、はったりですか？

「神妖と契約したものは常に神妖を使役できる。現に父上の側には常に神妖がいた。だが、今も昔も、神妖ギイスカルは俺の呼び声には応えたことがない」

シンザは私を見据えたまま、言葉を切り、ひとしきりのどで笑う。先ほどまでの機嫌の良い声でなく、どこか陰鬱なその笑い声に胸が締め付けられるように痛くなる。

「そもそも、継承の儀式ののち、世界から神妖ギイスカルの気配が消えてしまったのだ。炎山は神妖の失踪により秩序を失い、炎山の妖魔どもも、俺が何らかの方法で神妖ギイスカルを殺したか、封印したに違いないと、俺を逆恨みしている」

搾り出すようなささやき声に、いつか、あの炎山のウサギ君たちの言葉が重なった。

あいつはとんだペテン師。

だまされるな。

きつと、彼らはシンザが神妖を継承していないことを知っていたのだろう。

あの警告は本当だったんだ。

唇を噛む私の目に、シンザの指に嵌められた紅玉の指輪がつつる。

「じゃあ、その指輪は……」

「これは、契約の指輪ではない。父上は俺を神妖継承者に値せずと踏み、偽の指輪でお茶を濁したのだろう」

「そんな……！じゃあ、シンザは無条件で炎山を統治しているんじゃないかって……」

「力でもって、ねじ伏せている」

まあ、それだけの力が俺にはあるからな、と笑う彼はどこか自虐的だ。

「復讐にとち狂った妖魔を返り討ちにし、歯向かう炎山の住人は全て抹殺し、表向きは炎山を統治しているように見せかけている。炎山は神妖がいたから統治され秩序を守っていたのだ。俺が力で支配しなければ奴らは人間界に溢れ出し、好き勝手な振る舞いをはじめただろう」

「それって、ものすごく……不毛なことよね。終わりが無い戦いつていうか」

「ああ。だが、仕方ない。それに、俺が炎山を統治できているふりをしなければ、人間界の方にも影響が出てしまうだろう。俺が神妖にも逃げられた偽の大陸統治者だと民衆に嗅ぎ付けられれば、大陸の秩序も乱れ、最悪、国間での争いも再び起きるかもしれない」

指輪の嵌められた手を月の光に掲げながら、シンザは指輪の発する紅い光を忌々しげに眺めた。

なんてことだ。つまり、シンザはその手で、今にも決壊しようとしている巨大な崖を、たった一人で押しとどめ、戦っているのだ。彼を統治者と信じる人々を守るため、存在しない神妖を従えているふりをして。

偽りの、玉座。

……ん？何か、引つかかる。

ふいに脳裏にひらめいた言葉に、記憶を刺激されたのも一瞬のこと。シンザの顔が近づき、耳元に寄せられる。

「これを打ち明けたのは……トーコ、お前が初めてだ」

聖母も五神官のだれも知らない真実だ、とささやくシンザに何と云っていいか分からない。

彼が異様に力に執着する理由が分かってしまったから。

力なきものを軽視する理由も、力を追い続けなければならぬ理由も、分かってしまい、だからこそ、そのあまりの悲壮さに、何と云っていいか分からない。

……今も、戦っていると言うのか。孤独の中で。力だけを頼りに。その威風堂々としたたたずまいに、実はのしかかっているであろう重責を想像し、あまりの苦しさに胸を押さえる。

威張りちらし、力を求めているだけの暴力男のはずが。なぜだろう。

今は孤独な子供に見えてしまっただけの暴力男のはずが。

「ある事件がきっかけで、父上は、俺を信用してくれなくなった…

…継承の指輪を頂いたときは、これでやっと認められたと思ったんだが……。やはり、最後の時まで信用していなかったらしい」

口調こそはつきりして何気ないように聞こえたが、シンザの胸の中で渦巻いているだろう血の滲むような悲しみが、なぜか痛いほど分かった。

「俺のしていることは正しいことなのか、分からない。俺に信頼を寄せる全ての者を欺き、齒向かう者を斬り捨て　だからこそ、力の強い半身が必要だった　だがそれでも俺は、俺の住む大陸を守りたい、父上がどう俺を評価しようとも……！」

「もういい、シンザ」

しんとした砂漠に、シンザの言葉が涙のように落ちては降り積もっているような気がした。

決して、シンザは泣いてはいなかったんだけど。

何だかこれ以上聞いているのが辛くて、そっと、シンザの膝に手を置いた。

いつも感情が見えなくて、薄い氷で覆われているようだった雰囲気は、いつの間にか氷解しているような気がする。でなければ、こんなに気安触れられない。これがお酒の効果なのか、幻想的な砂漠の見せる奇跡なのかは分からないまま、シンザの目を真正面から覗き込んだ。

「シンザ、あなたは立派よ　私も隠していたことがあるから、聞いて」

自分でも良く分からない衝動に動かされて、口を開く。

「私、元の世界に早く帰りたい。シンザが神妖を継承していないの

なら、これですます私が帰る手立て探しは困難になったわけだけど、それでも帰りたいたい。だけど……」

一度言葉を切り、そつと目を伏せた。シンザの膝に置く手に力が入り、自分のものじゃないみたいに震えている。

「私、一瞬だけでも、花の上でこう思ったんだ……辛い現実から逃げられて、よかったって」

一気に言い切ると、胸がすんと軽くなった気がした。よし、この勢いのまま言い切ってしまう。

「さいつてい！私のことを頼る弟や、面倒をみなきやいけないお母さん。食べていくためには大学もやりたいこともみんなあきらめて、一日中お金のことだけを考える。そんな生活が嫌で、いつの間にか、大事な弟たちのことですら、重荷に感じていたんだって、こっちに来て初めて気づいたの」

そう。異世界に来てしまったんだって気づいたとき、帰りたいたいってわめきながらも、私は心のどこかで、それほどショックを受けていなかった。

辛い現実から逃れられて、心の一部が、良かった、ってささやく声を聞いてしまったのだ。

「責任逃れできて喜んでた私って、本当に最悪。でも、あんたは立派よ。自分にのしかかってくる責任を分かかって、全部一人で背負い込んで、それでも虚勢張って嘘を突き通して」

私の言葉に、シンザの目が大きく見開かれる。射すくめるような強いまなざしに、いつもなら思わず目をそらしてしまうはずなのだ

が、今のシンザはなぜか少しも怖くない。

「トロー……」

「ほんとあんたって、ドSで意地悪で根性曲がってて嫌味でどうしようもない奴だけど……たいしたもんだわ」

「……………ほおお？」

シンザの口元が、ひくり、と動いた。ちょっと言い過ぎただろうか。笑いを無理やり閉じ込めるように変に曲げられたその口はいつもより少し時間をかけて、やっといつもの皮肉な微笑を形作る。つていうか、顔、赤いなあ。飲みすぎだっつーの。

「それだけか？」

「え？」

「密談には密談を返す。この大陸の外交政治の基本を良く知っているなと感心したが……内容がそれでは秘密の等価交換にはならないな」

「秘密の、とうかこうかん？」

おうむ返しにつぶやく私が、琥珀の瞳に間抜け面でうつっている。

「秘密には 秘密を返すのがこの大陸の礼儀だ」

シンザの手が動いて、私の髪をなでおろす。唐突な行動に反応が遅れ、次いで、先ほどまで感じていた危険信号が心中に再び鳴り始めた。

しまった。

そういえばこいつ、ただいま絶賛酔っ払いちゅうだったー！アルコールが体内に及ぼす興奮作用は、例えば正常な思考を奪ったり、判断力を失わせたりとさまざまだ。酔っ払ったあげく男の警

官に痴漢をして御用となつた痴漢犯だつているくらいだ。

「そんな秘密より、お前が俺に教えられることは他にも、もっとあるだろう?」

何?とはろくな答えが返つてこなさそうに聞き返せない。

シンザの膝の上に手を置きっぱなしだったことを思い出し、あわあわと手を引つ込める私を、シンザは先ほどまでの弱弱しさはどこへやら、面白そうにじろじろ眺めた。うへえ。居心地が悪い。

よし。帰ろう。

眠れるかどうか分からないが、テントに帰ろう!

一瞬で考えをまとめ、すばやく立ち上がる……つもりが、どうやらそれよりも早く動いたシンザの行動により阻害されてしまう。

軽く肩を押され、そのまま後方に倒れてしまった。後頭部を襲うはずの衝撃がやってこないのは、どうやらシンザの手が軽く頭を支えてくれているかららしい。いや、そういう気遣いいらぬし。人を起き上がりこぼしのように倒すな!

紺碧の夜空が視界いっぱいに広がり、こんなこと、異世界渡航初日にあつたような……と軽い既視感を覚えかけ、そんな場合じゃないと慌てて頭をふつた。流れるような無駄のない動きで覆いかぶさつてくるシンザの胸を、目を覚ませ! 酔っ払い! とばかりにこぶしで叩くが、軽く鼻で笑われただけだった。

「例えば」

後頭部からそつと外された手が、ゆつくりと首筋をなであげた。金の瞳に射すくめられ、口の中の水分が急速にうばわれていく。

「ここをこつすれば……どうなる?」

パジャマ代わりに渡された、膝下まで丈のあるブラウスの襟元のリボンが器用にほどかれるのを、どうにかして留めようと、言葉もなく必死で抑える。が、逆にその手をつかまれて左手で頭上に縫いとめられてしまった。

おいおいおい、やばくないですか!?

「ちよっ!ちよっ!酒臭い!放してよ、酔っ払い!」

「酔っ払い?俺は酔ってなどいないが」

「出たよ、酔っ払いの常套句、『ぼくは酔ってません』が!お願いだから放してよ、痛い!」

叫べども、抵抗はむなしく銀砂の海原に吸い込まれる。

「聞こえんなあ?お願いは、もつとかわいらしくするものだぞ。お願いの仕方くらい、この俺の半身なら覚える」

「うるさいこのバカー!」

その間にも、リボンはあらかた解かれて、襟元が一気にくつろぐが、当の私はくつろぐどころの騒ぎじゃない。シンザの顔が降りてきて、首元にうずめられる。首筋を冷たい感触が這い回った瞬間、なぜか死を予感した。

気づけば懐かしいウサギの顔が走馬灯のように脳裏を駆け巡り……

「あにじゃ。あにじゃ。らぶしーんじゃ!ねえやんと、あの人でなしとのらぶしーんじゃ!」

「しっ!聞こえるから黙って見ときい、弟よ!」

「あにじゃ、なんだか、ねえやん嫌がつてるように見えるねんけど

……」

「おとうとよ、あれが手口やさかい、よう見とき!」

「じゅ、じゅうはちきんじゃなあ……!」

ひそひそと。

ささやき声が聞こえてきて、シンザの体がびくりと大きく硬直した。

額を押さえるシンザを押しつけ、懐かしい声に胸がいつぱいになりながら声のしたほうにどうにか首を傾けると。

彼らが、いた。

夜闇に映える青白い炎。

頭のとっぺんから生えた炎の長い両耳を、今は目隠しのように両目に当てて、炎山のウサギのランカ君とレンカ君が、耳の目隠しの隙間から、ちらちらとこちらを伺っている。

どうやらいつの間にか彼らの名前を呼んでいたらしい。

『名前を呼べばいつでも駆けつける』

とは言っていたが、まさか本当に名前を呼んだだけで来てくれるとは。

脱力して肩を落とすシンザの体の下から抜け出して、今の私にとっては救世主に他ならない彼らの側に駆け寄る。

「じょうちゃん、おとなになつたなあ！」

「ねえやん、久しぶりいい！会いたかったー！」

久しぶり、と言ってもこの間別れたばかりなんだけど、なんだか胸がいつぱいになって、ランカ君たちが抱きついてくるのを全身で受け止めた。

か……かわいい！

ひとしきり手を取り合って再開を喜んだあと、くるりとシンザに向き直る。

「じゃ、そういうことで！私たち、つもる話もあることだし、テントに帰るねーじゃ、お休みー！」

身を起こし、方膝に頼杖をついてこちらを睨みつけてくるシンザの目が怖いが、気づかないふりをして、手を振った。

「一度に二匹の召還か……本当にわけの分からない女だ」

脱兎の如き速さで遠ざかってゆくトウコの背中を見つめながら、苦々しげなつぶやきをもらす。せつかくからかってやるうと思っただのに、こうもあっさり逃げられては肩透かしもいいところだ。

15、6本ほど飲んでやっと酔える酒を、3本飲んだだけで酔ったと勘違いされ、腹だたしいことこの上ない。なのに、なぜか、今までにないくらいの充実感に心が弾み、高揚感に体さえ浮き立っている。

これはトウコの言うとおり、やはり少ない酒で酔ってしまったのかもしれない。

「お前にくれてやった指輪の意味を……いつか教えてやらねばな」

シンザのつぶやきは誰の耳に届くこともなく、銀の砂漠に吸い込まれていったのだった。

一部、やっと終わりました。

予定では7話で終わるはずでした。変ですネ！

ここまで読んでくださった方に、心からお礼を申し上げます。

本当にありがとうございます。

主人公たちの関係が思うように進まず苦戦していますが、ラスト目指して書ききろうと思います。

1 / 異世界にて、居候。

「ぜえええつつつつつたい！イ・ヤ！ですからね！！」

泣く子も黙る五神官、と表現されることもある、ただならぬ雰囲気をお持ちの男女五人を前にして。

私はそれでも、もう何度目になるか分からない否定の言葉を繰り返していた。

焰火宮と呼ばれるシンザの拠点地に滞在して7日が過ぎた。

シンザさんの自宅訪問 in 異世界。なーんて軽い気持ちでそこを訪れた私は、昼間でも青白く発光して見えるその巨大要塞を前にドン引きしてしまった。

実際そこで生活するに当たっては、トイレに行くたびに迷子になり涙目、入浴するのに何人も介添えが何処からともなくわらわらと群がってきて絶叫、といった具合に常にトラブルとカルチャーショックのダブルパンチを喰らいまくる始末。おかげさまで、今は何をしてもまず余計な監視の目がないかチェックしてから行動に移すようにまでなってしまった。

そうして紆余曲折の後に与えられた、超豪華な客人用の部屋で今は寝泊りをしているわけだけど、ここもどうにも落ち着かないんだよな……。

何せこの部屋、雑誌でしか見たことのないくらい豪華な客室なのだ。上等そうなあめ色の材木のローテーブルとふかふかのソファーが配置された応接室、書斎、天蓋つきベッドの存在感が半端でない寝室まで完備された部屋に、今まで五畳の和室に布団を敷いて寝ていた私はどう順応したらいいのやら。

閉所恐怖症ならぬ豪華恐怖症の私が苦肉の末に編み出したのは、

応接室のローテーブルを端のほうによけ、ソファを背もたれ代わりに地べたに直接座ってくつろぐ、という方法。

これなら眠くなったら絨毯にそのまま転がって眠ればいいし、いちいち寝室まで行かなくても事足りる。

ベッドを使わないから私が滞在することで毎日シーツを洗ったり替えたりしてやる必要も手間も省けるし一石二鳥だよ。

今もこうして五神官の面々を前に応接室の地べたに正座し、キツと彼らを見上げつつ、冒頭の発言を繰り返しているのだけど、そんな私に呆れと困惑の視線が雨のように降り注いでいるわけ。

「……まあ、そう仰らずに。マルーシャ産の薔薇茶はいかがですか？落ち着きますよ」

そう言いながら私の返事を待たずして、カップにお茶を注ぎ始めたすらしとした男の人を、私は苛立ちのこもった目で睨みつけた。彼の名はセルフフォイさんといって、シンザの片腕とまで言われているらしい。

さすがあの根性悪の片腕だけあって、『半身』だと紹介された私を視界に入れた時の反応は今ままで一番最悪だったことから、あまりいい印象を持ってないでいる。……こんな美形のくせに鼻からお茶を噴出するってどんだけビツクリしたんだろう。

「いらない。それよりこの不毛な言い争いを早く終わらしたいんですけど！」

「勿体無いから飲んでください。まあとにかく言い争いを終わらしたければ頷くことですね。一体何がご不満なのですか？」

「シンザと同じ部屋で寝ろっていう、あんたのその提案がに決まってるでしょーが！」

ありつただけの音量をかき集め、叫んでやった。

そう。焰火宮到着早々、私の寝室として案内された部屋はこともあるつかあのシンザと同じ部屋だったのだ。

布団4枚を横一列に並べたよりも大きなベッドはそれ一台しかなく、当初「シンザ様とこちらでお休みください」と言われた瞬間には、天蓋から垂れ下がった天幕を引き裂いてやりたい衝動をこらえるのに大変だった。

思い出すのも忌まわしい、あの砂漠での出来事以来、なんとなく気まずくて、私はなるべくシンザに近寄らないようにしていた。儀式やお披露目の晩餐会やらの打ち合わせがあるからと呼ばれてもお腹が痛いだとか、何かと理由をつけて顔を合わすことを回避していたのだ。

そりゃ本人は酔っ払って覚えてないんでしょうけど……あああ、一発グーで殴ってやればよかった！

こぶしを握り締め、わななく私を、わざとらしい咳払いが現実を引き戻した。

「まあ、なんだ。照れてるんだな」

とりなすようにガジャさんが言葉をつむぐが、相変わらず上半身裸なせいで、ふざけているようにしか聞こえない。と、というか怒りを煽るね、裸で発言は。

「照れてない！嫌なの！酔っ払ったあいつと同じ部屋にいたら何されるか……」

「でもお、ナニ、をするためにい、同衾されるのでしょー？」
「……！」

鈴を転がすような可愛らしい声がつむぐ言葉に思わず絶句して、セルフォイさんから渡された紅茶を落としそうになった。

硬直する私を尻目に「ねえ、そうだよねえ？」などと言いながら、激しく目をそらしまくる男性陣に執拗に意見を求めている、金色の巻き毛にヘーゼルナッツの瞳の彼女の名は、クレアさん。

御伽噺に出てきそうな可憐な容姿でありながら、その愛らしい唇は先ほどから、齒に衣着せぬえげつない発言を連発していて、ただでさえ磨り減っている私の心をさらに磨耗させていた。恐るべし、天然。

「ナニをするかはともかく！シンザ様がお望みである以上は、とにかく今日こそは何としても要望を飲んでいただきたい」

「シンザ様がこんなやつとナニするわけないよ！もういいじゃん、本人が嫌だつて言ってるんだからさ、馬小屋でも鷹小屋でも、そこらへんにゴザでも敷いてやって転がしとけば？今だつて絨毯に直接座ってるんだから変わりやしないよ。……大体なんで僕がこんな奴の説得に付き合わなきゃいけないんだ！」

アドラメルクがとうとうかんしゃくを起こして頭を掻き毟った。

「ソファーにも座らない野蛮人と議論するほうが間違っている。僕は忙しいんだ、これ以上付き合ってらんないよ！」

苛立ちに身を任せた宣言と共に、アドラメルクが荒々しく大股で部屋から退出してしまうと、あとに残された私はなんとなく気まずくなつて肩をすくめた。

まあ、先ほどからかれこれ一時間はこの議論を続けているから気持ちは良く分かる。ゴザ云々の発言はともかく。

沈黙をため息で破りつつ、カガリが私をかばうように、私の前に

立つ。

「……もうこれ以上話していても、トウコ様がお嫌でいらっしやる以上は仕方がないのでは？セルフォイ、ひとまずはこれまでどおり第一級客人用の寢室を使っていたらどう？」

さすがカガリ、話が早い。

だけどセルフォイは全く聞く耳を持たず、頑として首を横に振った。

「いけませんね。もうトーコ殿が滞在されて7日が過ぎるというのに、いつまでも客人用の寢室を使われていては他の者たちの不信感を煽ることになります。すでに、トーコ様が真にシンザ様の半身であるのか疑問視するものたちも現れてきたというのに」

「しかし、次の満月には契約の儀式と披露目の晩餐があるのだろうか？儀式とシンザ様の宣告があれば誰もトーコ様の素性を疑問視するものなどいなくなるだろうし、それまでご本人のお好きなようにしていただいたらよいではないか」

カガリ、頼もしい……！思わず両手を組み合わせてカガリの背中を見つめる。漢字が好きだったり、変にまじめすぎたりして少し変わったところもあるけれど、この世界では一番頼りになるのはやっぱりカガリだ。

しかしセルフォイさんは無情だった。

「私だって出来ることなら、このように花人らしからぬ花人をシンザ様と同室にすることなど避けたい。しかし、シンザ様自らあのように浮き足立って、部屋や寝具の調度品を替えていらっしやる所を目の当たりにした以上は……しかしなんだってこんな少女に……物好きな……まさか乱心か……？」

最後らへんのつぶやきはよく聞こえなかったが、意志固く唇を引き結んで額に手を当てている様子から察するに、全く一步も譲らなさそうだ。堂々巡りの議論に、思わずため息が漏れる。

とりあえず渡されたまま手付かずだった紅茶を一口飲んで、眩暈に似た芳香に目を閉じた。

「ご心配なさらずとも、シンザ様が好んで寝室に使われているお部屋は、他にもいくつかの客間を抱えております。どうしてもおっしゃるのなら、部屋を同じくしてもお休みになる場所をたがえる事は可能ですよ」

目を開けると、セルフオイスさんの渋面が私を見下ろしていた。その表情の端々には疲れや苦労が滲んでいて、よくよく目を凝らせば目の下にクマまである。ああ、なんかこの人、苦労性っぽいなあ。

日本人にも多いタイプだ。真面目さが祟って余計なことにまで気を回しすぎ、自分を追い詰める完璧主義者。私も日本ではどちらかというと、そういうタイプだったもんなあ。こっちに来てからは規格外なことの連続に価値観も崩されたおかげで、細かいことは流すというスキルを手に入れたけど。

「シンザ様の半身だってだけで、いつ首を掻つ切られるか分からないってのに、それでも客人部屋を選ぶかい。半身の嬢ちゃんも大したタマじゃねえか」

「そうですね。いくらちよー強固な結界に守られた焰火宮でも、絶対の安全とは言い切れないしいー。内部に間者でもいて、一人の所を狙われたらおしまいですなー」

「……………つて、ええっ?」

セルフオイスさんのクマに気を取られていて、ガジャさんとクレアさんの剣呑な会話を聞き流しそうになって、慌てて私は立ち上がった。

「ちょっと、首を搔っ切られるってどういうこと」

「花人の嬢ちゃん、あんた、自分が何だか理解してんのか？シンザ様の、半身だぞ？あんたが殺されればシンザ様は再び半身探しをしなければならぬし、シンザ様の継承されている神妖の力まで弱体化するとあっちゃあ、シンザ様と同じく東の神妖を狙う継承者たちにこそって命を狙われるわけだよ」

ガジャさんは昨日の晩御飯は何だったか話すような気安い口調で恐ろしいことを言っただけだ。

シンザは神妖を継承していないから、力を弱めるためも何も、私を殺すメリットは無いのに。砂漠で聞いた秘密を思い出し、暗い気持ちに捕らわれかけるが、今はそれどころじゃない。

私が命を狙われるって！？

あわあわと口元に手をやる私に、ガジャさんとクレアさんがさらに追い討ちをかけるように哀れみの目を向けてくる。

「しかもお、トーコ様の場合、すでに宮殿内にも、ちょーいっぱい敵がいますね。突然現れた半身とやらに、憎しみを募らせている者たちもわんさかいるみたいですよ」

「ああ、シンザ様も来るもの拒まずなお方だからなあ……」

「その点、ガジャは安心ですねえ」

「ふん。俺は一点集中型なんだよ！」

よく分からない呑気な会話を繰り返している2人だが、背中を伝

う恐怖感の方が強くて突っ込むことも出来ない。

今こうして立っている間にも、私の命を狙って刃物を研いでいる人間がどこかにいるかもしれない。そう思うと、この場所が急に針のむしろに変化したみたいに住心地悪くなってきた……。

身じろぎする私を冷めた目で見やって、セルフオイさんが鼻を鳴らした。

「だからシンザ様のお部屋に行けばよろしいのです。シンザ様のお部屋は、あの方の施したさまざまな術のおかげで常に強力な結界が張られているような状態ですし、お休みになる時も、あの方の隣ほど安全な場所はないでしょうし。あ、そうそう、北の大陸継承者がひどく残忍な奴でしてねえ。おそらく先日の上級妖魔騒ぎも奴の仕業なのですが、今回も刺客を送るくらいの事はするでしょうね」

「うそ……」

脳裏に、あの時の少女のものとは思えない残酷な微笑がよみがえり、思わず身震いする。

「まあ、余計なちよっかいを出される前に、彼らには晚餐の夜会への招待状を送りましたよ。謹んで出席するとの返答も得ております」

セルフオイさんが、いつのまにか両手で握り締めていたティーカーップを私から取り上げ、隅のテーブルにおいてある銀細工の見事なトレイにのせて片付け始めた。

と、ガジャさんが嫌そうに顔をしかめた。

「げっ、北のあのキザ野郎がここに来るのか？」

「こちらの目的は、招待ではなく監視ですがね。正式に大陸賓客として招かれたのであれば、妙なマネはしにくいでしょう。南の統治

者たちにも招待状を出してます。こちらは返事待ちですね」

「相変わらず腹黒いねえ、さっすがセルフオイ！腹黒冷血男！」

「まあ、トーコ様の命を狙っているであろう奴らに比べれば、私なぞ羊のようなものですよ」

「そうですね」

にこやかに笑いあうガジャさん、セルフオイさん、クレアさんを前に、私は自分の頭がだんだんうなだれていくのを感じていた。

「……で、トーコ様。お気持ちはお変わりなく、一級客室を使われますか？もちろん、その場合もこのカガリが命をかけてトーコ様をお守りいたしますから」

カガリが私の顔を覗き込んで優しく手を握ってくれる。その暖かさを感じながら、私は心を決めた。

彼らの話が何処まで本当なのかは分からないが、カガリがこうして励ます以上、私が命を狙われる立場だと言うのは本当らしい。

勝ち得たい神妖と戦えばいいだけだと思っていたが、大陸継承者どうして争わなければならぬとは、とんだ落とし穴だ。

悪態をつきたい気持ちをごとこらえ、カガリの手を握り返す。

カガリは命に代えても、と言ったけど、この尊い友人の命を、自分の安全と引き換えに危険にさらしたくない。

それに、多分、いや、確かにシンザは強いのだ。

私を守るかどうかは謎だけど、いざと言うときには、半身を失うと言うリスクを考え、きつとそれなりの行動をとってくれるだろう。何も同じベッドで寝なくても、書斎や応接間で寝てもいい。

うん、生きてこそ、だ。日本に帰るのだって生きていないと意味がない。

腹をくくろう。同じ部屋でも、書斎に引きこもって顔をあわせないうつろにしよう。

「セルフオイさん、やっぱり部屋、シンザと相部屋でいいです。ただ、同じ部屋を使わせてもらう身でありながらおこがましいんですけど、条件があります……」

こうして私は、色々細かい条件をつけつつも、シンザの部屋に居候、という情けない状況を選び取ったのだ……。

あ。

そういえば、継承者争い関係以外に私を恨んでいる人たちって、一体誰なんだろう。

1 / 異世界にて、居候。(後書き)

次回。本編ヒーロー、さらに男を下げるの巻です。

こんなゆるい感じで第二部が始まりましたが、読んでくださった方、お気に入りしてくださった方、そうでないかたも、お時間とお手間をかけていただき、本当にありがとうございます。

2、炎王の部屋

シンザ、お前には落胆した

父の凍りついたまなざし、突き放す言葉。
愚かな我が子を慰める親のそれではなく。
弟子の失態を諫める師のそれではなく。
友人の嘆きを励ます友のそれではなく。
まなざしも、言葉も、もはや何処にも暖かみの境を余しておらず、
ただひたすらに、拒絶された。

お前は人であって、人でない。

お前には落胆した

父の言葉が宵闇の中から腕を伸ばし、どす黒い感情を従えて、彼
を奈落の底へ連れてゆく。

と、ふいに。

シンザ、あなたは立派よ

星の光のようにささやかな、かすれた囁き。
しかしそれはいと簡単に彼の胸へ届いた。
先ほどまでの恐ろしいあの腕は消え、代わりに安堵が胸いっぱい
に広がる。

訪れる幸せなまどろみの狭間で、揺れる黒髪と、確かに自分を見
つめるその瞳を思い出した。

ありふれた色彩のそれらが、なぜか心に焼きついていて。

ひどく、美しく思えるのだ。

隣で、女が艶かしい嘆息と共に寝返りをうつた。軽い振動が横にいたシンザにも伝わる。もともと熟睡していたわけではない。彼はゆっくりとその目を開け、隣で今は彼に背を向けている女を眺めた。昨晩暗闇で見た時には、美しく結い上げられていたその金髪は、今はほどけて肩に背に、緩やかに流れている。まるで黄金の川のようだとシンザは思った。無論、その川で溺れるはずもない。

情事の名残を残しかすかに乱れたその後姿を、シンザは何の感慨もなく　むしろ多少の嫌悪を持って見つめる。

焰火宮における神職の最高位である、神妖ギイスカル継承者。

その実、件の神を従わせていないものの、シンザはそう呼ばれている。

シンザと暁の聖母を筆頭に、現在神殿に駐在する者は大きく分けて巫女、神官、そして彼らに使役される炎山の妖魔たちに分けられる。

巫女・神官には妖力の強さを認められて入殿した者と、大陸22国から「焰炎宮でシンザに仕えた」という実績とあわよくばお側仕えへ、の期待をもって派遣されたご令嬢、ご子息のコネ入殿組とに分けられる。厳しい試験を経て巫女や神官になった前者は比較的真面目にギイスカルを奉じ大陸平定に奔走しているのだが、後者の者たちは、自国から送られる金子をせっせと浪費しつつ、いかにして大陸の統治者の気を引くかに飾り立てた頭を振り絞る毎日であった。シンザの元へ、神妖に最も近い尊き人間への憧れを持つ者がたとえ一夜限りでもと情をこいねがい、やってくることは珍しいことではないし、気が向いた時にはその中から見栄えのするのを選び、寝所に侍らすことも珍しいことではない。

いつもとさして違わない選択に、昨晩気まぐれに興じただけのこ

と。

なのに毒沼の泡の如く、嫌悪感が湧き上がっては苛立ちを生み、苛立ちが膨らんでは己の行動を罵倒する。

それを人は後悔と呼ぶのを知ってか知らずか、シンザは侮蔑の視線を最後に一目くれてやり、さっさと寝台から降りた。床で情欲の名残を示し散らばっている衣服を拾い、手早く身に着ける。

朝の光は分厚い漆黒のカーテンに遮られ、弱弱しい光となって部屋を薄闇の中浮かび上がらせている。いつもならとつくに起きている時間を寝過ごすってしまった。

朝の支度のための水盆を巫女見習いに持ってこさせようか、その前に女を部屋から追い出すか考えていると、女が調度目を覚ました。

「……炎王様」

女はシンザの冷ややかな視線にも気づかず艶やかに微笑むと、まろび出ようとすると胸元のふくらみをシーツで押さえながら身を起しました。

「昨晩は、この卑しき身に有り余るばかりの恩情をかけていただき……」

「ああ、お互い良い思いをしたな。もういい、下がれ」

「今宵もお会いしとございます。お約束していただけますか？」

「約束？戯言にいちいち約束など……まあ、また気が向けば呼んでやる」

シンザの言葉に、しかし女は確かにシンザの興味を得たという確信を持ったのか、口元に笑みを乗せた。

「うれしゅうございます。それにしても……連れて帰られた方のお姿が見当たりませんが、やはりあのお方が炎王様の半身だと言う

噂は偽りだったのですね」

女の言葉に、シンザの方眉が跳ね上がった。

「余計なことに口を滑らせるより、夜伽の技の方を磨くことに専念しろ、その方が向いている」

シンザは口元だけの笑みを優美に形作り、顎で部屋の扉を示した。出て行け、ということらしい。女は己が失言をしてしまったという事実と同時に、シンザの意にも気づき蒼白な顔でうつむいた。

「確かお前はアザラ国の王家縁の者だとか。持って生まれた妖力を磨くこともせず、我が神殿にのさばり続ける巫女など俺はいらないのだが……」

追い討ちをかけるシンザの言葉に、女はこれ以上ここには強制送還されかねないと危機を感じたらしい。涙の滲むまじりをぬぐい、あわただしく衣服を身にまとうと、乱れ髪もそのままに一礼して部屋から退出してしまった。

「……忌々しい」

その後ろ姿に目をやることもせず、シンザは苛立ちを収めきれないまま、ソファアに荒々しく座る。

脇のローテーブルに置かれた切子ガラスの水差しを取り上げると直接口をつけ、一気に飲み干した。

腹だたしい。いらいらする。

肩で大きく息をつきながら、脳裏に半身の姿を思い浮かべる。もう一週間姿を見ていないが、やけに鮮明にあの能天気な笑顔がちらちらついて余計に神経を圧迫した。

「あいつ。あの薄乳女。くっそ、なんでこの俺が……」

つぶやいて、ソファアのクッションを取り上げる。彼が座るこの大きなソファアもこのクッションも以前は置いていなかった。半身を連れ帰ってからすぐに部屋に用意したもののなのだ。

なんとなく、あの女がソファアで猫のようにくつろぐ姿を見てみたかった。大きな猫を飼ったみたいで面白いではないか。

運び入れた大きな姿見も、衣装を詰め込んだ着替えのための部屋も、窓辺には花を毎日飾るように手配したことも、あれもこれも全て……全く無意味だった。

「七日間連続で！会食の誘いも打ち合わせの会合も断りやがって……あの女！この俺の誘いを……信じられん……客室に住み着いているとは……」

言葉になりきれない思いを噴出させながら、脳裏に浮かぶ女の笑顔を打ち消しては思い返してしまうという不毛な現象としばし戦っていたためか、部屋の扉がノックされていることに気がつかなかった。

ようやくノックの音が無遠慮な叩きつけるような音に変わって、シンザはふと顔を上げた。

彼とあるうものがどうも調子が狂っている。

苦々しく思いながら投げやりに「入れ」と声をかけると、言い終わるよりも先に扉が開けられ無遠慮な足音をたてながら、白みがかった銀髪の青年が飛び込んできた。

大陸統治者たるシンザは、もともと恐れ多い存在である以上に、神殿ではその力無き者への厳しさや冷徹さも多く知られている。彼に親しく接するものなど数えるほどしかない。

その数えるものうちの一人　セルフォイはソファアに沈む主

を見つけると一瞬眉をひそめ、しかしすぐに爽やかな笑顔をつくるとシンザに一礼した。

「お早うございます、シンザ様。ところで、アザラ国の姫巫女が先ほど泣きながら駆けてゆくのを見たのですが」

朝の挨拶もおさなりに苦言の気配を滲ませた言葉に、シンザはこともなげに片手を振る。

「王家やそれに次ぐ階級のものを姫巫女などともてはやし我が神殿に受け入れる、下らない制度を廃止しようかと相談したただけだ。それもさわりだけな。勝手に泣いて出て行った」

「しかし、王家血筋のものより強大な妖力の持ち主が生まれることも多々あることも事実です。巫女修行中に覚醒するものもおりますし、一概には悪習だとはいえませんが」

「ふん。俺はただ、力なきものが疎ましいだけだ。力なきものが小ざかしくあれこれと言いつけて擦り寄ってくるのが忌々しい」
「……で、あなたの、力なき半身様についてなのですが」

たおやかで女と見まごう美貌に知られるセルフオイだが、『
返り血のセルフオイ』の異名は伊達ではない。凄みのある笑顔を浮かべて毒を含んだ言葉をつむぐ彼をシンザはじろりとにらみつけた。

「トーコがどうした」

「今日よりこちらに生活拠点を移されるようです」

「…」

思わずソファアから素早く身を起こしたシンザをつんざりと見やっつて、セルフオイは小脇に挟んでいた書類の束から一枚の紙片を選び取り、朗読した。

「『その一、飲むなら酔うな、酔うなら触るな』

『その二、半径2メートル以上の接近禁止』

『その三、応接室を譲れ、ベッドはくれてやる』

そのよ……シンザ様、これは私が作成した書類ではございません。私はただ、トーコ様の希望を文章におこしただけですので、そのように私を憎憎しげに睨むのはいささか筋違いかと」

言いながら、読んでいた紙片をシンザに手渡す。

「なんだ、これは」

「シンザ様への契約書ですね、部屋を共同で使用するにあたっての決め事、とのことですよ」

「なるほど」

さつと目を通しただけで早速その契約書を破き、タダの紙切れにしてしましながらシンザは疑わしげにセルフオイを睨みつけた。

「……で？あの薄乳はこのくだらん御託を携えて、結局は俺の部屋に来るんだな？本当だな？」

「まあ、そのようです」

「うん、まあ……いいだろう……来るのなら、いい」

何がいいのか、なにやら納得して一人頷く主人を、セルフオイは感情のこもらない声でねぎらった。

「よかったですねー。北や南の統治者たちの半身にも引けをとらない、すばらしい半身に恵まれてー。我が大陸は生涯安定ですね」
「半身契約の儀をへて正式な半身となれば少しは力も強まるだろう」

「近いうちには北、南、両方の統治者たちと戦わなければならな

いのですよ。並みの妖力では……」

「俺が負けると思っているのか？」

シンザの問いに、セルフオイは女と見まごう麗しい美貌を、しかし今は冷たく翳らせた。

「あなた様お一人の戦いであれば疑う余地はございません、ですがこれは半身を引き連れての戦い」

「分かっている。少し甘やかしすぎたのは確かだな。カガリとアドラメルクに、すぐにでも鍛錬の用意をさせる。あとは……滞っていた儀式の打ち合わせだな」

面倒そうにしながらも、その語尾は踊っている。めったに見られない主人の態度に冷たい表情を驚きでわずかに崩しつつ、セルフオイは頷いた。と、シンザが顔を上げて眉を寄せた。

「そういえば……半径2メートルとは、どのような単位なんだ？」
シンザの問いに、当然異世界のことなど知るはずもないセルフオイは首をかしげ……

やがて、「人差し指二本ぶんくらいでしょうか」

という結論を適当につけてお互い納得したのであった。

3 晴れやかな日（前書き）

新しい人たちが出てきます。彼らの視点ですので主人公は一休み。

3 / 晴れやかな日

白の汚されない街、と謳われる街がある。

貿易中枢都市、ジャルハ。

街の東西南北をそれぞれ強固な門に守られた、西の大陸の各国に合計八ヶ所点在する商業都市のうちの一つだ。

「さあさあ、寄ってらっしゃい！破滅の砂漠の民から買い取った珍しい品々だよ！護符や、ナイフ、薬草もあるよ！今日を逃したら次の雨季まで仕入れがない、貴重な品々だよ！」

「西の門から山脈越えに出る旅のお方は是非持つてきな！幻獣ケラ又の胃袋で作った、腐らずの水筒だ！これさえあれば水が妖術なしで一月はもつ！」

「お嬢さん、手にとって見てごらん……月の石で出来た耳飾の数々……このオババが妖術をこめた鈴がついているんだ。気になる男のそばで鳴らしてごらん、あつという間にお前さんの虜になるから……」

一年のうち、ほとんど不在を謳いその姿をめつたに見せない焰火宮の主、炎王シンザが帰還してから街は活気付いて、どこからともなく聞こえてきては響き渡っている旅芸人のシタールの音や子供の笑い声、商人たちの喧嘩っぱやい口調も常より浮き跳ねていた。

炎石に次いで希少価値の高い白亜石で舗装された街の目抜き通りは、往来を行き交う人々の足元をうつすらと映り込ませながら焰火宮へと続く、『不開の中心門』カリオアス・ゲートへと伸びている。

白の汚されぬ街、の通り名の由来となったこの道は、長い歴史の中でどれほど多くの人々の足や馬車の轍に踏みしめられようと、決してその美しい白亜の色を汚すことなく、今も白く輝いている。

「……………つくそ暑い……………」

頭を覆う白い布を小粋な金輪でとめた、小さな人影が剣呑な呟きをもらす。

一見するとただの布だが、その実、絹と羽で織られた高価な衣類を身につけたその人影は、高価ないでたちにはふさわしくない下品な悪態を先ほどから三歩進むごとに一度の割合で発していた。

「なーにが、白の汚されぬ街だよ、この歩道も、焰火宮も、どこもかしこもテカテカテカテカしゃがって、オヤジのハゲ頭かってんだ！ けっ！ なあ、ムーラ？」

「そうでしょうか？」

少年の横に寄り添い歩く、ムーラと呼ばれた男が首をかしげてみせた。

ひしめき合いつつ往來を行き交う人々の間を縫うように道を急ぐ二人連れだが、彼らとすれ違ったものたちはほぼ、例外なく一度ならずとも、二度、三度と後ろを振り返ったり、あからさまなものは指さしてまでして今見たものを再確認している。

少年はその原因に大いに心当たりがあった。大きく肩で息をついて隣を忌々しく見上げるが、当の漆黒の瞳、褐色の肌の美男は視線に気づかぬ体を装っている。

「おまえなー、露出狂じゃねーんだから、俺みたいにもーちつと肌、隠せよ。南の大陸出身だつてことバレバレだ。ただでさえド派手な顔してるんだからよー……」

少年に露出狂と評された男は、口元をわずかに笑みで持ち上げた。色とりどりの刺繍が施された長衣をわざと大きく胸元をはだけさせて着流し、ぴつたりとした革のズボンを身に着けた男は、一見すると酔狂な踊り子のようにも見えるが、その扇情的な着こなしが、男の纏うけだるげな雰囲気とよく合っていて、周囲に色気をだだ漏らす結果となっている。

「我が君はちんまりしてらっしやるから目立たずよろしいですね」

「あんっ！？誰がちんまりだ！」

「そう怒ってばかりいると余計に暑くなりますよ。足元の道を触って御覧なさいな、我が君。ひんやりと冷たく心地よいですよ。地下水脈と白亜石の熱伝導率の良さを利用して、冷たい空気が常に道を覆うように工夫されているようです。冷気を保つよう持続術も施されているようですし、なかなかよく考えられていますね」

ムーラは淡々と返したが、少年の怒りは収まらない。

「ふん。道つてのは、土を踏みしめてこそその道つてもんだろ！……まあ、確かによく整備はされているけどな……市の規模は俺の大陸の商業オアシス区にやや劣るくらいか」

「西の砂漠、その先の山脈地帯との中継地点ですからね。沿岸部の港町にも通じる門もあるし、何より焔火宮お膝元とあっては栄えぬわけがないでしょう」

「栄えすぎて俺は嫌だね。テレッサもそろそろ起きるころだし、早く宿屋に戻ろうぜ。あいつ、腹減らしたらめちやくちゃ機嫌悪くなるからな　あ、桃の果実水だ！あれ買ってこい、ムーラ」

「はいはい」

「黄金蜜の濃いマルーシャ産の桃かどうか聞いてから買えよ！」

「わがままですねえ」

しなやかな肢体を猫のように器用にくねらせて人並みをあしらいつつ、少年の示した果実水の屋台にムーラがたどり着くのを確認すると、少年は鼻を鳴らした。

先ほどから自分たちが注目を集めているのは知っている。その理由が連れのムーラの派手な外見だけではないことも。

ムーラの濃い褐色の肌は、この大陸では珍しい。かく言う少年も褐色の肌の持ち主だが、こちらは用意周到にフードとターバンで目立たぬように隠している。肌を隠すように何度忠告しても聞き入れなかったムーラにも腹が立つし、この人の多さにも辟易する。

場違いなほど美しい男を従え、少年でありながらあれこれと偉そうな態度を彼にとり続けていることも彼らが目立つ理由の一つになっているのだが、少年はそれには気づかないまま、屋台でなにやら話し込んでいるムーラの後姿をにらみつけた。

やがて戻ってきたムーラは頼んだ桃の果実水だけでなく、手に手に蜜林檎やら甘胡桃のつまった籠やら携えていた。買った、というよりはその美貌に気をよくした女店主がご機嫌取りに押し付けたのであるうそれらを一瞥して、少年は口を尖らせた。

「ガキじゃあるまいし、なんでもかんでもホイホイ貰うなよ」

「どうやら私のことを花売りも兼ねた踊り子と思ったようです。旅をしていると言ったら宿屋をしつこく聞かれました」

「花売りどころか人間でもねーのにな」

「ご機嫌斜めですねえ」

「目立つお前が気に食わないだけ！あと、この大陸と、焰火宮のやつらも気に食わない！あー、早く帰りたい！とりあえずは宿に戻って、あの憎たらしい白頭と陰険男に泣きっ面かかせてやる作戦をたてるぞ！とりあえず奴の半身を毒殺でもするか？」

「そんな派手なことをしたら予定よりも早く隠密行動でこちらに渡った意味がないでしょう。私は早く件の半身にお会いして仲良くになりたいですね」

「けっ！争奪者相手に仲良くもくそもあるか！」

ムーラから手渡された果実水を一気にあおり、一方的な文句をまくし立てつつ、少年は苛立ちに任せて突き進んだ。と、いつても露天商で両脇をびっしり埋め尽くされたメインストリートは人波であふれんばかりに混雑しており、そう簡単には歩調を早めることは出来ない。

専用の殻剥き機で押しつぶさなければ剥けないほど硬い甘胡桃の実を、親指と人差し指でつまむだけで割り、のんびりと口に運び入れながらムーラは少年の後を追った。

やがて程なくして二人は往来から外れ、小道をいくつか曲がり、路地裏にたどり着いた。

あれほどやかましく照り付けていた太陽も、ひしめき合いせり出し

た屋根にさえぎられ、日中だというのに暗い路地には先ほどまでの喧騒が遠く、かすかなざわめきとなって響いているだけだ。

きよろきよろと左右を見渡し、右に曲がるうとした少年の袖を、ムーラはひよいとつまんだ。

少年の体が反動でつんのめる。

「なにすんだよ！」

「宿はそつちじゃありません。いつも言っているでしょう、勘やその場の勢いで行動するのはおやめなさい、迷子になりますよ」

「ならねーよ！俺をガキあつかいすんな！」

「もちろんしませんよ。でも我が君はすこおし、お背が低くてらっしやるので、いくら私とて一度見失ってしまえば見つけ出すのに時間がかかってしまいますからね、気をつけなくては」

「だからガキ扱いすんなってば！」

振り返り、怒りに瞳を燃やしムーラを見上げる少年は、顔立ちに幼さが残れども、どこか他者を寄せ付けない威圧感を纏わせている……のだが、ムーラは柔らかに微笑んで全く意に介した様子もない。

ため息をついた少年が何か嫌味でも言おうと口を開けた瞬間、か細い悲鳴が路地に響いた。

声のした方に目を転じると、ちょうど前方の民家のドアが荒々しく開き、中から突き飛ばされたと思われる勢いで子供が転がり出てきたところだった。

7、8才くらいの少女だ。少年よりもさらに幼い顔立ちには地面に転がったときにできた擦り傷のほかに、殴られたようなあざがいくつか浮かんでいる。

「ああ？なんだ、おま……」

地面に倒れる少女を迷惑そうに覗き込んだ少年だったが、その少女の顔や体を瞳に捕らえたたん、口を引き結び、眉を寄せた。

「おまえ……」

少年の言葉は最後まで発せられなかった。

「いい加減におしつ！この役立たず！拾ってやった恩も忘れて、売り物ひとつ捌きやしない！いいかい？今日こそ一つも売らなかつたら、今度こそ本当に追い出してやるからね！」

先ほどの民家から今度は女が飛び出し、罵声を少女に浴びせている。比較的裕福な人々の集う街でも、程度の差こそあれ貧民層は存在する。地面に伏して震える少女も、女の身なりも貧しいものだった。

「あーあーあー……醜いねえ」

少年のつぶやきに、女が初めて気づいたかのように肩を揺らして振り向いたが、そこにいるのが少年と、踊り子のような優男だとわかつた途端に忌々しげに顔を歪める。

「なんだい、アンタ。見世物じゃないんだからねっ！ここから消え失せな！」

「言われなくてもそうしたいんだけどさー。地面に女の子が転がってるから邪魔なんだよなー」

少年は無然とした表情で少女を見下ろす。黙って成り行きを見守っていたムーラが場違いな微笑をたたえつつ、割り込んできた。

「起こして差し上げたらいいのでは？」

「やだ。なんで誇り高い俺が一般市民を助け起こしてやんなきゃなんねーんだよ。ムーラ、お前が起こしてやれ」

「テレッサ様に女性には優しくするように言われているでしょう？ テレッサ様にだけ優しくするのはなく」

「お……おれは別にあいつにだけ優しくなんかしてねーよ！」

少女を助け起こそうともせず、暢気な言い争いを始めた二人をいぶかしげに眺めていた女だが、少女がうめき声をあげて身じろぎしたことに気づくと、屋内にきびすを返してしまった。

……と思いきや、すぐにまた戻ってきた。手には籠を抱えていて、どうやらそれを取りに戻っただけらしい。女は手にしていたそれを中身ごと勢いよく少女の上にごちまけた。ばらばらと音を立て、それらが無情な雨のように降り注ぐ。

「これ……守護石か」

足元にまで転がってきた、その籠の中身 手のひらに乗るくらいの、小さな水色の麻袋を少年はつま先でつついて眉を寄せた。

「いいかい、そいつを夕方までに全部売って来るんだよ！」

女の命令は少女にとっては過酷なものらしく、少女の肩がびくりと大きく震えた。少女の様子は哀れみを誘うものであったが、女は怒

りを緩めるところかさらに唇を引き結び、忌々しそうに少女を見下ろすと、足取り荒く、今度こそ屋内に引っ込んでしまった。

勢いよく扉を閉める音のあとに残されたのは静寂と、転がるたくさんの小さな麻袋と、少女。

ため息をついて首を振ると、少年は少女の真横にかがんだ。しかし、一向に助け起こそうと手を伸ばそうとはしない。

「……なあ、おまえさ、いい加減起きたら？俺が起こすの待ってるの？悪いけど、俺、どんな状況でも甘える奴には手を貸さない主義なんだよね。ほーら、こんな嫌なこと言う奴の顔、睨み付きたいだろ？だったら自分の足で立ち上がれよ」

「厳しいですねー、相手はまだ子供ですよ」

「うるせーな。あの女とこいつの一芝居かもしんねーし、そうでなくともこんな茶番にいちいち同情してられっか。大体、立つ足があるのに立たねえ奴に子供もくそもあるかよ。椅子だって立つぞ。椅子以下だ」

「歩くからこそ人はつまずきも、倒れもするのですよ」

「はいでたー。ムーラのお説教ー。もういいからお前は黙っとけよ」
片手を振ってムーラをあしらうと、少年は少女の顔を覗き込んだ。虐げられることに慣れた、生気のない瞳に少年の意志の強そうな赤茶の瞳がうつる。

「おまえ、その肌の色……南の大陸の出身なんだろう？なんでここにいてるのかしらねーけど。俺も南出身だ」

「……おにいちゃんもなの？あたし……母さんに連れられてここに
来た。いらぬ子だからって、あのおばさんに渡されたの」

「お、やっと喋ったな」

少年の目が嬉しげに細められる。

「いらぬか、いらぬか、んなこと他者の判断に委ねるなよ。
おまえは、おまえが必要とする、おまえ自身だ」

「よくわからないけど……」

「要するに、誇り高き南の大陸の少女よ、立ち上がれってことだ」

「おにいちゃん、少し、変」

まぶしそうに少年を見つめ、少女はかすかに笑みを吐息に含ませた。
やがてゆっくりとはあるがその身を起こし、起き上がった少女に
少年は満足そうにうなずいた。が、隣で彼を見下ろすムーラの生ぬ
るい笑顔に気づくと、ふいに顔をしかめ、面倒見のよい性格を悟ら
れたくないかのように緩んだ笑顔をすぐに隠してしまう。

「それでいい、俺たち南の大陸の人間は誇り高く、何者にも精神を
汚されはしない」

「でも過ぎた自尊心は身を滅ぼしますよー」

「うるせーよ」

きめ台詞に茶々を入れられ、露骨に眉を寄せる少年は年相応に子供

つばい。先ほどの威圧的なまでの態度とは打って変わった様子に、耐え切れず少女の頬が持ち上がった。

「……おにいちゃん、ありがとう」

こぶしで目元をぬぐうと、少女はあたりに散らばる麻袋を拾い集めた。大事そうに一つ一つ拾っては、土ぼこりを払い籠に戻してゆく。

「なあ、それ、守護石の入った守り袋だろ？」

「炎山の鼻につく匂いがありますね。そよ風のように微弱な妖力ですが」

「中身も見てないのにわかるの！？おにいちゃんたち、もしかして妖術持ち？」

「……まあな」

少年は自分の足元にも落ちていた麻袋を拾い上げると、少女に投げてよこした。

「この子供だましのおもちやを売りさばくのがおまえの仕事なわけ？」

「うん。北の門か、西の門に行けば山脈越えや関所越えする旅の人がいっぱいいるから、そういう人にお守りとして売るのが。炎山のはぐれ妖魔にも効果があるし、水山や金山の妖魔に出くわしたとしても効果があるよ」

「何をおっしゃる。こんな微弱な妖力では、水山のハエ一匹殺せま

せんよ」

ムーラの言葉に舌打ちを返し、少年は腕組みをした。

「ったく、この大陸の奴らは何やってるんだ。国王や摂政官の監視も五神官の仕事だろーに、街ばかり飾り立てて、俺の大陸のガキどもに苦しい生活押し付けやがって……」

「この大陸は南のように唯一王を抱えているわけではないですからねー、あちこちに散らばる国家をまとめるのはやはり難しいのでしよう。炎王殿は内政に干渉しない主義らしいですし」

「ったく、どうしようもねーな!」

吐き捨てる少年に、少女が籠の中から麻袋を一つつかむと、おずおずと差し出した。

「あの、これ、起こしてくれたお礼。旅の方なんでしょう?お守り代わりに持って行って。ギイスカル様の加護が共にあらんことを」

「……大事な売り物なんだろう?勝手にくれてやったらあのババアに怒られんぞ」

「いいの、私が売られたときに母さんがおまけで押しつけたものだから、ただみたいなのだって言ってた。もっとちゃんとお礼がしたいけど、私、今はこれくらいのもものしか持っていない」

「……そうか」

少女の手から麻袋を受け取り、少年は深くため息をついた。こんな

ものでも少女の持っている唯一のもの、財産に違いない。彼女の身を切るような行為が痛々しかった。唇を噛みつつ、懐に複雑な思いと共に袋をしまいこむ。

そんな彼の様子を、にやにやと人の悪い笑みで眺めていたムーラは、少年の目が真剣に自分を見つめていることに気づき、即座にうんざりと首を振った。

「だめですよ、何を思いついたのか知らないですけど、あなたの思いつきはろくなことがない。だめですからね」

「まだ何も言っただけじゃん」

「思いつきや勘で行動すると迷子になると忠告したでしょう。おやめなさい。帰りますよ。テレッサ様もお待ちかねです」

「ムーラ」

「だめです」

「命令だ」

「……………」

少年の言葉はささやきに近い。だが何よりも抗えない力をもってムーラの口を閉ざしめた。

「卑怯ですねえ。子供のくせに」

「ガキあつか……………」

「私は何をいたしましょう？我が君、何なりとお申し付けください」
ふいにうやうやしく頭を垂れ、跪き、胸に手を当てるムーラに今度は少年が口を閉ざす番だった。

「では命じる……」

少年の微笑みは王者のように孤高で、気高く、美しい。

高潔な街の、薄汚い路地裏。

たった一人の少年に、男が膝を折って頭をたれる光景は場違いで、どこか滑稽で、だが、なぜか誰も近寄ってはいけないような神聖な雰囲気を持っていた。

少女は二度と彼らに会うことはなかった。だが、彼らの織り成していたその光景を、生涯にわたって何度も思い出すことになるのであった。彼女に誇りを取り戻させた、その不思議な人たちのことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9179m/>

花よりいづる異国の姫

2011年4月3日10時32分発行